戦国魔神ゴーショーグン
時異邦人
エトランゼ
ÉTRANGER
AM JuJu
作 首藤剛志
絵 天野喜孝
なにわ♡あい

戦国魔神ゴーショーグン 時の異邦人

首藤剛志

昭和24年8月18日、福岡県生まれ。脚本家。シリーズ構成も担当したテレビアニメ「ゴーショーグン」(56年)「ミンキーモモ」(57年)が代表作。アニメージュ本誌での連載小説も好評である。

天野喜孝

昭和27年3月26日、静岡県生まれ。アニメのキャラデザイナーが本職だが、最近はSFアートやコミックなどの分野でも活躍中。

なにわ♡あい

昭和33年11月18日、東京都生まれ。アニメのパロディで活躍するマンガ家。「ゴーショーグン」パロディの第一人者である。

似顔絵／なにわ♡あい

戦国魔神ゴーショーグン
時の異邦人(エトランゼ)
首藤剛志

第1章 〝運命の予兆〟より

……どこだっけ、ここ……
名も知れぬ街のホテルの一室で、レミーは目を覚ました。

Y. amano

第2章 "流血の威嚇"より

「血の洗礼を受けたものは必ず死ぬ」
謎の少女はレミーを指さした……。

第3章 "出口のない街"より

野獣は、もう一人のレミーの体をむさぼりつづける。
「やめて！　お願いだから、やめて！」

戦国魔神ゴーショーグン
時の異邦人(エトランゼ)
首藤剛志

目次

本文中イラスト……天野喜孝

これは、時という名の宇宙をさまよう
六人の戦士達の物語である。

プロローグ

異形の月が、果てしない砂の原に、凍った光を投げかけていた。
星も確かに見えるが、その輝きにまたたきはない。
空気には肌ざわりがなく、時すら止まっている。
沈黙の音が耳に痛い。
そんな砂の上に、女が一人、坐っていた。
女が何歳なのか誰も知らない。
おそらく本人すらも答えられないだろう。
時の感触のない砂の原野では、歳のことなど、とるに足らぬことなのだ。
だが、女は自分がレミー・島田という名であるのを知っていた。
ひとりぼっちで生き続け、次々に襲いかかってきた彼女の生き様への敵と、戦い続けてきた女だということも、しっかりと胸の中に刻みこまれていた。
……ひとりぼっち？　わたしが？……
止まっていたレミーの思考が、かすかに動き始めた。
やがて、金髪と呼ぶには、少しくすんだ色の髪を、かすかな風がすりぬけていった。
粉のような砂が風に流れ始め、時を刻み始めた。
レミーは、時の始動に気付き、立ち上がった。
待ちうけていたかのように、風は激しく吹き乱れた。
砂はたちまち、時の嵐となって、砂の原野を包みかくした。
……ここ、どこ？……

ひとりぼっちの筈のレミーのくちびるから声がもれた。
「みんな、どこにいるの？」
……みんな？……。そう、わたしはひとりじゃなかったはず……
レミーは腰のホルスターに手をやり、銃を抜いた。
全長二十八・三センチ、銃身の長さ十六・七センチ、重さ千三百三十二グラム、四十四口径で、銃身の後方に大きな円筒状の弾倉を持ち、シリンダーが回転しながら、次々に六発の鉛の弾丸を発射できる、一見古風なこの銃は、二十世紀の地球で使われたS＆W四十四マグナムM二十九に瓜二つだった。
いずれにしろ、銃の大きさ、発射の反動の強さ、どれをとってみても女には似合わない銃だ。
しかし、レミーは、こともなげに、グリップを握った右手の手首を左手で支え、銃身を頭上にかかげた。
引き金を引く。
轟音が時の砂嵐をぶち抜いた。
指に、手首に、肩に激しい反動が加わる。
銃声が砂嵐に吸い込まれると、元のすさまじい砂嵐のうなり声だけが耳を襲い続けた。
やがて、嵐の咆哮のかなたから、かすかに銃声が聞こえた。
一発――、そしてまた一発――。
別の方向から一発、また一発――。
銃声は次第にレミーに近づいてきた。

ひときわ大きな五発目の銃声が砂嵐をつらぬいた。
……五発の銃声……、みんなだ！……。どこ？　どこなの？……
レミーは、何も見えない砂嵐の中で目をこらした。
一人……、黒い影が、砂のカーテンの向こうに浮かび上がった。
そして、また一人……
レミーはほほえんだ。
さらに三人目、四人目、五人目……
五人の黒い影は、レミーの前で立ち止まった。
「真吾、キリー、ケルナグール、カットナル……、それからブンドル……。みんないたのね」
……そうだったんだわ。私は、この五人の男達と宇宙をさまよっていたんだ……
レミーは、自分に頷いた。
「ひどい嵐だ。くっついていないとはぐれるぞ」
真吾の口調はいつもボーイスカウトのリーダーのようだ。
「ここはどこなの？」
真吾の代わりにキリーがこともなげに呟いた。
「さあな……」
「これから私達、どこへ行くの？」
砂嵐のベールの向こうを見つめながら、ブンドルが言った。
「さあ、分からぬ。いつものことだがな」

ケルナグールとカットナルは肩をすくめた。
カットナルの肩にとまっているカラスが、一声、するどく鳴いた。
砂嵐はさらに激しくなり、レミーと五人の男達の姿を覆いかくした。
そこは、今、全てが時の嵐だった。

第1章　運命の予兆

それまで暗闇だった窓の陽よけ格子の外が、わずかずつ明るさを増してくる。
どうやら、このホテルの個室にも何日目かの朝がやってきたようだ。
薄明かりに浮かび上がるテーブルやイスやベッドは、ササン朝ペルシアの調度品を思わせる、古風だが派手なものだった。
ブーン――。
先刻から、かすかな羽音をひびかせて、一匹のハエが食物をさがして飛んでいる。だがハエは、少し早く起きすぎたようだ。
ホテルの個室の客は、まだ眠り続け、朝食はおろか、パンのかけらすら部屋の中に落ちていなかった。
ハエは所在なく飛び続けた。
いつもなら人間に嫌われ、追い払われるか、叩き落とされる危険に全身の注意を払わなければならないハエも、客が眠っている今は安心だった。
この部屋で動いているものといったら、ハエの他は天井でゆるやかに回る古びた扇風機しかない。
扇風機が何のために回っているのか、知る者はいない。
この部屋の暑さには、緩慢な速度で回転する扇風機が作るわずかな空気の動きなど、何の役にも立ちそうにないからだ。
そろそろ飛ぶのにあきたハエは、古びたベッドのシーツが動いたのに気づいた。
シーツの中の客が寝返りをうったのだ。
シーツの中から、長い髪の若い女の顔が現れた。

寝息をかいている女の顔は汗びっしょりだ。

ハエは、女の汗の匂いが気に入り、女の顔の上に降りた。ハエにとって、動物の汗も好物の一つなのだ。

顔の上をくすぐるハエの感触に、レミーはぼんやりと目を開いた。

本来なら、顔の上のハエなど、一瞬のうちに手の甲で払われて、床に叩きつけられていただろう。

だが、レミーは、ぼんやりと目をしばたかせただけだ。

女豹のような身のこなしと呼ばれたレミーですら、今朝は体がだるかった。

ハエは、ゆっくりとレミーの顔から飛び去った。

レミーは大きく息を吐いた。

……あついなあ……。なんてあついんだろう……。冷房もなければ、風通しも悪い……。気温は……

レミーは、のろのろとベッドサイドに置いた腕時計に手をやった。

その腕時計には、時間の他、計算機能、高度測定や、温度、湿度等……様々なデータがデジタル表示できる機能が備わっている。

レミーは、腕時計のリューズを温度測定に切り換えた。

……百十三度か……。百十三度!?……

レミーは目を疑った。だが百十三の数字の横に並んだFというアルファベットに気付き、肩をすくめた。

……なんだ。華氏表示か……。時計まで暑さぼけね……。摂氏表示だといくら?……

レミーは、リューズの回し違いを、時計のせいにした。
腕時計に摂氏の表示が出た。
……あん？　四十五度？……、摂氏でも四十五度？……。たまらん！……
レミーは、あわてて裸の上半身を起こした。
シーツで胸元をかくしながら、レミーは部屋の中を見回した。
……どこだっけ、ここ……。なんか、頭の中まで茹っちゃったのかな……。なーんも思い出せない……
レミーは、シーツの中の太股に硬いものがふれているのに気がついた。
……ん？　なんじゃ？……
レミーは、シーツにもぐり込んで、その硬いものを取りだした。
レミーの手には、四十四口径の銃が握られていた。
……私の四十四口径……。こんなの抱いて寝ているなんて……。ほんと金属性なのが、ちと残念……
レミーは、ふっと溜め息をついて、ベッドサイドに銃を置いた。
……この銃を最近、撃ったのは……
ぼやけていたレミーの記憶が次第によみがえって来る。
……ああ……、あの砂嵐の中……、みんなとはぐれそうになった時に……。そか……、ここは、みんなで砂漠の中をさまよって、やっとたどりついた街のホテル……、そのシングルルーム……。
そういうことか……

数日前、レミーと五人の男達は砂漠を越え、名も知らぬこの街にたどりついたのだ。
不思議なことに、このホテルには、ツインルームもダブルルームもなく、一人ずつのシングルしかなかった。
……もっとも、ダブルがあっても、私は、お相手に困っちゃうけど……
レミーは、苦笑した。
……それにしても、あついなあ……
汗まみれの肌がべとつく。
レミーは、シーツを裸の体に巻くと、ベッドから抜け出し、バスルームに入った。
バスルームには骨董品のようなバスタブと、洗面セット、シャワーが、ひびわれたタイルの壁に備えつけられている。
このホテルは、この街では異邦人向けの超一流宿泊施設だと聞いていた。
確かに部屋の調度品は美術眼のあるレミーが見ても、見事なものだった。
しかし、このバスルームは、お世辞にも清潔とは言いがたい。
もっとも、地球でも砂漠地帯のような水のない地方は、汗や体臭に不感症になりがちで、風呂や水洗などの水回りがおろそかになる。
……ま、シャワーがあるだけ上等かもね……
レミーは、シャワーのコックをひねった。
「アチッ！」
レミーは、思わず声をあげて、手をひっこめた。

いきなり熱湯が吹きだしたのだ。
おそらく、ホテルの水道管が、砂漠の太陽に熱せられ、中の水が熱湯になったのだろう。
……冷たくなるまで待つか……。流しっ放しにしておけば、そのうち、冷えるわ……。あれ？……
レミーはシャワーを見つめた。
今まで、勢いよく吹き出していた水が、ぴたりと止まった。
レミーは、何度もコックをひねった。だが、シャワーからは水滴がポトリ、ポトリとたれるだけだ。
……また断水……。全く女の子には向かない街だわ……
確かに、砂漠の街では、水はなにより貴重だ。だが、レミーが泊まっているこのホテルは、この街では少なくとも超一流の筈だ。
それが、ここ数日の間、数えきれないほど、断水を繰り返している。
シャワールームからバスタオルを持って出たレミーは、部屋に備えつけられた大きな鏡台の前で、体の汗を、こそぎ落とすようにふいた。
汗をぬぐいとられた肌は、少しだけ暑苦しさが減ったようだった。
レミーは、ベッドサイドの腕時計に目をやった。
午前五時――。
……みんなは、もう起きているかしら……
レミーは、それぞれ別のシングルルームにいる五人の男達のことを思った。
……起きていなくても、もうすぐ、嫌でも叩き起こされるんだから……

やがて、窓の外の遠くから鐘の音が聞こえてきた。
それを合図に、どこからともなくうめき声のような音が聞こえてきた。
……ほら、目覚し時計が鳴りだした……
うめき声は、次第に大きくなっていった。
やがて、その声は呪文のような単調なリズムと旋律を奏で始めた。
それは一人だけの声ではなかった。
数知れぬ人々の唱和だった。
呪文のようなそれは、すぐにホテル中、いや、街中をゆるがす音にふくれあがった。
レミーは、裸の体にバスローブをはおると、部屋の窓を開けた。
ぎらぎらと輝く朝陽の熱気がとびこんで来る。
その朝陽は、一つではなく、街をとりかこむ砂漠の向こうに三つ浮かんでいる。
砂漠と街は、今、三つの太陽の光にいたぶられていた。
街は、レミーが地球にいた頃に見たモロッコやアルジェリアの街を思わせた。
砂漠の街は、どこも似ている。建物は、レンガと土で作られ、外の熱気をさけるために窓が極端に小さい。
ホテルに面した道の向こうに大通りがあり、そこには、路面電車や四輪自動車の姿も見え、この街はけっして古代や中世の街ではない。一応の近代都市なのだ。だが、異様なのは、街の中央に雲をつくような神殿がそそり立っていることだった。
それが、どんな宗教の神殿なのか、レミーは知らなかった。知りたいとも思わなかった。様々な

星をさまよううちに、関わりのないことには、できるだけ首をつっこむのはやめようという癖がついているのだ。
だが、それでも、この街の朝には、目を見張るよりなかった。
いつもは、人と車と自転車で混雑する大通りも、今は全ての交通機関がぴたりと止まり、路上には、街の人々があふれ、神殿に向かってひれふして祈り続けている。
その誰もが、呪文のような声を繰り返していた。
レミーは、ふっと溜め息をついて、今や口ぐせのようになった言葉を呟いた。
「あついなあ……」
街中をゆるがす祈りの声が、レミーの耳の奥で、さらに大きくふくれあがっていった。

*

違う時の流れの中で――もう一人のレミーの耳の奥では、別の音がふくれあがっていた。
それは、すさまじいラッシュの騒音――高層ビルの林立する巨大都市シィティの街路は、無数の車があふれ、身動きできないありさまだ。
そんな車の波の中で、レミーの赤い色をした小型のエアカーは、この三十分で百メートルも前進できずにいた。
レミーの白い手袋の指が、先刻から小刻みにハンドルを叩いている。
……全く、シィティの交通管制はなにをしているのよ……

渋滞へのいらだちは、もう限界に近かった。
レミーは気を沈めるように、カーテレビのスイッチを入れた。
アイドル歌手が歌い、踊る歌番組が出た。
ロックが好きだった若い頃もあったが、今のレミーには、うるさいだけだった。
レミーはチャンネルボタンを押した。
巨大なロボットがプロレスまがいに格闘するアニメーションが写った。
レミーは、溜め息をついた。この手のアニメーションは、何百年も同じパターンの繰り返しだ。もう目ばかり刺激する派手な画の動きに耐えられる歳ではない。レミーはチャンネルを替えた。
裸の男女が奇声をあげながら、獣さながらにからみあうシーン。
レミーは肩をすくめた。
……この種も何百年経っても同じ……、女優と男優が変わるだけ……
レミーはこんなものに目を輝かしている歳でもなかった。
……全くテレビって、昔も今もしようもないものばかり……
レミーは辟易してチャンネルを替えた。
ニュース番組が出た。
……結局、テレビは、これしかないしか……
画面には、ヘリコプターが写しているらしい高速道路が写っていた。
道路には車が一台も見えない。
……なんだ。あそこはがらあきじゃない……

すぐにニュースキャスターの興奮した声が、ヘリコプターのローターの回転音と共に聞こえてきた。
「本日、二時三十分、巨大都市（メガロポリス）シィティ十三番地区スリーマークバンク・シィティ支店で発生した銀行強盗の犯人一味は、三十四億の金塊（きんかい）と人質を奪い、三台のエアカーで現在も逃走中です」
テレビ画面に、三台のエアカーが、パトカーの群れに追われて走る姿が写しだされた。
「あっ、犯人一味の車が見えてまいりました。ごらんのように、一味は高速道路を逃走中のため、シィティ全域の高速道路は全面封鎖、一般市民の乗り入れは禁止されております。そのため、市街地の渋滞は五キロ以上におよび、当分回復の見込みはありません。なお、犯人達は、強力な武器類を装備しており……」
ニュースキャスターの声がそこまで聞こえた時、画面が見降ろしていた強盗達のエアカーの一台から、いきなりロケット弾が発射された。
「ワーッ！」
ニュースキャスターの絶叫とともに、テレビ画面がポッンと消えた。
ただちにテロップが、何も写っていない画面に流れた。
〝ただいま事故のため、映像が中断しております。たいへんお見苦しくて申し訳ありませんが、チャンネルをそのままに、もう少しお待ち下さい。この事件につきましては当チャンネルのみが独占中継です〟
自局のヘリコプターが、強盗達に撃ち落とされたのは明らかなのに、それには一言もふれず、チャンネルを替えられることだけを気にしているようなテロップだった。

……いずれにしたって、強盗達は、そうとうな凶悪犯らしいわ。このぶんだと警察も手こずりそうね……。ま、そんなことはどうでもいいんだけど……
レミーは肩をすくめた。
……この渋滞だけはなんとかしてほしい……。よりによってこんな日に……。まいるな……
目の前のデジタル時計が、三時三十分を表示した。
レミーには、四時にシィティの歴史博物館で待ち合わせの約束があった。
レミーは、フロントにぶらさげたマスコット人形をコツンと叩いた。
ずいぶん昔に、祭りの夜店で買った安物のブリキのロボット人形だった。
なんとなくそのブリキ人形の形がなつかしくて、思わず買ってしまい、以来、車のフロントにぶらさげていたのだが、車は今まで何回か買い替えたものの、この人形だけは手放せずにいたのだ。
レミーは、マスコット人形に話しかけた。
「どうする？　このままじゃ間に合わないわ。高速道路はがらあきだっていうんですけどね」
マスコットが、答えるように揺れた。
レミーは微笑して呟いた。
「そうよね……。わたしには、そんなに時間は残されていない……。この際、ゴメンしちゃおうか」
その時、前の車が少しだけ前進し、わずかに車間があいた。
「しめた。いっちゃえ！」
レミーは、いきなりニュートラルだったギアを叩き込んだ。それもバックギアだ。

レミーのエアカーは、バンパーで後ろの車を押した。
怒りで顔を赤くした後ろの車の運転手が、窓から首を出してわめく。
「なにしやがんでえ！」
レミーは、ニッコリと笑って答えた。
「ごめんなさい。これ修理代……。サンクス、バックしてくれて……」
レミーはいきなり急ハンドルでエアカーの向きを変えると、狭い横道に飛び込んだ。
「なんだ？　ありゃ！」
窓から首を出したまま、ポカンと口を開けている運転手の額に、いつの間にかお金が、セロハンテープではりつけられていた。
レミーのエアカーは、ぎりぎりの幅の路地を猛スピードで走り抜けていった。
レミーの小型のエアカーですら、すれすれの道だ。他に車の姿はなかった。
ただ、路上に置かれたゴミの袋を、二、三、吹き飛ばしたが、レミーはこの際、〝ごめんしちゃう〟ことに決めた。
路地を飛びだしたレミーのエアカーは、まっしぐらに高速道路の入口を駆け上がった。
入口の封鎖用のバリケードをすり抜けるなど、レミーのドライブテクニックならたやすいことだ。
警備の警官達は、つっこんで来るレミーのエアカーに仰天してとびずさった。
目をむいて見送る警官達の前に、一枚の紙片が風に舞いながら落ちてきた。
「なんだ？」
紙片を拾った警官が答えた。

「高速道路のチケット。少なくともただ乗りじゃなさそうです」
「おのれは何を考えとんじゃ！　追え！」
警官達は、あわを食ってパトカーに飛び乗ると、レミーのエアカーの後を追い始めた。
レミーのエアカーは、追跡するパトカーを尻目に矢のように走り続ける。
一台、また一台、追手のパトカーの数が増えていく。
しかし、レミーには、パトカーを振り切る自信が十分にあった。
追跡するパトカーの中の一台に、ナンバープレートから割り出した情報が入った。
「ナンバープレート、ＳＥＥ、ＹのＯＵ、ＡのＧＡＩＮ……、車の持ち主が分かりました。レミー・島田、太陽系第三惑星地球出身の女です」
レミーの写真が、パトカーのビジョンに写った。
ビジョンを見つめた警官は、思わず口笛を吹いた。
「なかなかじゃん。なになに？……」
警官はビジョンに写った資料を読み始めた。
「レミー・島田……宇宙を駆け回ったゴーショーグンという名の戦士達のチームの紅一点……ギャラクシー栄誉賞……。ギャラクシー栄誉賞は出身の星別、人種別を問わず、この星系の平和保持に貢献した者に与えられる最も名誉ある賞の一つ……か。この女、相当なもんだぜ。可愛い顔しちゃってさ」
もう一人の警官がビジョンをのぞき込んで続けた。
「ただし、本人は栄誉賞、辞退したそうですよ」

「へえ、もったいない。地球人って遠慮深いんだね」
もう一人の警官は前を走るレミーのエアカーを見つめて肩をすくめた。
「でも、遠慮深い人間のする運転には見えないけどな」
レミーのエアカーの前方に、銀行強盗達を追うパトカーの群れが見えて来た。
「どいて、そこを！」
レミーのエアカーは、パトカーの群れに割り込むと、みるみるうちにパトカーを抜き去って前に躍り出た。
ここまでやられると警官達は開いた口をふさぐのも忘れてしまっていた。
高速道路の入口からレミーを追い続けて来た警官など、思わず手を叩いたぐらいだ。
「さすがですねえ……。すげえテクニックだ。俺、サインもらっちゃおうかな」
もう一人の警官があきれて言った。
「そりゃ、勝手ですがね。断っておきますが、最近のレミー・島田は写真嫌いだそうで、ここに写っている写真は、ずいぶん昔のものらしいですよ」
「ますますミステリアス！」
この警官、本気でサインをもらいかねない。
だが、もう一人の警官が水をさした。
「そ～すか？　レミー・島田がギャラクシー栄誉賞を断ったのは四十年前ですよ」
「あん？　四十年前……、するると……」
「あのエアカーに乗っているレミー・島田は、七十歳をとっくに越えています」

確かにエアカーに乗っているレミーは、年老いていた。
だが、ドライブテクニックはけっして風化していない。
パトカーの群れを追い抜いたレミーの前に、強盗達のエアカーが見えてきた。
「邪魔よ。どいて、そこを！」
レミーは、クラクションを鳴らした。
だが、強盗達にとって、追って来る車はパトカーだろうが、小型エアカーだろうが、敵にしか思えない。
いきなり一台の窓から身を乗りだした強盗が、レミーのエアカーに向けてマシンガンを浴びせかけた。
レミーは、たくみなハンドリングで銃弾をかわす。
「止めてほしいんですよね。わたしは、急いでいるだけなの。あなた達とは、関係ないんだけどな」
だが、強盗達にそんな言葉が聞こえる筈もなかった。
今度は、三台全部の強盗達がマシンガンを集中させてくる。
さすがにこれだけの銃弾を浴びせかけられては、かわしきれない。
数発の弾を受け、レミーのエアカーのボンネットがはじけ飛び、エンジンがむきだしになった。
「あーっ、この車、中古で高く売ろうと思ってたのに……、仮契約だって済ましてあるのに……」
レミーは、三台のエアカーをにらみつけ、くちびるをかみしめた。
「そう、そっちがその気なら……」

レミーはダッシュボードからサングラスを取りだした。
そのサングラスには、車がスピンターンして、どんな逆光が目に飛び込んで来てもまぶしくないように、特殊なコーティングがしてあった。
レミーは、本気になった。四十年間止めていた戦いをやる気になったのだ。
レミーはサングラスをつけると、いきなりアクセルを蹴り込んだ。
レミーのエアカーは、強盗達の一台に斜め後ろから突っ込んでいった。
激突！
レミーのエアカーにはじかれるようにして、強盗のエアカーは、高速道路の壁に乗り上げ、ひっくり返った。
「一丁あがり……、お次は？」
レミーのエアカーは、強盗達のエアカーの一台をすり抜けると、二台のエアカーの間に入った。
前方のエアカーからロケットランチャーを持った強盗が身を乗り出す。
「よく狙って撃つのよ」
レミーは呟いた。
レミーは、後ろのエアカーが前のエアカーから見えないようにハンドリングした。
ロケット弾が発射される。
瞬間の急ハンドル！
ロケット弾は、レミーのエアカーをかすめて、後ろのエアカーのボンネットに命中した。
火を吐く車内から、あわてふためいて強盗達がとびだして来る。

次の瞬間、エアカーは大爆発を起こし、積荷の金塊が宙に舞ってきらめいた。
「ラスト・ワンね」
レミーのエアカーは、残る一台の後部に突っ込んだ。
エアカーのリアウインドごしに、後ろを振りむいたまま恐怖に顔を凍りつかせた男達が見える。
「女性上位……」
レミーは、自分のエアカーの後部噴射ノズルのスイッチを切った。
後部の浮力を失ったレミーのエアカーは、そのぶん、前が浮かび上がり、そのまま強盗のエアカーの屋根に飛び乗った。
思いもかけぬ頭上からの攻撃に、我を失った運転者のハンドリングが狂う。
強盗のエアカーは激しくスピンした。
レミーは、後部の噴射ノズルのスイッチをすばやく入れた。
レミーのエアカーは浮き上がると、スピンする強盗のエアカーから飛び降りるように落ちた。
強盗のエアカーは、高速道路の壁に激突し、再び金塊の山が宙に舞った。
「ザッツ・オール、ジ・エンド」
レミーのエアカーは、さっきの攻撃で傷つけたのだろう──後部から、わずかに火を吹きながら、その場から走り去った。すぐに駆けつけたパトカーの群れに残された仕事は、ほとんどなかったといっていい。
「強盗犯人、全員逮捕。人質も救出いたしました」
「しかし、なんちゅう女だ」

警官達は、ただ呆然と立ちすくむだけだった。
高速道路をひたすら走り続けるレミーのエアカーの後部の炎は、しかし、なかなか消えてくれなかった。
「まいったな。お尻の火事を消さなきゃ」
だが、次の瞬間、レミーはフッと顔をしかめた。
目の前のフロントガラスから見える光景がみるみるかすんでくるのだ。
レミーはサングラスをはずして目をこすった。
そのくちびるから溜め息ともつかぬ言葉がもれた。
「やっぱ、ダメなのかな」
……この目のかすみは、歳のせいだけではない……。私には、やはりもう時間がないんだ……
レミーの顔に自嘲的な微笑が浮かんだ。
次の瞬間、レミーの目がハッと見開かれた。
かすむ視界の中に、小さな白いものを見たのだ。
それは高速道路に舞い降りた一羽のハトだった。
レミーは、思わず急ハンドルを切った。
レミーのエアカーはスピンして、高架道路から飛び出した。
路上のハトも驚いて飛びあがり、空へはばたいていった。
だが、レミーのエアカーは、飛び出した後は、ただ、数十メートルの高さを落ちるだけだった。

レミーの視界は闇に包まれた。

＊

……ここ、どこ。ママ、私、どこにいるの？……

どこからか、なつかしい手風琴（アコーディオン）のシャンソンが聞こえてくる。

曲名は？

……思い出せない……。ずいぶん、遠い昔のこと……。でも、どこなの、ここは……

やがて、暗闇のベールをはがすように、白々とした光景が浮かんできた。

……まるで、今、焼き付けた印画紙から絵が浮きだすように……

そこは、パリの下街の石畳（いしだたみ）の路地だ。

□歳のレミーは、母親の姿をさがして、薄汚れた横丁をさまよってる。

……ママは、ここに来ちゃいけないって言ってた。でも、ランチに帰って来るといったきり、なかなか帰ってこないんだもん……

レミーは、横丁に見覚えのある戸口を見つけた。

……ずっと前、ママとここに来たことがある……

レミーは、そっと戸口を開けた。

戸口の中には誰もいなかった。ただ、すり減った古い階段が二階へ続いている。

レミーは、階段を一歩一歩昇っていく。

軽いはずの二歳のレミーにさえ、古い階段はきしんで、小さな悲鳴をあげている。
二階に上がったレミーの前には、黒ずんですり切れたカーペットの敷かれた長い廊下があった。
元は白かったのだろうが、今はススとほこりで茶色に変色したドアが、廊下をはさんでいくつも並んでいた。
レミーは足音を忍ばせて、廊下を歩いていった。
そして、ドアの一つの前で、レミーは立ちどまった。
ドアの向こうから女のうめき声が聞こえる。
その声を聞き間違えるレミーではなかった。
……ママだ！　ママの声だ……
レミーはドアのノブに手をふれた。
ドアには鍵がかかっていないようだった。
母のうめき声は、相変わらず続いている。
レミーはドアを開いた。
ベッドとテーブルと椅子の他は、かしいだタンスしかない部屋だった。
そしてベッドの上で、母と知らない男が横になって蠢(うごめ)いていた。
母と男は裸だった。
「ママ、ママ……」
レミーは、母に呼びかけた。
男の下にいた母親の目がとろんとしてレミーを見つめた。

母親は、それからじっとレミーを見つめた。
それは、ずいぶん長い時間だったかも知れないが、もしかしたら一瞬なのかもしれなかった。
やがて、母親の目から涙が一筋流れ落ちた。
レミーは、なぜ、母親が泣いていたのか、その訳が分からなかった。
レミーは、母親に訊いた。
「ママ……、ママ……？」
母の上にいた男がむっくりと起き上がった。
「なんでえ、こんガキャ……」
母は男には何も答えず、レミーに言った。
「レミー、ここへ来ちゃいけないって言ったろう……」
レミーは、甘えたくて、もじもじと言った。
「だって、だって……」
母親は何も答えず、すばやくしみだらけのナイトガウンをはおった。
男はズボンをはき、シャツのそでを通しながら、レミーを見降ろした。
「ふーん、おめえのガキか……、フーン」
母親は、男にはやはり何も答えなかった。
男はレミーの顔をまじまじと見つめながらニヤリと笑った。
「なかなかいい娘になりそうじゃねえか」
男はレミーに近づくと、身をかがめ、品定めするかのようにレミーのあごに手をやった。

「……あ……」
レミーは、おびえて身を硬くした。
その時だった。いきなり母の平手打ちが、男のほほを見舞った。
「さわるんじゃないよ！　この娘は売り物じゃないんだ！」
母のその声は、レミーが今まで聞いたこともない、悲鳴に近い叫びだった。
「なにすんでえ」
男は母を突き飛ばした。
母親は、狂ったようにテーブルに駆けよると、果物ナイフをつかみ上げ、男に向けた。
男は、母親のあまりの剣幕にたじろいで、思わず後ずさった。
母親は、男を見すえて低い声で言った。
「商売は終わったんだ。とっとと金払って消えな」
レミーの火のついたような泣き声が部屋中に響く。
「フン、二度とくるか……」
男は、ポケットからしわくちゃのフラン紙幣を数枚、無造作に取り出すと、床に放り投げた。
「とんでもねえ売女だ」
乱暴にドアを閉め、男は出ていった。
母親は溜め息をつき、肩を落とすと、それでもレミーに微笑みかけた。
「レミー、母さんは、まだお仕事があるんだ」
母親は、毛糸で編んだバッグの底からコインをまさぐり出して、レミーの手に握らせた。

「これで好きなものを買って、家で待っているんだよ」
そして、レミーの瞳の涙をハンケチでそっとふいてくれた。
レミーは、コクリと頷いてコインを握りしめた。
それが、レミーが母親にもらった最初で最後の小遣いだった。
レミーはころがるように街へ飛び出し、クレープ屋でチョコレート入りを買い、残りの金で焼き栗を十個買った。本当は九個しか買えなかったのだが、気のいい焼き栗屋の親爺が、一個だけまけてくれたのだ。
だが、その時のチョコレート入りクレープも、十個の焼き栗の味もすぐに忘れてしまった。
もちろん、あの安ホテルの一室の母親と男との出来事も長くは憶えていなかった。
そればかりか、あれからしばらくして死んだ母親の顔すら、幼い二歳のレミーが記憶し続けられるはずがなかった。
ただ、胸の奥に、ガラスの破片のように、時々光る風景があった。
それは、冷たい雨が降り続く墓地だった。
黒いスカートや、黒い肩かけ、黒いスカーフ、それぞればらばらな服装だが、何か一つは黒い物を身につけた顔色の悪い女達が、黒い柩の後を肩を落として従っていく葬列だった。
二歳のレミーは、訳も分からず立ちすくむだけだった。
何年も後になって、レミーはその記憶が、母の葬列であるのを知った。
葬列に続いていたのは、母と同じ仕事の女達だと聞いた。
ひとりぼっちのレミーは、そんな街の女達に可愛がられて育った。

レミーは街の女達の心をなごませてくれる大切なマスコットだったのかもしれない。
レミーもまた、街の女達を〝街のおばさん〟と呼んで、よくなついた。
やがて、レミーが自分の生まれが気になる年頃になると、街の女達が母親と父親のことを話してくれた。
生まれてから記憶がしっかりするまでのレミーの生い立ちは、全部、街の女達が教えてくれたものだ。
ところが、女達の話はそれぞればらばらで、まるでつじつまが合っていなかった。
ある女は、母を街一番の売れっ子だったと言い、また別の女は、街一番やさしい女だと言ってくれた。
ここぐらいまでで終わっていたなら、レミーもそれを信じたかもしれない。
けれど、大切なマスコットに真実を言って悲しませたくなかったのだろう。
レミーの母は、没落貴族の一人娘だったとか、政略結婚を嫌い貧乏なピアノ教師と駆け落ちしてパリに流れついた財閥の末娘だったとか、某皇室のかくし子だったとか、果ては、難破してパリに漂着した南の国のお姫様だとか(セーヌ川でどうすれば漂流できるというのか)――さすがに、月から降りてきたE.T.だ、という話はなかったが――、ともかく眉につばどころか、体中につばを塗っても信じられないものが多かった。
こうなると、街一番の売れっ子も、やさしい女だったという話もあやしくなる。
父親の話も、島田という名がついている以上、日本人であることは確からしいが、どういう日本人だったかは諸説ふんぷん。

誰もが立派な日本人だったというが、パリの街にあふれる日本人観光客の傍若無人ぶりを見ていると、とても信じられず、まして街の女に子供を生ませて消えてしまうような日本人が立派なはずがないと、幼な心でレミーは思うのだった。

結局、レミーが街の女達の話をまとめて作りあげた生まれは――、

〝馬鹿がつくほど気がよくほれっぽい街の女が、日本人の商社マンに騙され、パリの現地妻として同棲し、レミーを身籠ったとたんに男に逃げられた〟

――そこらが一番、真実に近い線だろうと、レミーは考えていた。

日本人は、フランス土産にコニャックを買うのが趣味だというから、レミーという名前だって、そこいらが出所に違いないと思うのだ。事実、母の遺品の中に、封の切っていないコニャック、レミー・マルタンがあったらしい。

……レミーだから、まだましだったわ……。別の銘柄だったら……、カミユ・島田、クオバジェ・島田……、こりゃ、女の子って感じじゃないわ……

レミーは、結局、自分の過去を気にしないことにした。

……気にしたところで、どうせ私は忘れている。思い出したって、どうせロクなものは出てきやしないに決まっている……。欲しくもない忘れ物は、忘れておくに限るわ……

そのうち、本当に気にならなくなった。

気にしているほど、日常の暮らしが楽ではなかった。

たとえ〝街のおばさん〟達の助けがあっても、所詮、レミーはひとりぼっちなのだから――。

だが、それでも、あの日見た母の葬列だけは、唯一つだけの母の風景として残り続けていた。

＊

なにかが転がる音がする。
だが、なにも見えない。
……私は、どこかに向かって動かされているような気がする……
一体、何が起こったのか。
体の感覚がまるでない。
自分さえ何者なのか分からない。

今、レミーの体は、ストレッチャーに乗せられて、病院の廊下を手術室へ向かって進んでいた。
高速道路の下に落ちたエアカーの残骸の中から発見されたレミーは、とりあえず呼吸だけはしているという状態だった。
応急処置をした看護員は、レミーの外傷のあまりのひどさに、これを生きていると判断していいのかすら分からなかった。
この国では、呼吸をしているだけでは生きているとは認められないのだ。
脳死の状態で、意識の戻る見込みのない人間は死者としてあつかわれる。
看護員は、その決定を病院の医者の判断にまかすことにして、レミーをもよりのシィティ中央病院に運びこむことにした。

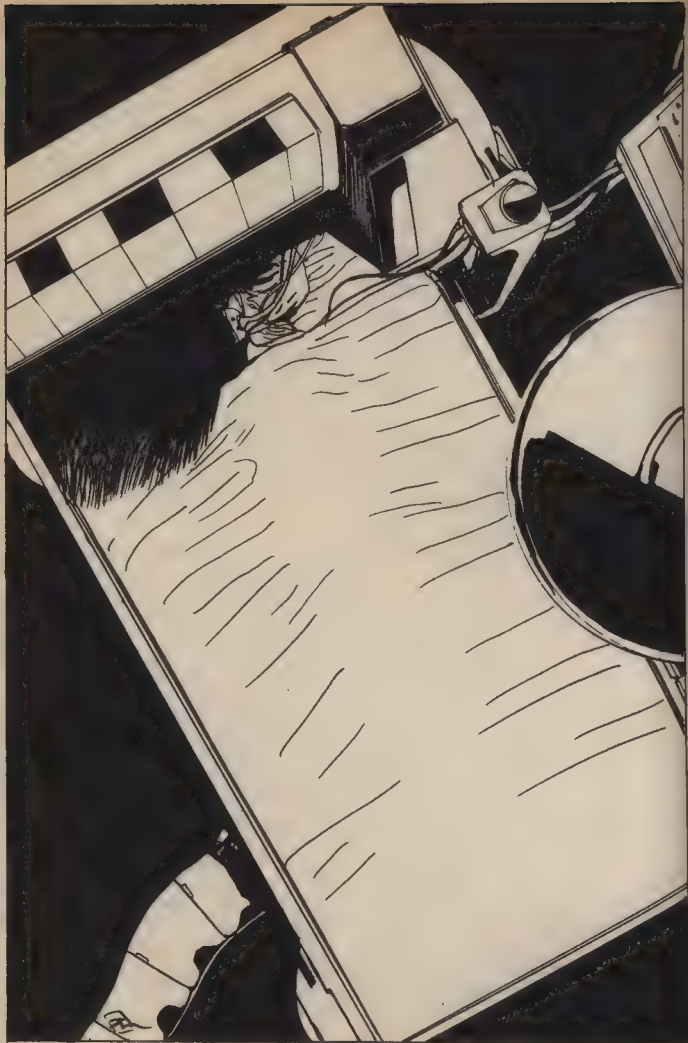
ドーン。
レミーは、何かがぶつかって開き、自分が別の世界へ連れていかれるような気がした。
今、レミーの体は、ストレッチャーごと、手術室の扉を開いて中へ運びこまれたのだ。

巨大都市（メガロポリス）シィティの郊外にある歴史博物館の平日は、さびしい。
日、祭日なら、親子連れや学生達でにぎわうだろうが、今日のような平日の午後に、郊外まで出てきて歴史を勉強しようなどと思う人は、定年退職した、よほど奇特（きとく）な老人達ぐらいだろう。
この日もロビーには、退屈そうにあくびを噛（か）み殺す受付嬢の姿しか見えない。
歴史と時の流れを抽象化（アブストラクト）した巨大なムービングモニュメントだけが単調な動きを繰り返していた。
……歴史博物館なんて、どうしてこんなにつまんないとこに勤めちゃったのかしら……。たまに来るのはじいさんとジャリ……。こんなんじゃお嫁に行き遅れちゃうわ……。なんとかしなきゃ……
受付嬢は、ほおづえしながら、ぼんやりと、いつも思うことを考えていた。
やがて、入口からコツンコツンと足音が響いて来た。
……あら？……
受付嬢は頭を上げた。
彼女の前に、口ひげをたくわえた肩幅の広い老人が立っていた。
「なにか？……」

「ゴーショーグンチームの展示場を教えてくれんか……。ここは始めてでな」
「二階の東の隅、Nブロックです」
「あんがとよ」
老人は、二階の階段へ向かっていった。
……あんがとよ？　ですって……。いくつだと思ってんの……、ご自分のお歳……
受付嬢は肩をすくめた。
……ゴーショーグンチームのセクションか……。あんなマイナーで人気のないセクションを見にくるなんて……。そうとうな物好き……。何かの関係者かな……
受付嬢は、しかし、それ以上考えるのはやめにした。
彼女にとって、週末のデイトの相手を見つけることを考えた方が、よほど楽しかったのだ。

ゴーショーグンのセクションは、二階の片隅にひっそりと備えられていた。
口ひげの老人は、そのセクションのショーケースに向かって歩いていった。
すでにショーケースの前には、先客が一人立っていて、じっと展示品を見つめていた。
ケースの中には、六人の戦士の写真や六人の戦士の武器等、過去の戦いの思い出の品がほこりをかぶって飾られていた。
着のみ着のままでさまざまな星をさまよって戦い続けた六人だ。
記念になるような物は、ほとんど残っていなかった。ありふれた銃とナイフと日本刀、そしてフライパンとか、手術用のメス。

どれもとりたてて珍しいと言える物ではなかった。
このセクションが不人気なのも無理からぬことかも知れない。
口ひげの老人は、ケースをのぞきながら先客に声をかけた。
「また会っちまったな、真吾……」
真吾は、ケースの中の思い出から目をそらさずに答えた。
「ああ、四十年ぶりか……、キリー」
口ひげの老人はポケットから煙草(たばこ)を出し、使い捨てライターで火をつけた。
「忘れたよ。過ぎちまった時の長さなんか」
そう呟いて、煙草をすすめた。
「どうだ？」
「博物館は禁煙さ……。お前、いつから煙草を喫(す)いはじめたんだ？」
「俺達の戦いが終わった日から……。もう禁煙する意味もなくなったからな……」
真吾は頷いて呟いた。
「俺も禁酒をやめた。量は少ないがな」
「フーン……。で、景気はどうだ？」
「二年続きの冷害でな……、作柄(さくがら)が悪い」
「好きだね、お前も百姓(ファーマー)が……」
「他にやることもない。そういうお前はどうなんだ」
「あいかわらずのホットドッグならぬホットウルフ屋さ。しがねえもんだ。ファストフードはチェ

ーン店にゃかなわん」
「ま、食い物を作っていれば、お互い、食いっぱぐれる心配だけはない」
「そういうこと……」
二人は顔を見合わせ苦笑した。
それからしばらく、二人はショーケースの中の、見えるはずのない昔を見つめて黙っていた。
真吾がぽつりと言った。
「レミーとも四十年ぶりになるな」
キリーはふっと微笑した。
「ふふん、とぼけちゃって、お前が四十年間も、レミーに手を出さないはずがあるかね」
真吾も微笑した。
「とぼけとるのはそっちだろう。お前こそ、手当たり次第のくせに……。俺は、レミーとは何もなしさ……、残念ながらな」
キリーはポケットから携帯灰皿を出し、煙草をもみ消した。
「俺には何もなかった……、か……。フフン、詰めが甘いね。お前も俺も……。せっかくのレミーなのにな……。後は、ブンドルのだんなと、問題外の二人か……」
「三人とも忙しくて、今日は来れないらしい」
「レミーの招待でもか？」
「奴らと俺達は住む世界が違いすぎる。同窓会は似た者同士しか集まらないものさ」
「成り上がりと落ちこぼれの違いか」

「ああ、金のある奴は暇がない。暇のある奴は金がない。真理だな」
二人は肩をすくめて苦笑した。
キリーは二本目の煙草に火をつけてから、ふっと呟いた。
「しかし……、レミーは、今になって、どうして俺達に会いたいなんて言いだしたんだ……」
「さあな……。それにしても遅い……」
時計はすでに五時を過ぎていた。
四十年前のレミーの写真は、今も、時を超えて、真吾とキリーに微笑(ほほえ)みかけていた。

中央病院の手術室では、レミーの手術が続いていた。
執刀医の誰もが、それがほとんど無駄な努力であると確信していた。
だが、レミーの生存を示す心脈計だけは、まだしっかりと動いていた。

「身寄りがいないんですって?」
レミーの手術を上から見降ろすガラス張りの手術指示室の中で、医師長がわめいた。
食ってかかられても困る、とでもいうように肩をすくめたレミーの事故担当の警官は、手帳を見ながら説明した。
「あの人は、最近、家に閉じ籠って世捨て人のような暮しをしていたらしいんですな」
医師長の顔がさらに険悪になった。
「すると、病院の費用は?」

警官は、まさに他人事のように答えた。

「預貯金は全くありません」

医師長はポカンと口をあけた。

「馬鹿な！　ギャラクシー賞をとったんでしょ。国でなんとかならんのですか？」

「この人は賞を断ったのです。その時から国とは関係ありません」

警官は事務的に答えた。

医師長の顔はまっ青になった。

「せめて健康保険ぐらいは」

「掛金未納です」

警官はますます平然と答えた。

医師長は、警官にすがりつかんばかりに叫んだ。

「そんな！　今までの手術代、どこに請求したらいいの！」

警官は首をひねりながら手帳をめくり、

「実は、当時、レミー・島田さんと同じチームで、ギャラクシー賞を辞退しなかった地球人が、二人、いるにはいますがね」

「すぐに連絡して下さい。このままでは、うちはえらい損害ですぞ」

警官の目の前につきだされた医師長の手には、すでに電話の受話器が握られていた。

シィティの副都心にひときわ高くそびえ立つケルナグール・フライドチキン本社ビルの社長室に、

中央病院から電話が入ったのは、社長のケルナグールが、世界銀行の会長と融資の話をかねた会食にでかけようとする寸前だった。
　ケルナグール・フライドチキン社の命運を決めるかもしれぬ重要な会食だっただけに、病院からの意味不明な電話は、ケルナグールをイラだたせた。
　ケルナグールは、受話器にかみついた。
「ぬあにィ！　病院の支払い？　社会保険があるじゃろ、社会保険が……。なに、ない？　あん？うちの社員じゃないの？　このッ！　この、こいそがしい時に、なんで社員でもない病人の費用ださにゃならんの！　うちは慈善事業じゃないんだぞ……」
　ケルナグールは電話を切ろうとした。
　だが、その時、受話器の向こうで聞こえた一言で、その手が止まった。
「なに？　ギャラクシー賞……」
　ケルナグールは、社長室のマントルピースの上に飾られたギャラクシー賞の楯を見つめた。
「それを断った女？……」
　ケルナグールの手から思わず受話器が落ちた。
「レミーさんが……」
　ケルナグールは受話器を拾い、静かに電話に答えた。
「ああ、よく知っている人だ……」
　その時、ケルナグールの秘書が入ってきた。
「あの、ご会食の時間に遅れますが……」

ケルナグールは即座に秘書に言った。
「今日の仕事は全てキャンセルせい……」
秘書は信じられないといった顔で訊き返した。
「あ、しかし、今日のご会食は融資の件が……」
「かまやせん！」
ケルナグールはきっぱりと言った。
そして、夕陽の沈んでいく窓の外の高層ビル街をじっと見つめた。
「レミーさんが事故……」

同じ夕陽が、歴史博物館の窓からゴーショーグンチームのショーケースを照らしている。
真吾とキリーは、ショーケースの前の腰かけに黙って坐っていた。
二人とも別々に生きてきたこの四十年に、あえて話すことはもう何もなかった。
二人がここにいるのは、ただ、一人の女を待つためでしかなかった。
足音が響き、歴史博物館の女子館員が近づいて来た。
真吾が呟いた。
「閉館時間か」
「かもな、芝居は終わった、幕を引け……さ」
「始まりもしなかった、今日の芝居は……」
「ヒロイン抜きじゃな」

二人の前に立った女子館員が言った。
「北条真吾様とキリー・ギャグレー様ですね」
「はあ……」
真吾が答えた。
「ケルナグール・フライドチキン社長様からご伝達です。レミー・島田様はお見えになれません」
真吾とキリーは、お互いの顔をチラリと見合ってから、女子館員の顔を見上げた。

＊

先刻から滝のような雨が、名も知らぬ街を容赦なく叩き続けていた。
だが、水のベールの向こうでは、三つの太陽が確かに燃えたぎっている。
雨は焼けた路上の上で湯気だち、街はまるで煮えたぎった鍋の表面のように見えた。
街の人々はこの水と太陽のせめぎあいが終わるまで、なす術もなく、あきらめきって、ただ耐えるだけらしかった。
街の人々は軒下にじっと動かず坐り込んでいた。
レミーはホテルの窓辺で、ぼんやりと、そんな街の様子と降り続く雨を見つめていた。
……雨が降っても、少しも涼しくはならない……。そのせいか、仲間たちも、それぞれの部屋から出てこようとはしない……
レミーは、なにげなく指で胸に下げたロケットをもてあそんでいる自分に気がついた。

このロケットは、レミーがミドルティーンの頃、パリのサン・ミッシェルの通りに露店を出していた安物のアクセサリー屋で買ったものだった。

本来、こういったアクセサリーは、ボーイフレンドからプレゼントされるものだが、このロケットは違っていた。

レミーが、自分で気に入り、自分がかせいだお金で買ったものだった。

……何をしてお金をかせいでいたかって？……。ひとりぼっちで、ミドルティーンのわたしが、パリの街で、お金をかせぐといったら……、ま、いろいろあるわよね……、いろいろね……。だけどこのロケットだけは、とっても欲しかったんだ。あの時は恋人なんかいやしなかった……。いいえ、ボーイフレンドすらいやしなかった……。でも、このロケットを買った時、わたしは決めちゃったんだ。いつか、本当に……、本気で愛した人のポートレートを、このロケットに絶対に入れるんだってね……。そして、それから、何人かの男の写真が、このロケットの中を駆け抜けて……、これが最後だって思った男にも裏切られ、死なれて……。わたしは、このロケットを捨てようと思った……。でも、わたしは今もなぜか持っている……。もう、めったに身につけることはなくなったけれど……。こんな日は、いつも、知らず知らずのうちに身につけている……

レミーは、ロケットのふたを開けた。

誰の写真も入っているはずがなかった。

……からっぽ……。分かっちゃいますけど、からっぽ……

レミーはロケットのふたを、パチンと閉じた。

あれほど激しい雨音が、ちょっぴりセンチメンタルに聞こえる。

……気は持ちようよね……
その時、雨音にまじって、部屋のドアを叩く音がした。
かなり強く何度も何度も叩いている。
きっと強い雨音に、ノックの音が聞こえないとでも思っているのだろう。
……はい、はい、聞こえていますよ……
……みんなも一人にあきるころかな？……
レミーも、そろそろ誰かと話したいと思っていたところだ。
レミーは、鏡台の前にいって軽く手の平で髪をなおした。
……真吾？　キリー？　ケルナグール？　カットナル、それともブンドル？　たぶん、みんな一緒よね……。みんなでお食事でもしましょうか……
レミーは、ちょっとおどけてドアを開いた。
「モーニン！　おはよう、おねぼうさん！」
だが、ドアの外には、仲間の誰も立っていなかった。
そこには一人の女の子が立っていた。
レミーは小首をかしげながらも、女の子に微笑(ほほえ)みかけて聞いた。
「えっ？……なんのご用？」
女の子は、白い手紙をだした。
「これ……、たのまれました」
「サンクス」

レミーが手紙を受け取ると、女の子は後も見ずに廊下を駆けていった。
レミーは手紙を見た。
表にも裏にも何もかかれていない。
「待って……、これ、誰からなの？」
レミーは廊下を見た。
だが、女の子の姿はどこにもなく、人の気配が全く感じられない廊下が広がっているだけだった。
レミーは肩をすくめ、ドアを閉めると、手紙の封を開いた。
手紙の中から写真の束が床に落ちた。
同封の紙には、奇妙な文字が並んでいたが、なぜかレミーには、地球の言葉と同じように読めた。
その紙にはこう書かれてあった。
『お前は二日後に死ぬ。それが定められた運命だ。
お前の死に様は、そこに写っている』
レミーは、床に落ちている写真の束を見つめた。

窓の外の雨音は、ますます激しさを増していた。

第2章 流血の威嚇

真吾とキリーがシィティの中央病院に駆けつけて来た時には、レミーの手術はすでに終わり、レミーの体は特殊診療室のベッドに移されていた。

特殊診療室のドアには面会謝絶のランプがつき、ドアの前の待機室にはケルナグールが肩を落として坐っていた。

待機室に入ってきた真吾とキリーを見ても、四十年ぶりであるにもかかわらず、ケルナグールの口からもれたのは――、

「来たか……」

それだけだった。

「面会謝絶か……」

キリーがうめくように呟いた。

「容体は？」

真吾がケルナグールに聞いた。

ケルナグールはかぶりを振るのみだ。

ケルナグールとしても、これしか答えようがなかった。

レミーが手術室から特殊診療室に運ばれるあわただしさのなかで、ケルナグールが執刀医からかろうじて聞けた言葉は、たった一言だった。

「絶望です……」

じりじりする数分間がすぎ、診療室から医師長が出て来て言った。

「関係者の方に症状をご説明します」
医師長は落ち着いていた。なにしろ、この患者は、先刻までの支払い不能の客ではなく、ケルナグール・フライドチキンという大会社の社長がスポンサーについた客なのだ。
患者がどうなるにせよ、中央病院に多額の支払いが入るのは確かなのだ。
医師長の頭には、次期病院長の座まで浮かんでいた。

医師長は、診療機能集中室のビジョンにレミーの人体透視図を写しながら、三人に説明を始めた。
「検査の結果、事故の外傷以外のものが見つかりました。進行性剝離病です」
「進行性剝離病……」
三人は呆然となった。
「進行性剝離病といえば、この星では知らぬ人はいない難病です。体内に変異細胞が生まれ、それが増殖し、ついには体全体を死にいたらしめるというものでしてね。早期に発見すれば手のほどこしようもあったのですが、ごらんなさい、もう体中に広がっています。ただでさえ完治の見込みは五パーセントもないのに、事故による重傷が重なりました。よくて、あと二日ですね」
「二日……、見込みは五パーセントとおっしゃいましたね」
真吾が訊いた。
「ええ、ただし、シィティの大学病院の専門教授にかかればの話です」
「呼んでくれ、その先生を……」
ケルナグールが医師長の手を握りしめて言った。

「お気の毒ですが、わが中央病院と大学病院は医学系列が違います。系列の違う病院の医師は、この病院で執刀はできません」
医師長の言葉遣いは冷たかった。
キリーは、感情を抑えて言った。
「なら、今のうちに大学病院に運んでくれ」
医師長はかぶりを振った。
「動かせる状態ではありません。事故の傷も重い。今、動かせば一時間と持ちますまい」
医師長の態度にたまりかねたケルナグールは、えり首をつかまえて持ち上げた。
「このっ！　だったら大学病院の医者を呼べ！　今すぐにだ！」
真吾があわてて医師長とケルナグールの間に入った。
「止せ！　医者を怒らすな。レミーの命の綱だ！」
ケルナグールは歯を食いしばり、無理矢理怒りを抑えこみ自分の頭が冷めたことに頷いてから手を放した。
医師長は首をさすりながらも、優位に立った傲慢さを露骨に表した。
「病院間の壁は厚いのです。もっとも、この国の医師会長の直筆の命令書でもあれば別ですがね」
「医師会長？」
真吾が訊いた。
「医学界最高の権威です。政界の首脳クラスの主治医でしてね」
医師長の言葉の奥には、真吾やキリーはおろか、いくら大会社でもからあげ屋の親分程度では、

つきあえる相手ではないという軽蔑がありありと見てとれた。
だが、ケルナグールの表情は、その言葉を聞いて、いきなり明るくなった。
「医師会長……、医師会長ね……」
突然、高笑いを始めた。
「グハハハ……」
涙すら流して笑っている。
「どうした？」
とキリー。
「この国の医師会長兼連邦議員のお偉いさんの名を知らんのかのう」
真吾の顔が輝いた。
「まさか、あいつが？」
ケルナグールは頷いて、ガッツポーズを作った。
「そうじゃ、カラス、カアカア……、わしと一緒にギャラクシー賞を受賞の……」
キリーが言葉をさえぎって叫んだ。
「今、どこにいるんだ！」

カアー
カットナルのカラスが一声高く鳴いた。
「また誰かが、わしの噂をしとるんじゃな」

カットナルの場合、人が噂をすると、肩のカラスがカアと鳴く——ということわざを勝手に作って信じていたのだ。
「それにしても、仕事とはいえ、なんで、こんな山奥に来にゃならんのよ」
カットナルは、シティから千キロ以上離れた夜の山道をジープにゆすられ走っていた。
ともかく、もう十時間以上もジープで山のでこぼこ道を走りっ放しだ。
本当は、こんな仕事はやりたくないのだが、大統領から頼まれて、しぶしぶ土地売買の交渉に行くのだ。
この地方は、国の国土開発の拠点になっているのだが、カットナルが、今、走っている広大な山林の持ち主がどうしても国に土地を売ってくれないという。
そこで、つきあいの広いカットナルの出番となった訳だが——。
ゴツン！
にぶい音がして、カットナルが頭をおさえてうめいた。でこぼこ道で、ジープの天井に頭をぶつけたのだ。
「くう！　これで二千八百二十八回目だ。なに？　ニヤニヤ……、チッ笑っていられるか。わしゃ不動産屋じゃない。医者じゃ……。健康第一じゃ。このままでは脳障害を起こしてしまうわい！」
カットナルは憤懣やるかたない様子で、ポケットから精神安定剤を出し、むさぼり食べようとしたが、
ドン！——。
ジープがまたバウンドして、二千八百二十九回目の天井衝突をして、薬は一粒ものどに通らなか

った。
「あいつが悪い！」
カットナルは、国に土地を売ろうとしない男の名を二千八百三十回呪った。

森に囲まれた小高い丘の上に質素な庵が立っていた。
満天の星の下、庵の縁側から見える行灯の灯が、いわくいいがたい風情をかもしだしている。
床の間にかけられた掛け軸は達磨法師の水墨画、そして何本かの巻き物が畳の上に置かれている。
浴衣を着てうちわを持った男が縁側に坐り、つるつると音をたて、なにやらヌードルの一種をハシで食べている。
男は、ふとハシを動かす手を止め、誰に語るでもなく呟いた。
「月日は百代の過客にして、いきかう人もまた旅人なり。時はさりげなく過ぎていくが、星の灯は変わらず、こよいも闇が美しい。のどもとをすぎるそうめんの味は、小豆島風もよいが、今は三輪そうめんの細さかつ腰の強さこそ似つかわしい。また薬味のネギはわけぎにこそ限る」
その時だった。
茂みの中から、ヌッと現れた影が声をかけた。カットナルである。
「ブンドル……、そうめんだけでは栄養がつかんぞ。せめて、タマゴ焼きとか、ハムを入れたらどうかの」
ブンドルはカットナルを一瞥すると、
「わたしは、冷やし中華を食べている訳ではない」

カットナルは、ジープの中の不機嫌がうそのような愛想笑いを浮かべて、
「ま、そういわずに、お互い年じゃけに、栄養をとって仲よくやろうぞ……。さ、さ、これにサインをな……」
カットナルは、さりげなくアタッシェケースから出した書類を縁側に置いた。
ブンドルは、目もくれずに言った。
「なにかな?」
「この土地の権利書じゃ」
「悪徳政治家の土地ころがしの手伝いはせぬ」
とりつく島もなく言うブンドルに、カットナルはにじりよった。
「それはないぞ。こう見えても、わしはこの国の医師会長じゃ。国土開発の目玉として、このあたりを人民の保養地として開発しようとしている。な、そこんとこ、よろしくね」
ブンドルはカットナルを見すえた。
「自然の地に開発の文字は似合わぬ。早々に立ち去るがよい。立ち去らねば……」
いつの間にか、ブンドルの手には日本刀が握られている。
カットナルは、ころがるように縁側から飛びずさった。
「わーった、わーった。チッ、昔の仲間でなきゃ、こんな小屋、ブルドーザーで叩きつぶしてやるのに……」
舌うちするカットナルのアタッシェケースのアラームが鳴った。
「なんじゃ?」

カットナルは巨大なヘッドフォンをとりだすと、ブンドルに照れ笑いをした。
「近ごろ、耳が遠くなっての……」
カットナルはアタッシェケースの無線で交信を始めた。
「ん?……、レミー・島田……、ああ、知っとるよ」
レミーと聞いたとたん、ブンドルの手のうちわがハラリと落ちた。
無線を聞いていたカットナルの声が変わった。
「なに! レミーさんがきとく!? わしの命令書が必要じゃと? しかし、こんな山の奥では、二日では間に合わんぞ」
「カットナル、まかすがよい」
振り返ったカットナルの前に、いつの間にか、パイロットスーツに着換えたブンドルが立っていた。
「私についてくるのだ」
ブンドルは、床の間の掛け軸を動かした。
とたんに、壁の向こうに格納庫が現れた。
いつでも飛べるように整備された小型ジェット機が銀翼を光らせていた。
「こ、これは……」
「超音速でシィティまで三十分だ。今の世は、剣だけでは歯のたたぬものもある。これも、武士のたしなみだ」

二人を乗せた小型ジェット機は、ブンドルの言うとおり、正確に三十分、一秒の狂いもなく、シティの空港に着陸した。
カットナルは空港から大学病院に指示を送り、専門教授を中央病院に送り込んだ。
そして十五分で空港から中央病院に駆けつけ、カットナルは直筆の命令書にサインをして、レミーの進行性剝離病の手術が大学病院の専門教授によってただちに始まった。
カットナルの元に連絡が入ってから、手術の始まるまで一時間も経っていなかった。

診療機能集中室の中で、カットナルは手術の経過を見守り続けていた。
経過を見つめながら、カットナルの片目から一筋の涙が流れた。
カットナルは、今までさまざまな仕事を体験した。
地球ではアメリカの大統領になり、ソ連との間に核戦争をひき起こしかけたことすらある。
だが、今日のカットナルは、医者だけはならなければよかったと後悔した。
患者の容体が、おそらく患者自身よりも分かるからだ。
カットナルは精神安定剤をむさぼり食ってから、四人をこの部屋に呼んだ。
「今さら気安めを言っても仕方あるまい。レミーさんの体の状態はさらに悪化している。仮に手術に成功しても助かる確率は一パーセントもあるまい」
「一パーセント……」
カットナルがうめいた。
真吾が椅子に倒れるように坐り込み、言った。

「医学上の一パーセントは絶望ってことか？」
「医者は奇跡をパーセントに計算する。一パーセントは、神がいるとしたら、そっちの領界だ」
「なんてこった」
キリーは天を仰いだ。
「いや……違う」
三人は声の方を見た。
壁に背をもたせかけ目を閉じているブンドルだった。
「レミーは確率を超える人だ。私は信じている。あの女の生き抜く力はいつも美しかった。今もきっとな……」
他の四人もそれを信じるよりなかった。

*

パリで——。
その時、レミーは七歳だった。

バシャン！
いきなり七歳のレミーは、昨日の雨で石畳の道にできた水溜りの中につき倒された。
レミーは泥まみれになって、それでも負けん気な目で相手をにらみつけた。

三人の男の子が、ニヤニヤ笑いながらレミーを見降ろしている。
三人ともレミーより年上だ。
別に、レミーが男の子達に何かをした訳ではなかった。
小遣いかせぎに、アルバイトにしていた街のおばさん達に頼まれた買物をしにいく途中――主に、おばさん達が仕事の途中、あやまって伝線をつけてしまったストッキングの替えを買ったり、仕事の疲れをいやすために飲む酒のポケットびんや昼食用のクレープやサンドイッチを買って届けることが多かった――、この道をたまたま通りかかっただけなのだ。
男の子達はレミーの後ろからこっそり忍びより、水溜りに来たところを見はからって突き倒したのだった。
男の子達にしても、別に理由などありはしなかった。
ただ、街の女の娘で、しかも親のいないひとりぼっちのレミーが、古着とはいえ、普通の女の子のような服を着て、自分達の住む横丁を人並みの顔をして歩いているのが生意気だと感じたのだ。
いじめに理由はいらない。
弱い奴、いやしい暮らしをしている奴は、気分次第でいじめてもいいのだ。
それが男の子達、いや、この横丁の子供達が大なり小なり持っている共通のフィーリングだった。
そばかすだらけの男の子が、カエルのような小動物を棒でつついていじめる時に見せる、子供特有の無邪気だが残忍な目で、レミーに言った。
「へへへ……、どうした、レミー」
もう一人の赤毛の男の子が、一フラン紙幣を指でつまんでヒラヒラさせた。

「これが欲しくねえのかよ、これが」
三人目の赤ら顔の子が、倒れているレミーの全身をなめまわすように見ながら言った。
「欲しかったら、服、脱ぎな」
赤毛は一フランをレミーの鼻先に突きだした。
「その服、この金で買ってやらあ……」
レミーはうつむいて、のろのろと立ち上がった。
三人ははやしたてた。
「やれ！　やれ！　街のレミーのストリップだ」
レミーは三人に背を向けた。
肩がふるえて、どうやら泣いているようだ。
それでもレミーはベルトに手をかけた。
……あ、レミーの奴、本気で脱ぐ気だぜ……
……やらせろ、やらせろ……
男の子達は、固唾を飲んでレミーのベルトを見つめた。
レミーはベルトをはずすと三人の方に向き直った。
レミーは微笑しながら、くるくるっとベルトを手の平に巻いた。
肩がふるえていたのは、泣いているのではなく、笑っていたのだ。
そして、獲物を見つけた狩人のようにニヤリと笑った。
「わたしのは高いの……」

レミーは三人の間に飛び込んだ。
そばかすの男の子が、レミーのストレートで後ろにふっとぶ。
「子供の見せ物じゃないわ」
赤毛の胸ぐらをつかみ、あごにストレート。あわてて逃げようとする赤ら顔を、レミーは身をひるがえして両手でひっつかみ、引き戻して、顔面に力一杯、げんこつを叩き込んだ。
あっという間に、三人の男の子は路上にへたりこんで泣きわめいていた。
レミーは石畳に落ちている一フランをつまみ上げて、
「サンクス、フレンズ……。これ、クリーニング代にいただきま～す」
いたずらっぽくウインクすると、もう後も見ずにすたすたと横丁から出ていった。
……一人ぼっちの女の子って、なめるとこわいんだから……、ね……
男の子達は泣きじゃくるばかりだった。

＊

先刻までの雨がうそのようにやんでいる。
あれほどの激しい雨も、名も知らぬ街の地表をうるおすことはできなかった。
砂漠は水を吸いつくし、すでに砂はかわききって、風に吹かれサラサラと音をたて流れはじめている。

レミーは、ホテルのベッドにあおむけになって天井を見つめていた。
頭の中は手紙と写真の束のことで一杯だった。
写真をひとめ見て、レミーは思わず声をあげた。
そこには、確かにレミーが写っていたのだ。写真のレミーは見たこともない街角を走っていた。
何者かに追われている。
追手の数は次第に増していく。
レミーは石造りの壁の前を走っていく。
これも見たことのない壁だ。
数枚の写真は、こんな風に続いていた。
そして、次の写真には文字が書きこまれてあった。
〝これが二日後のお前だ〟
神殿の見える原野をレミーが走っている。
レミーの前に追手が立ちふさがる。
背後にも無数の追手が迫ってくる。
レミーは追手にひきずり倒される。
追手は皆、見ず知らずの男達だ。
男達は、獲物にむらがるピラニアのようだ。
服がひきちぎられる。
男達がよってたかってレミーを食い散らかす。

レミーは男達の狂宴のいけにえだ。
男達はレミーをむさぼり、いたぶり、傷つけ、引き裂く――。
写真の中のレミーは、確かにレミーだった。
小さなほくろのありかまで、レミーしか知らないはずのレミーの体が、くっきりと写真に写し出されている。
最後の写真で、レミーは死んでいた。
無惨な身体が、投げ捨てられたように原野にころがっている。
写真に付け加えられた文字は、こうだった。
〝お前は、見ず知らずの男達の牙に身も心もずたずたにされ、はずかしめられ、ばらばらになって死ぬのだ。
お前の運命は定められている。街の女の娘として生まれたお前の死は、どんなにあがいても、それなりの死だ〟

＊

進行性剝離病の手術を受けているレミーに、意識はほとんどなかった。
だが、意識の奥の奥で、レミーは声ともつかぬ何かのささやきを聞いていた。
「お前の運命は定められている。街の女の娘として生まれたお前の死は、どんなにあがいても、そ

れなりの死だ」

……そう……。そうかもしれない……。これがわたしの決められた運命かもしれない……

手術室のレミーは、ささやきに頷いてもいいような気がしていた。

*

〝とりあえず、お前には血の洗礼が待っている〟

写真にそえられた文字は、その言葉で終わっていた。

その最後の文章を思い浮かべながら、ホテルの天井を見つめていたレミーは、やがてニッコリと笑った。

……考えていたって始まらない。何が来たって、その時はその時、出たとこ勝負……。今までだって、そうやってきたし、これからもそうするっきゃないもんね……。それを向こうさんから、ごあいさつなんて……

レミーは、むっくりと起きあがり、呟いた。

「ごていねいに、ありがとう……」

その時、いきなりだった。

シャーッ!

バスルームで水の流れる音がした。

「ん?」

レミーは朝の断水を思い出した。
……先刻の雨で、水が溜まったのかもしれない……。あの時、シャワーのコックをひねって……、それからどうしたっけ……。しめ忘れたのかな？……
レミーは、バスルームのドアを開けた。
レミーは一瞬、眉をしかめた。
シャワーは勢いよく吹き出していた。
水ではなく血を――。
血はすでにバスタブを一杯にし、床にあふれだし、みるみるレミーの足元まで流れてきた。
レミーは、驚きを寸分も見せずに、
「笑っちゃうわ」
そう言い残すと、いきなりバスルームの扉を閉め、ベッドサイドに置いてあった四十四口径のホルスター付きベルトをひっつかみ、部屋から飛び出した。
廊下を走りながら、すばやくベルトを腰につける。
階段を駆け降りる。
一階のロビーを走り抜ける。
全力疾走でホテルのフロントの前までできたレミーは、いきなり銃を抜き、フロント係につきつけた。
「驚かす気ないけど、ただちに答えて……。客室の水道管はどこからつながっているの？」
フロント係は、レミーの銃に驚いた気配を見せず天井を指さした。

「屋上の貯水槽……」
「サンクス」
そういうが早いか、レミーは再び全力疾走でロビーを駆け抜け、階段を駆け上がり、また駆け上がり、駆け上がり、一気に屋上まで上ると、屋上の出口のドアのわきに張りついた。
深呼吸して息を整える。
ドアのノブに手をかける。
ノブをひねった瞬間、ドアに体当たりするようにして飛び出し、両手で銃を撃つかまえをとった。
この時、屋上で何か動くものがあったとすれば、四十四口径の鉛の弾丸が容赦なくぶち込まれていたはずだった。
「待て！　撃つな、レミー」
「えっ？」
その声は、聞き慣れた声だった。
屋上の貯水槽の陰からポンプアクションのショットガンを持った真吾が姿を現した。
続いて、金色の髪を風になびかせながら、日本刀を持ち腰にムチを下げたブンドルが現れた。
「ここには誰もいない」
最後に現れたキリーがジャックナイフの柄で自分のほほを叩きながら、レミーにウインクした。
「俺達の他にはな」
そう言ってからキリーは、貯水槽のバルブをひねった。
ドーッと吹き出したものは赤くなかった。

「こん中はただの水だぜ……」
「……ただの水？……」
レミーは、バルブからほとばしる水を見つめた。
確かに、混り気なしの普通の水だ。
その時、先を争うように二人の男が屋上に飛び出してきた。
「血じゃ、血じゃ！」
わめいているのはケルナグールだ。
一緒に飛び出してきたカットナルが、医者の心得があるくせに、
「わしゃ、血を見るのはきらいじゃ」
恐る恐る貯水槽の方に目をやり、頓狂な声をあげた。
「おや、おまえさん達！」
キリーが二人に言った。
「ここには血の一滴もねえ」
「すると、あなた達も？……」
レミーは五人を見回した。
「どうやら、全員にラブレターか……。鼻血のおまけつきでな。俺達ゃ、そうとうもてるらしい」
キリーが肩をすくめた。
「血の洗礼か。同じ血なら良質のワインを願いたいものだ」
ブンドルがさりげなく言った。

その時だった。
ピカッ!
遠くで稲光が走った。
見ると、街の中央にある大神殿の上空がみるみる黒雲に覆われていく。
黒雲は、青空をぐんぐん食いつぶし始めた。
はじめて六人は神殿を意識した。
それまでは、見知らぬ街の見知らぬ建物でしかなかった。
だが、今は違う。
神殿の持つ意味は知らないが、何か得体の知れぬ威圧感を受けずにはいられなかった。
「血の洗礼を受けたものは必ず死ぬ」
六人の背後で声が聞こえた。
レミーに手紙を届けた女の子がいつの間にか屋上のはしに坐っていた。
女の子は、レミーを指さして抑揚のない声で言った。
「あなたは二日後……。誰も運命から逃げられない」
女の子の目の輝き、声の響き——、人間の子供とはとても思えなかった。
ヒュッ!
いきなり風を切って、キリーのジャックナイフが飛んだ。
女の子を傷つけるつもりはなかった。
ナイフは、女の子のスカートだけを、屋上のへりに張りつけるはずだった。

だが、ナイフが女の子のスカートに突き立つ瞬間、女の子の姿はスッと上昇した。
標的を見失ったナイフは、にぶい音をたて、屋上のヘリに突き立った。
「逃がさぬ！」
ブンドルの腰のムチが、うなりをあげて空中に浮いた女の子の体に巻きついた。
だが、ムチは女の子の体をすりぬけた。
「こんな……」
手ごたえすらなかった。
女の子は微笑を浮かべ、次の瞬間、後ろ向きに建物の外へ落ちていった。
六人は屋上のヘリに駆け寄り、下を見た。
どこにも女の子の姿はなかった。
「どういうこっちゃ、こりゃ」
ケルナグールがうめくように言った。
カットナルのカラスが一声高く鳴いた。
「よさんか、ただでさえ、お前、不吉がられとるのに……」
カットナルににらまれ、カラスはうつむいてみせた。
……こんなことって……
レミーはくちびるをかみしめた。
いきなり屋上の出口へ駆けていった。
後も見ずに階段を駆け降り、廊下を走り、自室に飛び込むと、四十四口径をかまえ、バスルーム

のドアを開けた。

「！」

レミーは声にならない声をあげた。

そこにあふれんばかりに流れていた血は、一滴もなかった。

元の、あまり清潔とはいえぬバスルームそのままだった。

レミーはシャワーに目をやった。

コックをひねってみる。

断水は終わっていた。

今、勢いよく流れ落ちているのは、貯水槽と同じ、普通の水だった。

……今度の敵は、いつもと違うのかもしれない……

めったに動じないはずのレミーの心音が、少しだけ高鳴った。

＊

レミーの小さな心臓は、今、激しく揺れていた。

レミーはパリの下町を走り続けた。

逃げて逃げて逃げまくった。

「待て、こら！」

後ろからお巡りさんや、あいつらの親達が追ってくる。
あいつら？　そう、わたしがやっつけちゃった三人のいじめっ子達……。あいつら、買物帰りのあたしを待ち伏せしてたんだ。そして、わたしが通りかかると……、
「あいつだよ！　あいつが僕らのお金を盗んだんだ！」
「あいつが街のレミーだよ。不良だよ。泥棒だよ！」
わたしのこと指さして、めちゃくちゃわめいてた。
それも、自分じゃこわいもんだから、あいつら、親やお巡りさんの後ろにかくれてわめいたんだ……。
「まったく、女の子のくせに、なんて奴だ」
誰かの親が、わたしの肩をつかまえた。
「育ちが育ちだからね。街の女が世話してるんだからね」
「この歳から警察のごやっかいになるんじゃ、先は見えてるね」
「どうせ、街の女は何回だって警察にしょっぴかれるんだからさ……。今から慣れておくのもいいんじゃないか？」
あいつらの親達は、こんなこと言って、みんなで笑いあった。
わたしだって知ってる。街のおばさん達は、お巡りさんに目の敵にされてるってこと……。みんな最低二回は、お巡りさんにつかまったことがあるってことも……。でも、おばさん達言ってた。そんなに悪いことしてるんじゃない。食べていけないからやってるんだ。食べていける仕事をくれない奴がいけないいんだって……。わたしだって、おばさん達がいなけりゃ、食べていけなかったん

だもん……。そう思ったら、なんだか泣きたくなるほど頭にきちゃって……。わたし、つかまえた奴の腕、フランスパン、丸ごと食べるみたいに、思いきりかじってやったの……。きっとあのおじさんの腕、私の歯型がしっかりついてるわ。
「イテテ」って、おじさんの手がわたしから離れて……、それがヨードンで……、後は走りっ放し……。騒ぎが大きくなって……だんだん追っかけてくる人、増えてきて、……まるでわたしを殺人犯かなんかと勘違いしているんじゃないかと思ったりして……。でも、わたし、絶対、死んだってつかまってやらないから……。うん！……。

レミーは、下町の横丁をこまねずみのように走り回った。
まわりがみんな、自分を追いかけてくる気がした。
実際は、駆けずり回る小さな娘に関心をしめすほど、街の日常は暇ではなく、レミーを追いかける者はほんの数人だったのだが、レミーにとっては、目に入るもの全て、街中が敵に思えた。
頭上から覆いかぶさり、おしつぶされるような暗く狭い路地を走っていたレミーの視界が、急に開けた。
下町にぽっかりと広がった空間——そこは墓地だった。
その墓地は、パリにいくつかある、例えばペールラシューズのような有名な墓地とは違い、著名な人物は誰一人眠っていなかった。
そこには、フランス革命で、パリ・コンミューンで、第二次大戦で、戦いに巻きこまれて、戦場に人知れず命を散らした名も知れぬ街の人々など、おおむね、人生や歴史の裏道で息絶えた人々が、

放りこまれるようにして眠っているのだった。
ここはレミーにとっても見慣れた墓地だった。
五年前に死んだレミーの母も眠っている墓地なのだ。
レミーは、朽ち果てた墓石の間を走った。
追手が、墓地に姿を現した。
レミーはためらわず、茂みの中へ飛びこんだ。
レミーは身をひそめて、あたりの様子をうかがった。
そして、人の気配が遠ざかるのを確かめた。茂みから出ようとして、一歩、足を踏み出した。
だが、その足の下には何もなかった。
腐った落ち葉の積みかさなった下に、ぽっかりと穴が口を開いていたのだ。
レミーは闇の中を落ちていった。
それは一秒の何分の一だったかもしれない。
だが、レミーにはずいぶん長い時間に感じられた。
どれぐらいの時間が経っただろう。
レミーが気がつくと、そこは穴の底、暗闇の真っただ中だった。
じめじめした湿気と、腐った枯れ葉や水のにおいが鼻についた。
レミーは叫んだ。
「ここどこ!?　わたし、どこにいるの!?」
誰の答えもなかった。

＊

五時間にわたるレミーの手術が、やっと終わった。
大学病院の教授は、彼の仕事を無事に果たした。
手術は成功し、レミーの体にひろがっていた病巣は、とりのぞかれた。
だが、それだからといって事態が好転した訳ではなかった。
事故と長時間の手術に痛めつけられ、衰弱しきったレミーの生存への期待は、やはり一パーセントの枠を越えるものではなかった。
手術室から特殊診療室に運ばれたレミーに命があると分かるとしたら、ゆっくりと動く心脈計だけだった。
レミーの体にできるだけの医学処置は施された。
あとは、レミー自身と生死を決める運命との領界だった。
五人の男達は待機室で、ただ黙って時の過ぎていくのを待つよりなかった。
やりきれない沈黙が五人の上に重くのしかかっていた。
やがて、待機室のドアをノックする音がした。
一同がドアに目をやると、待機室をのぞき込むようにして一人の男が入ってきた。
貧相な顔で、アタッシェケースをかかえ、おどおどと妙に落ちつきがなく、しきりにぺこぺこと頭を下げながら、五人に訊いた。

「あの……、レミー・島田さんの病室は……、こちらでしょうか」
「あなたは？」
真吾が訊いた。
「中古の車を売買している者なんですが、先日、レミーさんの車を売っていただく契約をいたしまして……」
「レミーが車を売る？」
キリーが訊きかえした。
「はい、葬式代ぐらいにはなるなどと冗談をおっしゃっていましたが、まさか、こんなことになろうとは……」
男はアタッシュケースを開け、書類を出しながら続けた。
「車はあの事故でスクラップです。とても中古車の値はつけられません。一応、契約は解除ということで……」
男は、嫌な仕事は手短かに逃げだしたいとでも言うように、内ポケットから小切手を出した。
「これ、少しで申し訳ありませんが……」
男は真吾に手渡した。
「これは？」
「あの車のスクラップ代ということで」
「こんな時にスクラップ代？」
いきなりキリーが立ち上がり、男のえり首をつかんだ。

「出てけよ。とっとと出ていけ！」
食ってかかるキリーと男の間に真吾が割って入った。
「よせ……」
そして、男を見つめて言った。
「ありがとう……。確かに、この金はあずかったよ」
「はあ、どうも……。お大事に……」
男はそれだけ言うと逃げるように待機室から出ていった。
小切手を見る真吾にケルナグールが言った。
「そんなものを受けとって、あんた、まさか、レミーさんをもうあきらめた訳じゃ……」
真吾はかぶりを振った。
「そうじゃない……。そうじゃないが……、いつも一人で生きてきたレミーが最後に用意した金だ。レミーは、きっと自分の病気のことを知っていた。おそらく死ぬのを覚悟していた。だからこそ最後に俺達に会おうとしたんだ。四十年ぶりの俺達とな……」
真吾は小切手を握りしめた。
ブンドルは、冷たく光る面会謝絶のランプをじっと見つめていた。

第3章 出口のない街

……一体、あれだけ流された血はどこにいってしまったのか？……
名も知らぬ街のホテルのロビーに、六人はぼんやりと坐っていた。
血が、痕跡すらなく消えてしまったのは、レミーの部屋だけではなかった。
六人全ての部屋で同じ現象が起こったのだ。
カットナルが気をとりなおして口を開いた。
「もったいなかったの。あれだけ血があれば、何人輸血ができるか分からんのに、すぐ消えちまうとはな……、ワハハハ」
カットナルの高笑いに、誰も乗れる心境ではなかった。
ただ、しらけて肩をすくませるだけだ。
やがて六人の部屋を調べていた警官が、ロビーに降りて来た。
「事情は分かりました。しかし、こんなことで大騒ぎされても困りますな」
平然と言ってのける警官に、真吾は訊き直した。
「こんなこと？」
「この街では、運命の手紙と、すぐに消える血の洗礼は、ごく当たり前ですからな」
警官の答えにケルナグールがわめいた。
「なにが当たり前じゃ。ボクシングやプロレスだって、ああは流れんぞ」
警官は、あわれむような目付きで六人を見つめた。
「この街では、死が近づけば誰もが運命の手紙をもらい、血の洗礼を受けるのです。そして神に祈り、心の準備をする」

レミーがぼそりと呟いた。
「心の準備?……。黙って死ぬのを待てっていうの?」
警官の代わりに、背後からしゃがれた声が聞こえた。
「さよう、誰も、神の定めた運命を変えることはできぬ……」
振り返る一同の前に、杖をついた老婆が立っていて、レミーを指さした。
「たとえ、あんたが異国の人であろうとな……さ、神に祈るがよかろう」
その時、街中の鐘の音が鳴り響いた。
「日没の祈りじゃ」
ロビーにいた客が、従業員が、警官達が、皆、一斉に床にひれふし、祈り始めた。
街中が祈りの洪水だった。
ただ六人だけが、とり残されたように立ちすくんでいた。
カットナルが吐き捨てるように言った。
「馬鹿馬鹿しい。わしの作ったカットナル製薬の薬は、今まで何人もの命を救った。人の運命を変えてきたんじゃ」
カットナルの言葉に答えるように、遠くで落雷の音がした。
ピシッ!
カットナルの頭上で何かのはじける音がした。
真吾が頭上を見た。
ロビーのシャンデリアがゆれた。

「危い！」
真吾は叫ぶと同時に、カットナルに体当たりをしてはじき飛ばした。
間一髪だった。
今先刻までカットナルがいた場所に、シャンデリアが落ち、はじけ散ったのだ。
一つしかない目を丸くするカットナルに、真吾は「助けたぜ」とでも言うように親指を立て、ニヤリと笑った。
だが、他の四人は笑えなかった。
シャンデリアの落下は、偶然とはとても思えなかった。
確かに、何か得体の知れない力が、シャンデリアに加わったとしか思えなかった。
だが、カットナルは、気味の悪さを吹き飛ばすように強がった。
「ウ……、ウ……、ほら、見るがよい。わしはピンピン、どこにもケガはない。運命の手紙などにするものぞじゃ……」
ロビーにひれふして祈っていた街の人々が、凍ったまなざしでカットナルを見つめた。それは、明らかに憎悪に満ちた眼だった。
いつの間にか祈りの響きは消え、六人と街の人々の間に気まずい沈黙が流れていた。
先刻の老婆が、カットナルに語りかけるでもなく呟いた。
「お前さんが受けとった手紙は、今日、死ぬことにはなっておるまい」
老婆は、カットナルを見すえてから目を閉じて微笑した。
「運命の予告は変わらぬよ……」

その言葉には、六人の胸に響く重さがあった。
警官が、六人に向かって言った。
「このホテルを出ぬことだな。運命にさからう者は街のにくしみを買う」
レミーは肩をすくめてキリーに言った。
「どうする」
キリーはニヤリと笑った。
「出ちゃダメなんて言われてもね」
「子供はそう言われると、よけい出たがるものだ」
ブンドルが素気(そっけ)なく言った。
「部屋にこもっとるのも、いいかげん、うんざりしてきたとこだしな」
ケルナグールが大きく伸びをした。
「厄払(やくばら)いが必要じゃの、運命さんの」
カットナルが、シャンデリアの残骸(ざんがい)を足でつっついて言った。
「俺もつきあうぜ」
真吾が最後にそう決めて、六人は街に繰り出すことにした。
路面電車の往きから大通りの中ほどに、砂漠の街には場違いに派手なネオンサインがまたたいている酒場があった。
もっとも、砂漠の真ん中にぽっかりと浮かんだ不夜城、賭博の街、アメリカのラスベガスを思え

ば、砂漠とどぎついネオンサインも、案外、似合っているのかもしれなかった。
夜の街を楽しもうと、ロングドレスで洒落て、酒場に五人と繰り込んだレミーは、酒場の中を見て、思わずニッコリと笑った。
まさにそこはラスベガスのカジノ風だったのだ。
いや、むしろラスベガスによくあるカジノに比べても、洗練されているといっていいかもしれなかった。
むせびなくようなピアノが流れ、ルーレットが回り、カードを楽しむ客がさんざめいている。
賭博場にしては客質が良いのだろう、賭けに熱くなる様子もなく、優雅に楽しんでいる。
……この街はどうなっているんだろう……。運命にさからえないとか言っちゃって、しっかり賭け事は楽しんでるのよね……。運命が決まっているなら、賭け事やってもな～んも面白くないでしょうに……
レミーと同じ思いだったのか、ブンドルが微笑して言った。
「どうやら、この街では、ルーレットやカードの目は、運命とは別物らしい」
六人は、片隅のテーブルに坐ると、それぞれの飲み物をボーイに頼んだ。
レミーはコニャック。キリーはとうもろこしから作られたバーボン風ウイスキー。禁酒中の真吾は乳酸飲料、飲めないカットナルはミネラルウォーター、ケルナグールは地酒風の焼酎……。ブンドルは、この酒場で一番売れている赤ワインをボトルごと頼んだ。
見知らぬ土地では、下手な高級酒より一番売れている果実酒を飲む方が無難なことを、長年の酒

体験からブンドルはよく知っていたのだ。

六人は、それぞれの飲み物で口をしめらせ、一息つくと、まるでトランプのカードを投げるように、手紙をテーブルに出した。

「あのばあさんの言うように、わしの死ぬのは四日後だそうだ」

カットナルが言うと、肩の上のカラスも頷いた。

「わし、五日後」

ケルナグールである。

キリーが、……指を三本立てた。

「三日……」

真吾がつけ加えた。

「プラス一日、俺は四日後。カットナルと同じか……」

ブンドルが、ゆっくりと立ち上がって言った。

「指おり数えても仕方のないことだ」

レミーは、コニャックのグラスを見つめて呟いた。

「ようするに、わたしが一番早いわけよね……。よかった。みんなの死ぬとこ見ないですむから……」

「そうはさせんよ、レミー」

真吾がきっぱりと言った。

キリーが、ウイスキーグラスの中の酒をゆらしながら呟いた。

「俺には何もなかった。何もないまま終わる訳にはいかん」
キリーは、いつものウインクをレミーに送って言った。
「特にレミーちゃんとはね」
ケルナグールがこぶしを握りしめて言った。
「ともかく、こんな街とはおさらばじゃ」
カットナルがカラスと一緒に頷いた。
「レミーさんと一緒にな」
レミーは、コニャックのグラスを見つめた。
うれしかった。
グラスの中の琥珀の液体がにじんで見えた。
「ありがとう、みんな」
レミーはグラスを持ち上げ、気をとりなおすように肩をすくめた。
「なんちゃって、しんみりしたってしゃあないから……、カンパイ！」
レミーと四人のグラスが、かわいた音を出した。
それを合図にしたように、酒場にピアノ曲が流れた。
曲名は分からなかったが、心のなごむやさしさがあふれた旋律だった。
レミーと四人は、フロアのピアノに目をやった。
いつの間にか、ブンドルが弾いている。
ブンドルの弾く曲は、思いつくままの即興曲だったが、テーマはレミーだった。

「美しいバラが枯れるには、まだ早すぎる」
ブンドルの呟きはレミーに聞こえなかったが、ピアノの響きだけで、十分すぎるほど、うれしかった。
もしかしたら、レミーにとってその時のピアノ曲は、ショパンを、リストを、いやモーツァルトすらしのいでいたかもしれなかった。
この砂漠の街へ来て数日、レミーも男達も、かわききった殺伐さしか味わっていなかった。
ひさしぶりのしっとりした時間に一同は酔った。
だが、その時間も長くは続いてくれそうもなかった。
この酒場には不似合いな一団が、ずかずかと入って来たのだ。
薄汚れた服を着て、手に手に棍棒やなたを持って、その一団はレミー達のテーブルをとり囲んだ。
一団の中央にいる男が、棍棒をもてあそびながら、無表情に言った。
「運命の神に逆らう奴は許せん」
キリーがからかうように答えた。
「おい、おい、ご予定が早すぎるんじゃありませんかね」
男は表情一つ変えずに言った。
「運命は変えられぬ。今は死なぬ、お前達をどんなに傷つけてもな」
その言葉に、テーブルの五人は顔を上げ、ニヤリと頷きあった。
「なるほどね。神様のおスミつきってわけか」
キリーが肩をすくめた。

レミーはニッコリとチャーミングに男に笑いかけてから、こぶしを握り指を鳴らした。
「じゃあ、安心してお相手できるわね」
先刻からピアノを弾き続けているブンドルの顔に微笑が浮かんだ。
「……過激な女だ……」
ブンドルはこともなげにピアノを弾き続けている。
「うおおお！」
いきなり奇声をあげ、棍棒をふりあげた男が、テーブルの五人に殴りかかってきた。
五人はイスを引き、すばやくテーブルから身を離した。
男の棍棒がふりおろされ、テーブルがまっ二つに割れた。
それが合図だった。
一団は、棍棒やなたを振り上げ、五人に殺到した。
キリーはニヤリと笑うと、ふところからメリケンを取り出し、手にはめた。
「今夜、傷つく運命は、お前達さ」
キリーのストレートがうなり、棍棒を持った男がルーレット台にふっとんだ。
「男は黙って……」
しかし、真吾の空手は黙っていない。おまけに柔道五段の腕もなまってはいない。
たちまち、足元に数人の男達が気絶して倒れていた。
ブロンクスの暗黒街仕込みのけんか拳法のキリーと、国連軍仕込みの正統格闘技の真吾の場合は、まだ乱闘の様相が見てとれたが、ケルナグールの場合は、まさにちぎっては投げで、まるで親にし

かられたワンパク坊主が焼けを起こして、おもちゃ箱をひっくり返して暴れ回っている様子だった。
レミーも、ロングドレスながら、テーブルの上に飛び上がり、駆け回り、つかみかかる一団のあごを片っ端から蹴り飛ばし、水を得た魚のように暴れ回った。
「ひさしぶりのダンス！　あつい日にはもっと汗をかこう」
確かに、その動きはブンドルのピアノに合わせて、踊っているかのようにすら見えた。
一方、カットナルはといえば、もっぱら柱の陰で、
「暴力反対……」
とか言いながらも、すばやくカニの横走りを見せ、レミー達に襲いかかる一団の後ろに忍び寄り、
「おい、諸君、大丈夫かな。ホレ、薬じゃ」
思わず呆気にとられている一団の口の中へ丸薬を放り込んでいく。
薬を飲んだとたん、一団は目をとろんとさせて倒れていった。
カットナルは得意そうに頷いた。
「効きめ一発、特製シビネムール」
当然です……、とでも言うように、カラスが一声、満足そうに鳴いた。
大乱闘で、一見洗練された様相を呈していた酒場は、見る影もなく破壊された。
洗練されているのは、相変わらずピアノを弾き続けているブンドルの周囲だけだった。
やがて、それも――。
レミーが投げとばした男が、ピアノの鍵盤の上に倒れ込んだ。
ガシャン。

すさまじいアタックの音で、ピアノ曲は終わった。
レミーが、ピアノに倒れ込んだ男の胸ぐらをつかみ上げてから、ブンドルに言った。
「失礼、ピアノの邪魔しちゃった」
「いや、かまわぬよ。ちょうど力強いフォルテが必要な部分だった」
「サンクス。素敵なピアノ、みんなも聞きほれて楽しく踊れたみたい」
二人は見つめあい、微笑した。
その時だった。
突然、銃声が響いた。
身がまえる六人の手には、一瞬のうちに応戦用の銃が握られていた。
酒場の入口から、銃を持った警官達がなだれ込んで来た。
ホテルのロビーにいた警官が先頭に立って叫んだ。
「待て！　わたし達は君らを守りにきた！」
警官達は、六人をとり囲んで守る姿勢をとった。
警官は、六人を襲った一団のリーダー格の男に銃を向けた。
「消えろ！　暴徒ども」
無造作に、いきなり発砲した。
胸を打ち抜かれた男は声もあげずに倒れて、動かなくなった。
それを合図に、警官達は次々に銃を撃ちだした。
情け容赦なく、銃弾は暴徒達を打ち倒していく。

銃声が鳴り止んだ時、酒場の床には暴徒達の死体とけが人達がうめき声をあげて倒れていた。
「馬鹿な……」
真吾が吐き捨てるように言った。
他の五人は、呆然と立ちすくむだけだ。
国連破壊工作員だった真吾ですら、こんな問答無用の殺戮を目の前で見たことはなかった。
「これが、この街の警察のやり方か？」
問いつめる真吾に、警官は平然と答えた。
「市民を暴徒から守るのは私達の役目でね。君達は、この街にいる以上、私達警察にとって守らなければならぬ立派な市民ですからな」
キリーが、倒れている一団に顔をしかめて言った。
「これも、こいつらの運命だってのか？」
「その通りだ。そして君達には君達の運命がある。その日まで、ホテルから出ないでほしい。この街の治安維持のためにもな」
ケルナグールが口をとんがらかして警官に言った。
「それなら心配はいらんぞい。わしらは、この街から出ていくわい」
警官は冷ややかに答えた。
「この街に外はない。君達は、すでにこの街の人間だ。この街から逃げられはしない」
「運命から逃げられぬのと同じようにか？」
ブンドルが警官を見すえて言った。

「そういうことだ」
警官は表情のない目でブンドルを見つめ、笑った。
先刻から、床に倒れていた死体やケガ人をのぞき込んでいたカットナルが、真吾の傍らに来てささやいた。
「真吾君、気が付いていたかな」
「なにが？」
真吾が訊き返した。
「こいつら、少しも血を流しておらん」
「ん？」
「何が消える血の洗礼じゃ、こいつら最初から血なんか持っとらんのじゃ」
……！　だとしたら、一体、こいつらは何なんだ……。この街は何なんだ？……
六人は、この街に蠢く異種の人間達に、はじめて恐怖を覚えた。

酒場から出た六人は、サイドカーに先導された警官達に守られてホテルに向かった。
六人を見つめる街の人々の視線は、憎悪に満ち、痛いぐらいだ。
キリーが真吾にささやいた。
「街の全てが、敵か……」
「みんな、確かに何かにあやつられている」
キリーは背後を指さした。

夜空に、神殿が不気味に光ってそびえ立っている。
レミーがぼそりと呟いた。
「つぶす？」
キリーが肩をすくめた。
「つっぱりがすぎまっせ、レミーちゃん」
「無駄なけんかはいいは美しくない」
ブンドルが静かに呟いた。
「そう、この際、とんずらに限る」
キリーに真吾がうなずいた。
「逃げるにゃ慣れてる」
「それっきゃないのかな」
レミーは何となく物足りなくて、くちびるをかみしめた。

六人の戻ったホテルのロビーには、いたるところに警官の姿があった。
キリーが口笛を吹いて、思わずぼやいた。
「ごたいそうなこったね」
「君達を守るためだ。運命の日までな」
警官の顔にひきつった笑いが浮かんだ。
「やりにくくなったな」

真吾がロビーを見回して言った。

……こう見張りが多くては、逃げだすのも楽ではない……

キリーが、そんな思いを吹き飛ばすように、おどけて真吾の肩をつついた。

「いつものことだろ？　なんとかやってきたじゃん、今まで……」

「それはいえる。でもな〜」

「出たとこ勝負、出たとこ勝負よ」

「ま、なるよになるしかないけどね。この際しゃあないか」

「しゃあない、しゃあない」

レミーはまるでひとごとのような二人の話に肩をすくめた。

「疲れた……。わたし、部屋に失礼するわ」

キリーが、レミーの前に出て頭を下げた。

「マイ・フェア・レディ、部屋までお送りしましょうか」

レミーも丁重に頭を下げた。

「サンクス。でも大丈夫。警官がいっぱい。おやすみのキスもできそうもないもん。ボーヌニュイ、おやすみなさい」

レミーは五人をロビーに残して、階段を登っていった。

「ん？」

部屋の前の廊下に来たレミーは、ふと足を止め、眉（まゆ）をひそめた。

……人が一人もいない……。あれほど大勢いた警官が、この階には一人もいない……
レミーは、ロングドレスの下の太股にかくした四十四口径を取り出した。
レミーの戦士としての動物的ともいえるカンが、得体の知れない危険を感知したのだ。
部屋の前に足音をたてずに忍びよる。
ドアのノブに手をかける。
鍵が開いている。
次の瞬間、廊下のあかりが消えた。
レミーは、ドアを開くと、かまわず中へ飛び込んだ。
そして、ベッドの上の光景に目をやり、思わず立ちすくんだ。
そこに、もう一人のレミーがいた。
しかも、巨大な狼のような獣におさえつけられ、うめき声ともつかぬすすり泣きをあげている。
獣は血走った目で、レミーの服をひきちぎり、よだれをたらしながら、レミーの肌をなめまわしている。
あけはなされた窓辺のイスに、手紙を持ってきたあの女の子の坐っている姿が浮かび上がる。
女の子は一見無邪気だが、凍りつくような視線をレミーに向けた。
「これが、二日後、あさってのあなた」
獣がベッドの上の裸のレミーの首筋に牙をたてた。
レミーの白い肌を血がしたたる。
「悪趣味！」

レミーは獣に向け、四十四口径を撃った。
手ごたえはあった。
だが、確かに当たっているはずなのに、獣は倒れない。
獣は銃を持ったレミーを見つめ、ニヤリと笑った。
女の子の声が部屋中に響いた。
「それは弾では倒せないわ」
レミーはかまわず四十四口径を撃った。
弾は獣にぶち当たり、火花のような光がはじけた。
だが、獣は何ごともなかったように、ベッドの上のレミーの体をむさぼり続ける。
「倒せないといったでしょう」
女の子の声が部屋中を駆け回る。
「さあ、あなたの運命を見つめなさい」
レミーは、もう一人のレミーに顔をそむけ、後ろのドアを開けようとした。
だが、先刻まで鍵の開いていたドアは、かたく閉じてビクとも動かない。
「さあ、もう逃げられない。あなたの最期を見つめなさい」
女の子の言葉に、レミーはきっと向き直った。
「いいわ、お見せなさい。あなたの馬鹿らしさを見てあげるわ……。あなたが誰かは知らないけれど、私は負けない」
女の子は、そんなレミーに笑いを絶やさなかった。

もう一人のレミーのすすり泣きが悲鳴に変わった。
レミーは、ベッドの上のレミーをじっと見すえた。
獣の牙は、レミーの首筋を食いちぎった。
血が飛び散る。
レミーの裸の手足がぴくぴくと痙攣する。
獣は首筋から牙を離すと、乳房に食らいつきひきちぎった。
ベッドから血がしたたり落ちる。
肉を食いちぎり、かみしめる音が、ゆっくりと、次第に大きく聞こえてくる。
見つめるレミーの目は、大きくうつろに見開かれている。
銃を持つ手はだらんとたれ下がり、撃つ気力も失せた。
自らがいたぶられ、食いつくされていく姿をこうまで見せつけられて、次第に目から涙が吹き出してくる。
自然に流れ出る涙は、もう止めようとしても止まらない。
体がふるえだす。
レミーは絶叫した。
「やめて！　お願いだから、やめて！」
レミーはドアを背にして、ずるずるとへたり込んだ。
「そう、それでいいの……。あなたは勝てはしない。二日後をお待ちなさい」
女の子は勝ち誇った、しかし、どこか悲しい微笑を浮かべてレミーに言った。

獣がレミーの上から飛び降りた。
ベッドの上のレミーは、ずたずたにひきちぎられて、ぴくりとも動かない。
女の子と獣の姿は、吸い込まれるように窓の外に出て、夜の街を走り抜けていく。
がっくりとうなだれ、うちのめされたレミーの後ろでカタンと鍵の開いた音がして、部屋のあかりが元に戻った。
明るくなった部屋のベッドの上に横たわっていたはずのレミーの体は消え、寝乱れたシーツがあるだけだ。
レミーは顔を上げ、立ち上がると、涙をそでぬぐった。
レミーの気持ちは、まだ完全に負けた訳ではなかった。
そのまなざしにきびしさが戻り、レミーは、窓辺に駆け寄った。
街の屋根の上を獣の背に乗った女の子が、神殿に向かってゆっくりと浮かぶように遠ざかっていく姿が見えた。
レミーはむしり取るようにロングドレスを脱ぎ、すばやく戦闘服に着換えると、四十四口径をホルスターのついたベルトに叩き込み、窓から雨どいを伝って夜の街へ出た。

レミーは獣と女の子の姿を追って、夜の街を走った。
獣と女の子はレミーからつかず離れず、まるでさそっているかのように屋根の上を走り続けた。
レミーは追い続けた。
ここまで来たら、とことんやるつもりだった。

やがて、獣と女の子は屋根の上から石畳（いしだたみ）の街路に降りた。
どこからともなく祈りの声が聞こえてくる。
獣と女の子の姿が、横丁の路地を曲がって消えた。
レミーはすばやく後を追った。
だが、もうその路地に獣と女の子の姿はなかった。
レミーは、あたりを注意深くうかがった。狭い路地から見上げる夜空に、神殿が巨大になって覆（おお）いかぶさって見える。
レミーは気付かぬうちに、神殿の足元近くまで来ていたのだ。
コツン、コツン。
背後で足音がした。
レミーは立ち止まった。
足音も止まる。
レミーは歩きだす。
足音も動く。
次第に路地はせばまってくる。
レミーは腰の銃に手をやり、慎重に進んだ。
ガタン！
目の前の暗がりが動く。
銃を抜く。

ごみ箱の上に、小さな黒い猫がいて毛を逆立てていた。
レミーは、動きの主を知ってふっと微笑した。
と、そのとたん、レミーの顔に男の手がかぶさった。
「！」
男は路地のすきまにレミーを引き倒そうとした。
正面からは別の男が襲いかかってくる。
死んだような血走った目——あの獣と同じ目だ。
レミーは四十四口径の引き金を引いた。
至近距離の銃弾で、男の体は後ろにふっ飛んだ。
反動で上にはねあがったレミーの腕から、後ろからつかみかかっていた男が銃を叩き落とした。
石畳の路上を四十四口径がすべった。
後ろの男は人間とは思えない強い力で、レミーをはがいじめにする。
前から新手の男が現れ、レミーを押さえつける、
男はニヤニヤと笑いながら、レミーの戦闘服の肩をひきちぎった。
レミーの白い肩があらわになる。
男は興奮を露骨に表情に出して、血走った目でレミーにむしゃぶりついた。
だが、次の瞬間、男の体は大きくのけぞると、体を細かくひくつかせながら、レミーに覆いかぶさって動かなくなった。
男の背中にはジャックナイフが突き立っていた。

「レミー、そのナイフをつかえ！」
闇の中から男の声がした。
レミーはナイフを抜き、前の男を突き飛ばすと、後ろではがいじめにしている男の横腹にナイフを叩き込んだ。
後ろの男に寄りかかられるようにして倒れたレミーに、闇の中から聞こえた声の男が手をさしのべた。
キリーだった。
「こいつら、レミーの相手にゃ百年早いぜ」
「キリー、サンクス。でも、どうしてここへ？」
キリーは倒れている男の体からナイフを抜き、刃を閉じながら答えた。
「レミーが窓から抜け出した時からマークさ。それが知れると、一人でやりたがりのレミーちゃん、俺達をまいちゃうかもしれんのでね」
「私をつけていたの、キリーだったんだ」
「あら、バレてた？」
「ちょっと前からね。でも、下手にまかなくてよかった」
「チェッ、俺ぁレミーや真吾と違って尾行のプロじゃねえもんな。これから私立探偵の勉強でもするか」
「でも、キリー、私のことで迷惑はかけられないわ」
「いいや、レミーが生きのびることができれば、運命さんとやらもあやしくなる。三日後の俺も生

きのびるさ」
キリーはレミーの肩に手を置いて、言った。
「いいか、レミー。今回は素直に俺達に守られろ。気兼ねはいらん」
「キリー」
レミーは泣きたいほどうれしかった。
「みんなも同じ気持ちさ」
そう言ったキリーの顔に、ふっと真剣さがよぎった。
路地の向こうから、ゆらりゆらりと男達の集団がこちらに向かってやって来る。
「どうやらおいでなすったようだ」
「うん」
キリーは路上に落ちていたレミーの四十四口径を拾って手渡した。
もともとこの銃はキリーが愛用していたものだったが、レミーの護身用にプレゼントしたものだった。
〃もっと女性向きの銃を調達してやる〃と、キリーは言ったのだが、〃とりあえず、これでいいわ〃と、なかば強引に取り上げられ、それっきりレミーに気にいられ、使い続けられた銃だった。
「レミー、この銃はでかすぎて、連射にはむかない。撃ちすぎると手がいかれちまうぜ」
キリーの忠告に、レミーはコクリと頷いた。
「分かってる。でも、使い慣れてるもん」
「よっしゃ、ここは俺にまかせて、行きな」

……でも……

言いかけたレミーに、キリーは人差し指を振って見せた。

「ノン、ノン、ノン……。何も言うな。俺の死ぬのは三日後だ……。また会おうぜ」

ここまで来たら、もう言葉はいらなかった。

レミーは気持ちをこめて、いつもの決まり文句を言った。

「うん。SEE YOU AGAIN……」

レミーは後を見ずに走り出した。

キリーはニヤリと笑うと、やって来る男達に向き直り、ふところからジャックナイフとチェーンを出し、身構えた。

狭い路地で戦うには、一番実用的な武器だったし、ニューヨークのブロンクスの薄汚れた横丁のけんかでいりに慣れたキリーには、この狭さは戦いやすい場所だともいえた。

レミーは、夜の街をホテルに向かって走り続けた。

再び、どこからともなく祈り声が聞こえてきた。

レミーはあたりを見回して、ふと立ち止まった。

長い石の壁が続いている。

見覚えのある壁だった。

そう、それは、送られてきた写真の中の一枚、逃げまわるレミーの背後に写っていた壁と同じものだった。

……あの写真の通りのことが起きるとしたら……

レミーは銃を抜いて身構えた。

祈りの声が次第に大きくなる。

やがて──。

街角から、ぞろぞろと追手達の姿が現れた。

とても一人で相手のできる数ではない。

……逃げの一手だ……

レミーは猛然と走りだした。

だが、追手は前方にも姿を現した。

これも無数といってよい数だ。

手に手に棍棒やクワやスキを持って、じわりじわりと近づいて来る。

……はさまれた……。逃げ場がない……

レミーはすがるように、あたりを見た。

くずれかけたビルがそそり立っている。

……こうなったら、上に逃げるよりない……

レミーは路上に置き捨てられた木箱を足場にして、ビルの一階のひさしに飛びついてよじ登った。

追手達はレミーの足元に集まって、レミーを見上げた。

レミーは、さらに二階、三階と、ビルの外壁を上に逃げた。

追手達も、一人、また一人と外壁をよじ登ってくる。

レミーはさらに上に逃げた。
しかし、そのビルに上はなく、レミーは荒い息で屋上に坐り込んでいた。
レミーは、すぐにビルの外壁を見降ろした。
追手達は壁にとりついた無数のヒルのように、ざわざわと少しずつ上に登ってくる。
レミーは屋上を走った。
だが、すぐに屋上は行き止まりだった。
隣のビルまでは、ジャンプしたところで、とうてい飛び移るのは無理な距離だった。
一人、また一人、追手は屋上に登りついた。
その数はみるみるふくれあがり、レミーに向かってやって来る。
レミーは銃を抜き、頭上に向けて撃った。
「来ないで！」
だが、この威嚇射撃に、追手達はまるで動じた様子は見せなかった。
無表情に、じわじわとレミーをとり囲んだ輪をせばめてくる。
レミーは、追手の足元に向け銃を撃った。
一発、二発……。
追手は誰も足どりを止めない。
レミーは肩を落とした。
仮に銃で追手を撃ったところで、これだけの数の追手だ。すぐに弾がつきてしまう。
……ゲームセットか……

レミーは銃を持つ手を降ろした。
その時だった。
屋上に続く階段の鉄のドアが開き、男が飛びだして来て、ショットガンを連射した。
散弾が、屋上のコンクリートに火花を散らしてはじけ、追手の数人がまとめて倒れた。
ポンプアクションで、ショットシェルをはじきながら四発を連射した男は、レミーに駆けより、ひきずるようにしてドアの中に飛び込むと、鍵がわりの鉄のかんぬきをかけた。
男は、ウィンチェスターM97・12ゲージ・ショットガンによく似たショットガンにすばやく弾を入れた。
真吾だった。
「あいさつは後だ。あいつらは人間じゃない。並のやり方じゃ助からん」
ドアが外からの体当たりで揺れた。
屋上の窓が次々に破られた。
「先に行け。レミーの運命は俺が守る！」
真吾は窓に向け、ショットガンを撃ちまくった。
「真吾！」
「早く行け。ここをふっ飛ばす」
真吾は小型爆弾を出し、レミーに見せた。
屋上に通じる階段のいたる所に、同じような爆弾が仕掛けられている。
「了解！」

レミーは階段を駆け降りた。
ドーン、屋上のドアが破られ、追手が殺到する。
真吾は階段を飛び降りながら、爆弾を屋上に向け投げた。
階段の爆弾は次々に誘発し、屋上ごと空に吹き飛んだ。
真吾は炎に追われるように階段を走り降り、先を行くレミーを抱いて、階段から下のフロアに飛び降りた。
再び屋上で大爆発が起こり、レミーと真吾の頭上にはぽっかりと穴が開き、星空が見えていた。
「元国連破壊工作員、なまっちゃいない」
真吾はレミーを抱いたまま、ニヤリと笑った。
そして、腕の中のレミーに気付き、いまさらのように照れて、あわてて体を離して、ぼそりと言った。
「外、行こ、ビルの外……。ここ、暗すぎる」
……真吾って、いつもこうなんだから……。明るいところじゃ、それこそ何もできないくせに……
レミーは肩をすくめるよりなかった。
ビルの外は、屋上の爆発の破片が落ちて、惨澹たるありさまだった。
ビルの下にいた追手達も、ほとんどが崩れ落ちた破片の下敷きになったようだった。
「やりすぎじゃない」
レミーが目を丸くして言った。
「でも、なさそうだ」

真吾の見つめる方を見たレミーは、うんざりして肩を落とした。
瓦礫の間から、追手達がむっくりと起き上がったのだ。
「奴らも俺達と同じで、くたばるつもりはないらしい。レミー、逃げろ。ここは俺が何とかする」
「もう逃げるのはいや！　私もやるわ」
「馬鹿！　俺達の苦労を無駄にするな！」
真吾が強く言った。
「だって！」
「これは、リーダーの俺の命令だ……。あれ！　昔のくせが出ちまったな……」
真吾は苦笑した。
「早い話が、レミーがいると気になって、足手まといなんだ」
「真吾……」
真吾は何がなんでも、レミーを逃がそうとしていた。
レミーは真吾を見つめて、ふりきるように言った。
「サンクス！」
レミーは、真吾を残して走り出した。
真吾は、ショットガンのショットシェルをポンプアクションではじきだすと、追手に向かってかまえた。
「これっきゃ芸がないのかね、俺は……」
確かに、真吾には戦う姿が一番似合っているのかも知れなかった。

レミーは走り続けた。
背後で、真吾のいた街角のあたりが次々に爆発して炎上している。
真吾が追手相手に、相当、派手な応戦をしているようだ。
レミーは立ち止まり、荒い息を静め、手に持った四十四口径を見つめた。
あの得体の知れない獣に発砲してから六発、弾はなくなっているはずだった。
……弾を入れなきゃ……。ウッ……
レミーはシリンダーをはずそうとして、思わずうめき声をもらした。
指が引き金にこびりついて取れないのだ。
……撃ちすぎたのかしら、指がうまく動かない……
それでも、ベルトの弾丸入れから弾を取りだし、シリンダーに一発一発はめこみ、かまえてみた。
手がぶるぶるふるえている。
……そうとうやばいな……
その時だった。
シャーッ！
聞き慣れない音が路上に響いた。
それも一つだけではない。
次から次から増幅されて聞こえてくる。
……なんの音？……、あの嫌らしい呪文でないだけましかな……

その音の正体を知った時、レミーは少なくともましとは言えなかった。
月あかりに照らされた道に、自転車の銀輪が光った。
やがて、その数はぐんぐんふくれあがっていく。
あの音は、自転車のタイヤが石畳の道をかむ音だったのだ。
自転車の群れは、ぐんぐんスピードをあげ、レミーに向かって走ってくる。
……今度は自転車か……。せこい相手だけれど、もう駆けっこには勝てそうにないな……
レミーは溜め息をつくと、銃をかまえた。
……それでも、往生際の悪い私としては……
レミーは、自転車の群れに向かって発砲した。
銃の反動に顔をしかめる。
指がびりびりとしびれる。
先頭の自転車の車輪がふき飛び、倒れ、後ろの自転車もまき込まれて次々に転倒した。
だが、自転車の群れは、それを乗り越えてやって来る。
……きりがないわね……
その時、路上の物陰から男の声が聞こえた。
「無駄な弾は使わぬことだ」
「えっ？」
「自転車に勝てぬなら、勝てる道具を用意することだね」
オートバイのエンジン音がして、レミーの前にサイドカー付きのバイクが飛び出し、自転車の群

れに突っ込んでいった。
オートバイに乗っているのは、金髪の髪をなびかしたブンドルだった。
片手運転のブンドルの手に握られた刀が、次々に自転車の車輪を切り裂く。
自転車の群れの中を駆け回ったブンドルのオートバイは、再びレミーの横に戻ってきた。
「レミー、乗りなさい」
「サンクス！」
レミーはオートバイのサイドカーに飛び乗った。
ブンドルはエンジンをふかすと、もう一度、バイクをサイドカーごと自転車の群れに突っ込んだ。
自転車ははじき飛ばされ、次々に倒されていく。
一気に自転車の群れを突っ切ったバイクは、そのまま路上を駆け去っていく。
「カッコイイ……。こんなもの、どこで？」
レミーがサイドカーからブンドルに叫んだ。
「警察のを拝借した。元々、得意でね」
「名前の通りね」
「ぶんどったのではない、借用証なしで借りたのだ」
夜の街を、オートバイは心地よいエンジン音を響かせ走り続けた。
街は静まりかえり、オートバイの疾走をさまたげる者は、もう現れそうになかった。
夜の砂漠の冷気が、昼間の猛暑がうそのようにレミーのほほをすり抜けていく。
レミーは少しはしゃいだ気分で、ブンドルに言った。

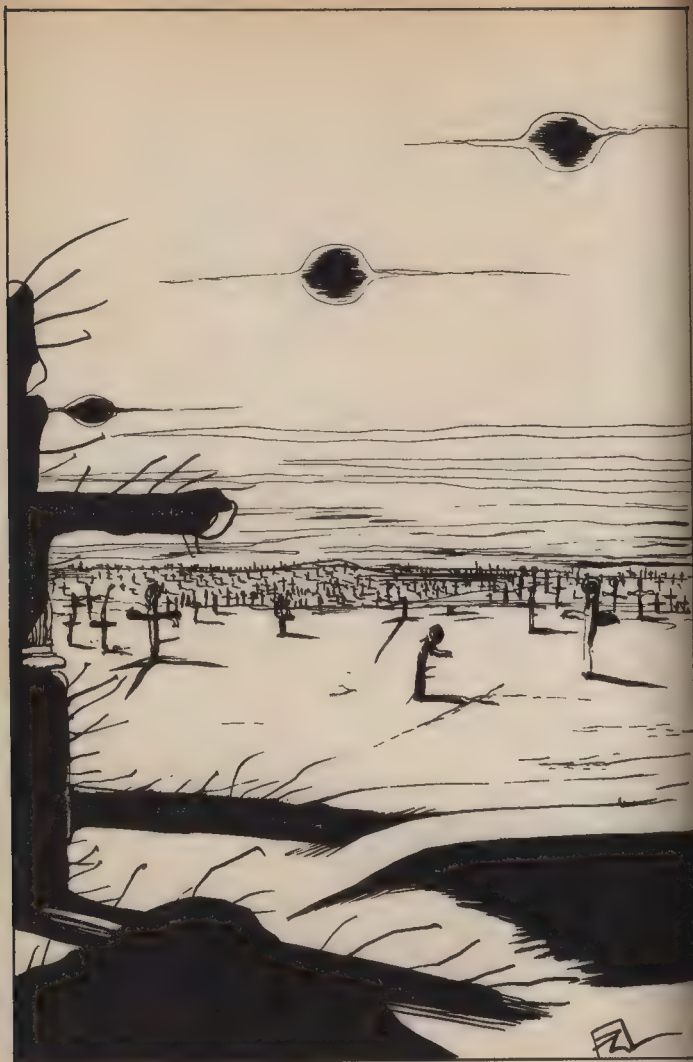
「けど、まるでおとぎ話みたい。危なくなるたびに新しい味方が出てきて、助けてくれるんですもん。でも、最初からまとめて出てくれれば早いのに……」
「時間をかせいでいた。それに……」
「えっ？」
ブンドルはレミーをチラリと横目で見て、やさしい口調で続けた。
「それに、おとぎ話の本質は残酷なものだ。ほとんどがね」
レミーも頷いた。
「う、うん。うかれちゃいられない」
「そう、あなたは、このまま街の外へ逃げるのだ。早いうちがいい」
「でも、みんなはどうするの？」
レミーが訊き返すと、ブンドルは微笑して答えた。
「それなりにやることが残っている」

その頃、街のはずれにあるがらくた置場で、二つの人影とカラスが一羽、蠢いていた。
カットナルとケルナグールだ。
がらくた置場には廃車にされた路面電車や、自動車、電化製品が無造作に積み重ねられていた。
カットナルが、路面電車のボディを叩きながらケルナグールに言った。
「あるところにはあるもんだな。こいつはまだ使えるぞ」
ケルナグールが、針のない置き時計をいじくりながら、

「これだって針さえつければ立派に動く。もったいないこっちゃ」
ケルナグールとカットナルは、ペンチとドライバーで、自動車の部品や電化製品をなにやらごそごそと分解しはじめた。
図体の大きなケルナグールは、小さな電化部品を意外な器用さで解体している。
カットナルの、バーナーで金属を切断する様子も手慣れていて、元アメリカ大統領兼大製薬会社の社長というより、水道工事のおじさんといった感じである。
ケルナグールが、ふと部品を分解する手を止めて、しみじみとカットナルに言った。
「しかし、わしら、どうしてこういう雑用ばかりなんじゃ……。他の奴らは、みんな、派手なのに」
カットナルがなぐさめた。
「なあに、戦いの時は地味でけっこう。平和な時には、わしらのような人間が派手になるんじゃけ……。ここは我慢じゃ」
「うむ、わしら、主役になれる顔でもないしなあ」
ケルナグールはしっかり納得して頷いた。
カットナルのカラスも一声鳴いて頷いた。
カットナルがカラスにぽつりと言った。
「お前、本当に一言多いんじゃよ。帰ったら、ケルナグールに頼んでフライドカラスじゃ」
カラスは羽根をうなだれてしょげた。

夜が白々とあけかかっている。
レミーをサイドカーに乗せたブンドルのオートバイは、街の出口に向かってひた走っていた。
街角に待機していたパトカーや警察のバイクが、一台また一台と数を増し、ブンドルのバイクにつかずはなれず追いかけている。
やがて前方の坂下に、大きな石の鳥居のような門が連らなる広場が見えてきた。
後ろの追跡車のスピードが上がった。
バックミラーに目をやったブンドルがレミーに言った。
「どうやら街の出口が近いようだ。あの追手をなんとかしなければなるまい。レミー、あなたはレーシングサイドカーの経験は？」
「もち、レースと名のつくものなら……」
レミーは頷いた。
「よし、パートナーを頼む」
レーシングサイドカーのレースは、オートレースの中でも、最も難しいものの一つだった。より早く走るためには、バイクのレーサーとサイドカーのパートナーの重心のバランスが問題になって来る。
特にコーナーですばやく曲がるためには、パートナーは路上すれすれに身を乗り出すようにしてバイクとサイドカーの重心をとらなければならない。
バイクのレーサーのテクニックもさることながら、パートナーのバランス感覚が一体にならなければ、すぐさま横転の危機が待っているのだ。

ブンドルのデータにレミーのレーシングサイドカーの腕前の情報は入っていなかったが、今はまかせるよりない。
ブンドルはオートバイのスピードをあげた。
鳥居のある広場に向かって降りていく急カーブの坂を、サイドカー付きのオートバイが飛ぶように駆けていく。
レミーは体を右に左に、時にはブンドルの体の上に身を届けるようにしてバランスを取った。
急カーブでスピードを出しすぎ、ハンドルを切りそこねた追手のパトカーやバイクが、次々に坂の土手に激突して横転した。
坂道で追跡車をふりきったブンドルのオートバイは、石の鳥居のある広場に飛び込んだ。
幾重にも連らなった鳥居をくぐり抜けた先に、巨大な門が見えてきた。
街の出口だ。
出口の向こうには荒れ果てた墓地が広がっていた。
だが、それより前に、巨大な門には装甲車と武器をかまえた警官隊がずらりと並んで守っていた。
「お出迎えがいっぱい」
「いくぞ！」
ブンドルはスピードを落とさず、出口の門へ突っ込んでいった。
警官のスピーカーが響いた。
「君達は出られない。この街からは、けっして出られない」
「家出は得意なの」

レミーは四十四口径をかまえた。
手が痛い。
かまわず撃つ。
一発、二発、三発、四発——。
警察の装甲車の上で、レミーの銃弾がはじける。
レミーは、引き金を引くたびににぶくなっていく指の感覚と同時に、警官達の様子に異様なものを感じた。
レミーの撃つ銃弾は、相手を倒すことは期待していない威嚇用のものだった。
無数にいる警官達のうち、六連発で仮に六人倒しても、何の意味もなかった。
だが、レミーが五発目を撃っても、六発目を撃っても、警官達は動こうとしない。
攻撃すらしてこないのだ。
ただじっと立ちつくして、サイドカー付きオートバイが目の前を駆け抜けるのをじっと見つめているのだ。
……どういうこと、これ?……
考える時間もなく、ブンドルとレミーを乗せたサイドカーは、巨大な門の中へ飛び込んだ。
すぐそこは、門の外のはずだった。
だが、そこには何もなかった。
ただ、まぶしい光を放つ霧だけがあった。
オートバイは走りに走り、再び前方に門が見えた。

サイドカー付きのオートバイは門の外へ飛び出した。
だが、そこは、いつの間にか、石の鳥居が連らなる元の広場だった。
「こんなことって……」
レミーはかぶりを振った。
ブンドルは黙って、もう一度、オートバイを巨大な門に突入させた。
結果は同じだった。
門の外は、やはり元の広場だった。
ブンドルはオートバイを停めた。
それを合図にしたかのように、警官達はやっと銃をブンドルとレミーに向けた。
装甲車の機銃が、サイドカー付きオートバイに狙いをつけた。
警官が、レミーとブンドルを見すえて言った。
「何度やっても同じことだ。君らはけっしてこの街からは出ていけない。出ていけるとしたら、運命の神の定めにしたがって、あの墓地に眠る時だ」
警官は、巨大な門の向こうに見える無数の墓石を指さした。
砂漠に昇る三つの太陽が、墓地を照らし始め、再び焼けつくような朝がやってきた。
鐘の音が鳴り、朝の祈りが始まった。
呆然と立ちすくむレミーとブンドルを残して、警官達は街の中央にそそり立つ神殿に向かってひれふした。
この街の門は、まさに出口のない門だった。

第4章 予言への挑戦

レミーとブンドルは、警官達にとり囲まれて、ホテルに戻ってきた。
ロビーのソファーには、服はぼろぼろだが、顔には傷一つない真吾とキリーが坐っていて、レミーが入って来るなり、ヒラヒラと手を振って苦笑した。
がらくた置場で朝方まで徹夜をして、何かを作っていたケルナグールとカットナルが、寝不足の赤い目をこすりながら駆け寄って来た。
「グググ、駄目だったんか……」
ケルナグールがこぶしを握りしめて、悔しがった。
「ブンドル、お前ってものがついていながら……どうなっとるの？」
カットナルが首をかしげて、ブンドルの顔をのぞき込んだ。
レミーはかぶりを振った。
「違う、違うの。誰も、この街から抜け出せそうにないわ」
ブンドルはそれには何も答えず、静かにレミーに言った。
「今日も暑くなりそうだ。昼間は寝た方がいい。明日のためにね」
キリーが明るく声をかけた。
「そうしな、レミー……。なあに、俺達がついているさ」
真吾が笑顔を作って頷いた。
「きのうは、ちょっとしたコテ調べだ。レミー、大丈夫さ」
レミーは、五人に微笑みかえした。
明日、どんなことが起ころうと、これ以上、仲間に心配をかけたくなかった。

……少なくとも、彼らの前では明るくふるまおう。たとえ、運命とやらが予告した死が本当に起こるとしても、その瞬間までは……、いつものレミーでいよう……
「ありがとう……。寝る子は育つ。私、ちょっと寝るわ……、おやすみ」
レミーは五人に、一人ずつ、順番におやすみのキスをした。
五人はキョトンとお互いの顔を見合った。レミーがこんなことをしたのは初めてだった。
……やはり口には出さないが、相当参っている……
五人は、ロビーの階段を昇って部屋に向かうレミーの後ろ姿を見上げた。
真吾が呟いた。
「この街から逃げられないのなら」
キリーが肩をすくめた。
「やるっきゃねえな」
「せっかくもらったファンレターだが……」
カットナルは生まれてこのかた、抗議文や陳情書や請求書は貰ったことはあっても、ラブレターやファンレターの類は受け取ったためしがなかった。
「欲しくもないファンレターは差し出し人につき返すよりあるまい」
学生時代、毎日のように送られてくるファンレターやラブレターの処分に困り果てた憶えのあるブンドルが苦笑した。
「返信用切手もいれていない奴が受けとるかな」
ケルナグールは、ボクシングのヘビー級チャンピオンだった当時、子供達からよくファンレター

を貰った。
だが、返信用切手のないファンレターには、一切返事を書かなかった。
返事といってもサインだけ、文章の苦手なケルナグールは、元々手紙の書き方を知らなかったのだ。
「切手代ぐらいですむなら、俺達が払ってやるさ」
そうは言ったものの、真吾は、今度の返信用切手が、けっして安い物ではないのを十分知らされていた。
五人は、ロビーの窓の外に見える神殿をじっと見つめた。
神殿は、二つの朝陽の中で燃えて見えた。

レミーは、窓を閉めきった部屋の中で、何度も寝返りをうっていた。
部屋の中は熱気がたちこめ、汗ばんだ顔で眠っているレミーは、今、夢の中で目に見えぬ何かに心臓を圧迫され苦しんでいた。

＊

特殊診療室の心脈計の動きが明らかに鈍くなった。
レミーの体の衰弱は、一層進んだようだった。
医師長が看護婦に、そっと耳打ちした。

「そろそろ用意しておいた方がいい」
看護婦が頷いた。
「いよいよですね」
「うむ、あのうるさいつきそいどもには内緒にな」
看護婦は、特殊診療室から出ていくと、待機室の五人を横目で見ながら、ナースセンターに向かった。
そして電話を取ると、中央病院専属の業者に連絡をした。
「ええ、こちら中央病院です。はい、今日、明日中には必ずお迎えが必要です。ええ、予約を入れといて下さい……。医師会長のお知りあいですし、ケルナグール・フライドチキンの社長もバックにおりますから……。特別一級でよろしいと思いますけれど……。はい」
看護婦が業者に電話して一時間後、中央病院の裏口に、まるで東南アジアかインドの祭りで見られるようなけばけばしい飾りをつけた車が横づけされた。
ちょうどそれを病院の男子用トイレの窓から、ケルナグールとカットナルが、連れだって用を足しながら見降ろしていた。
「なんじゃ？　あの車は？」
目を丸くするケルナグールに、カットナルが吐き捨てるように答えた。
「霊柩車(れいきゅうしゃ)じゃよ。それも最高級車じゃ。よっぽどの有名人がなくなったんじゃろ。レミーさんがこんな時に……。フン、縁起(えんぎ)でもない」
看護婦が手回しよく予約した業者は、葬儀屋で、その霊柩車はレミーのものだった。

＊

パリの墓地の穴の底で、七歳のレミーはちぢこまって坐っていた。
穴に落ちてから、どれぐらい経ったのだろう。
なにも見えない闇の中では、時間の流れさえ見当がつかない。
レミーは声にならないつぶやきを繰り返していた。
……誰もいない……、誰もこない……
「そう……。レミー、そうなの……」
どこからか、女の子の声が聞こえたような気がした。
それは、自分の内側からか、それとも穴の別のどこかなのか、それすらレミーには分からなかった。
声はレミーに話し続けた。
「ここには誰もこない、誰もいない」
……とっても静か……。そか、ここにはママも埋められているんだわ……
レミーの思いに声が応えた。
「そう、そうして、わたしもママと一緒になる」
……そか、わたしも死ぬのね……
レミーは声に訊いた。
「そう、生まれた時から決められていたのよ」

声にレミーは頷いた。
……そか、これで終わりなんだ……
「ええ、この闇から逃げだそうとしても駄目……、最初から決められていたんですもの」
声は、レミーにきっぱりと、そう言った。
レミーは、ただ頷くだけだった。

＊

祈りの声が耳の奥で響く。
レミーはベッドの上で目をしばたたかせた。
ずいぶん長い間、眠っていた気がする。
レミーはシーツを体にまくと、ホテルの窓を開けた。
砂漠の空が真紅に燃えている。
三つの太陽は、今、日没を迎えていた。
そそりたつ神殿も血の色だ。
レミーの横顔も赤く染まって見える。
街の全てが血の洗礼を浴びているようだ。
「明日か……」
日没の祈りの声は、気のせいか、今日はやけに長く感じる。

……運命の神か……

レミーは思う。

砂漠のように、過酷な自然環境の下で生きなければならない人々の間では、この街のように神を崇拝しがちなのをレミーは知っていた。

全ては運命の神によって支配されているというのだ。

無理もないと思う。

食物も水も手に入りにくい砂の世界だ。

地球の砂漠地帯では、あまりに空気が乾燥しきって、人と人とが握手をすると静電気で火花が散るという土地もあるという。

昼の猛暑と、極端に冷え込む夜の温度差……。どんなに閉めきっても忍び込んで来る砂。砂に人は追いたてられ、水を求めてさまよう。そして砂漠は、水を涸らし、緑を食いつぶし、どんどん広がっていく。

こんな土地では、自分の運命は最初から神によって決められているという、いわばあきらめの境地でいなければ、確かに、とても生きていけないのかもしれない。

そして、神の巨大な力のなすがままになることで、生まれ変わった次の世には神の力で今の世よりは幸福な生をうけたい……。

もしかしたら、レミーのいた地球も、砂漠と同じなのかもしれない。

砂漠の神という名ではないにしろ、地球人は、のしかかってくるさまざまな力のために自由な生き方ができないことも確かなのだから……。

だが、気ままに生きようとするレミー達は、だからこそ地球から落ちこぼれた人間だ。
だからこそレミー達にとって、この見知らぬ砂漠の街も、落ちこぼれた地球と同じように向くはずのない世界なのだ。
しかし、今、レミー達はこの街から抜けだすことができない。
レミーには、〝郷に入れば郷にしたがえ〟などという使い古されたことわざはなかった。
レミーには、その言葉は、世の中をうまくわたる処世術ではなく、自分の生き方をあきらめろと言われているような気がする。
レミーは、関わりのない者には、何もしたくなかったし、何もされたくなかった。
そんな自分の生き方を妨げるものがあれば、それはどんなに巨大な力で、神と呼ばれようと、敵だった。
ましてレミーは、あの神殿の神から死ねと言われているのだ。
……やはり、私はあの神殿と戦わなければならない……
レミーは、二つの夕陽の沈む中、刻々と色を変えていく神殿を見すえた。
やがて祈りの声が消え、陽が沈み、空の血の色が消えても、レミーは夜空に浮かび上がる神殿と対峙(たいじ)していた。
……そう、やるしかないんだ……。わたしの持てる武器で……
レミーは右手をみつめた。
手の平が小刻みにふるえている。
にぶいしびれが続いている。

昨日、四十四口径の銃を撃ちすぎて、その激しい反動が指の筋や骨を、腕を、肩を、すっかり痛めつけていたのだ。
指を動かしてみる。
ほとんど動かない。
まるで自分の手ではないようだ。
さっきまでとは裏腹の弱気が、一瞬、走った。
「駄目かもしれない……」

レミーはバスルームに入り、注意深くバスタブのコックをひねった。
断水も、血の洗礼もなかった。
ごく普通のお湯が出て、すぐにバスタブを一杯に満たした。
レミーはバスタブに身を横たえて体をあたためた。
……今日、せめて、お湯が出てよかった……
昨日から体にオリのように残っていた疲れが、みるみる抜けていくのが心地よかった。
レミーは、お湯の中で右手の指をそっとほぐしてみた。
だが――、結果は同じだった。
……まるで動かない。もう銃を撃てないかもしれない……
レミーはバスルームから出ると、鏡台の上に置いた四十四口径を見つめた。

右手に持ってみる。
銃身がぶるぶるふるえ、重い鈍痛が手首や腕に走った。
……せめて、引き金やシリンダーだけでも軽く動くようにしなくちゃ……
レミーは、銃のシリンダーと引き金の部分をドライバーでゆるめた。
こうした改造は、暴発やミスシュートの元で、普通はやってはならないのだが、この際、仕方なかった。
レミーはシリンダーを回してみた。
カラカラとかわいた音でシリンダーが回る。
シリンダーの止めが、ほとんど馬鹿になっている。
レミーは引き金を引いてみる。
ガチャン。
撃鉄が、にぶい音をして落ちる。
「ウッ!」
激痛が襲う。
レミーの手から銃が床に落ちた。
軽くしたはずの引き金で、しかも弾も入っていないのに、レミーの手は耐えられなかった。
レミーは洗面器にお湯を入れ、手を温め、動かす訓練をはじめた。
何度も何度もお湯を入れかえ、夕食をとるのすら忘れて、手を動かし続けた。

そして、やっと自分の意志で、少しだけ指が動くようになったのは真夜中を過ぎた頃だった。
……でも、まだこれだけじゃ駄目……。いつ、また、動かなくなるか分からない……
その時だった。
レミーは背後に人の気配を感じた。
「いよいよ明日ね……」
あけはなたれた窓の傍らに、女の子と獣が現れた。
女の子は冷たい微笑を絶やさず続けた。
「あなたは死ぬわ……」
レミーは振り返りもせず、洗面器の中の手を動かし続けた。
いまさら、女の子のおどしにつきあう暇などなかった。
動かない手を、指を、元に戻すのに夢中だった。
女の子は、そんなレミーに少しいらだったように、
「わたしを無視するの？」
レミーはフッと苦笑し、やはり洗面器の手から目をはなさずに言った。
「いいえ、無視したくてもさせてくれないでしょ。でも、今夜は、もう子供は寝る時間よ。あなたは、大事なペットとおうちにお帰りなさい」
女の子は顔をゆがめた。
「きっと、ひどい目にあうわ」
レミーはさりげなく答えた。

「おやすみ、おじょうさん」
そして、しばらく沈黙の時間があった。
レミーは後ろをふり向いた。
女の子と獣の姿はなかった。
レミーは窓辺にいき、夜の街を見つめた。
屋根の上を、神殿に向かって走り去る獣と女の子の姿が小さく見えた。
レミーは苦笑してから、窓をいさぎよく閉めた。
それからレミーは、ベルトの弾入れから弾丸を出し、テーブルの上に立てて並べた。
弾入れの中には七発残っていた。
……七発か、六連発の銃だけれど、六発はとても撃てそうもない……。でも……
レミーは一発ずつ、ていねいに銃のシリンダーに弾丸をこめた。
テーブルの上に弾丸が一発だけ残った。
……残り弾が一個……
レミーはなに気なく胸のロケットに手をやった。
レミーが一人でいる時のいつもの仕草だった。
……何も入っていないロケット……
レミーはロケットをはずして、じっと見つめた。
……最後まで何も入らず終わりかもね……
レミーはロケットを鎖(くさり)からはずした。

そして、残り弾を鎖に結びつけた。
レミーは鎖につけた残り弾をゆらしながら、微笑してつぶやいた。
「残すともったいないもんね」

その頃、真吾は自分の部屋で腕組みしながら考えていた。
床いっぱいに、ショットガン、マシンガン、レーザー銃、ハンディバズーカ砲などの小型兵器が転がっている。
真吾がいつも持ち歩いている兵器のありったけだが、まさか、全部を持っていっても邪魔になるだけだった。
……明日、どれを使うか……。相手は運命の神とかいう、わけの分からんものだけに……。うん。……
真吾は頷いて、武器を決めた。
一番使い慣れた奴でいこう。
「結局、これか……」
ガシャン！
真吾はショットガンを取り、ポンプアクションを動かし、機能をチェックした。
キリーの部屋からは、タイプを打つ音が絶え間なく続いていた。
……俺には結局なにもなかった。どう考えても何もなかった。キリー・ギャグレー自伝第一巻

……、改訂十版……、じ・えんど……

キリーは地球にいた頃から、自伝を書くのが趣味だった。

地球を離れてから、キリー自身、ずいぶんさまざまな体験をしたはずなのに、完璧(かんぺき)主義のキリーは、第一巻の改訂に改訂を重ね、地球にいた頃までの自伝からいまだに先が書けなかった。

キリーは腕組みして、タイプ用紙の〝THE　END〟の文字を見つめた。

会心の作とは思えなかった。

「ウ～ン」

キリーは髪の毛をかきむしると、タイプ用紙をにぎりつぶした。

「ちえっ、第一巻から進みやしねえや」

キリーはテーブルの上のナイフを、いきなりドアにとりつけたダーツの的に投げた。

命中。

キリーのナイフの腕だけは、いつも会心のできだった。

ブンドルは自室のベッドの上に正座して日本刀の手入れをしていた。

……この無銘のわざもの……。一体、何人の血を吸ったことか……。だが、明日の敵、運命の神とやらを、この刀は斬り裂けるであろうか……。だが、考えてみたからといって、どうなるものでもない……

ブンドルは微笑し、誰に語るでもなくつぶやいた。

「今はもう何もいうまい。この刀の輝きは、とぎすまされている限り、変わらず美しい。人もまた

しかり……。美しい限り、運命を人は斬り開く」

ブンドルは窓の外にそびえる神殿に向かって、鋭い気合いで斬りつけてみせた。

カットナルとケルナグールは、街のはずれのがらくた置場でガスバーナーを使って溶接作業を続けていた。

やがて目的のものができ上がり、作業が一段落したのか、二人はバーナーを消して廃車にされた路面電車のへりに腰をかけた。

「なかなかに上手くできたな」

カットナルが満足気にケルナグールの肩を叩いた。

「うむ、わしな、こう見えても、ガキの時分にゃ手先が器用でな。プラモデルを万引きしちゃ、よく作ったもんよ」

ケルナグールが鼻をひくつかせて自慢した。

カットナルが遠くを見つめながら頷いた。

「わしもな、高貴な生まれだったもんで、友達が少なくてな、超合金モデルをよく作ったもんじゃ。もちろん、アメックスのゴールドカードで買ってな……。ドゥ・ユー・ノー・ミー？　なんちゃって……」

「ググググ……」

ケルナグールがうめいた。

貧しかった若き日のケルナグールは、クレジットカードなど、欲しくても誰も発行してくれなかか

った。
カットナルはケルナグールの気持ちなど意に介さず、目を細めて呟いた。
「なつかしいのう、子供の頃が……」
「なつかしいが……、お互い趣味が……」
一人で部屋にとじこもって作るプラモデルに超合金モデル……。
カットナルは頷いた。
「うむ、暗いのう……」
二人は思わず溜め息をついた。
カットナルのカラスもコクリと頷いて、一声鳴こうとしたが……。
「鳴くな！」
二人に石を投げられ、カラスはあわててくちばしを羽でふさいだ。

第5章 運命の神殿

名も知らぬ砂漠の街に、朝がやってきた。
レミーにとって、言うまでもなく運命の日だ。
相変わらずの燃えたぎった三つの太陽の光が、街を照らしだし始める。
鐘の音が鳴り、朝の祈りの響きが街中を圧し、それはレミーの死を待ち望んでいるかのようだった。

朝を待つうちに、いつの間にかうたた寝していたレミーは、祈りの声に目を醒ました。すぐに、右手を動かしてみた。
しびれはあるが、昨日よりは、ましのようだ。
バスルームへ行き、頭からシャワーをかぶる。
鏡台の前で髪を整える。
「やっか……」
レミーは鏡の中の自分にウインクをする。戦闘服を身につける。
ベルトのホルスターに、四十四口径をぶちこむ。
部屋の中を見回す。
運命の神に勝つにしろ負けるにしろ、もうこの部屋には帰ってこないだろう。
勝てば、そのまま街の外に脱出するつもりだ。
残していく衣服や道具は、夜のうちにまとめてリュックサックに入れ、部屋の隅に置いてある。
「バーイ、わたしの暑い部屋……」

レミーは部屋のドアを開け廊下に出る。
廊下の壁に、戦闘服のキリーがもたれかかってニヤリと笑ってウインクした。
レミーは肩をすくめて微笑みかえす。
二人は黙って並んで、廊下を歩き始めた。

ホテルのロビーのカウンターでは、真吾が頬杖して、一人で黙ってミルクを飲んでいる。
カウンターの鏡に、階段から降りてくるレミーとキリーの姿が写った。
真吾は、ミルクを一気に飲み、グラスをカウンターに置く。
立てかけてあったショットガンを持つと、銃身を少しだけかたむけて二人に合図する。
コインを一枚出し、指ではじいてカウンターの上に放る。
「つりはいらんよ」
三人は並んでロビーを出ていく。
ホテルの入口のわきに備えつけられたテーブルで、ワインを飲んでいたブンドルが、ホテルから出てきた三人を見て、さっと髪を手で払って、日本刀を持ち、おもむろに立ち上がった。
四人は、それぞれの顔を一瞬見合ってから、何も話さず、並んで歩き始めた。
祈りの声は、四人を威嚇するようにさらに大きくなった。
しかし、四人は眉一つ動かさず歩いていく。
街路には、朝の礼拝にひれふす人の群れが無数にいるが、誰も四人には注意を示さず、礼拝にのめり込んでいる。

四人もそんな街の人々を見向きもせず、まっすぐ神殿を見つめながら歩き続けた。
大通りからは、真正面に神殿が見える。
四人は、ホテルの前の街路から、大通りにやって来た。
歩道には、礼拝する人達の、いも虫のようにひれふす姿があふれている。
四人は歩道から車道に出て、今は誰もいない路面電車の軌道を横一線に並んで歩いていった。
その時、ガタン、ゴトンと背後で軌道をゆらす音がした。
四人を追うように、路面電車がゆっくりと大通りをやって来て、止まった。
カンコン——電車の鐘が鳴った。
「うお〜い、乗っていかんか？」
四人は振り返った。
電車の運転席からカットナルが首を出して叫んでいる。
後ろの車掌席から身をのりだしたケルナグールが手を振る。
「わしらが作った電車の試運転じゃ。敵の神殿まで、今回、無料じゃぞい」
カットナルとケルナグールが、がらくた置場で作っていたのは、この廃車にされた路面電車だったのだ。
……あの二人、やればやるもんだな……
四人は、ふっと笑いあって路面電車に乗り込んだ。
「出発進行……！」

ケルナグールが電車の鐘を、今も続いている祈りの声に負けぬほど、強く叩いた。
電車のパンタグラフから火花が散り、電車が動き始めた。
「全速前進！」
カットナルが本職の運転手さながらに、前方を指さして、コントロールバーを、ひねった。
もちろん、動物を乗せてはいけないなどという規則はこの電車にはない。
カットナルのカラスもしっかり肩に止まっていた。
最初は重かった電車の動きも、車輪の回転とともに、次第にスピードを上げていった。

＊

「あの霊柩車はレミーさん用だと？」
カットナルは医師長にかみついた。
中央病院の裏口についた派手な霊柩車が、レミーのために用意されたことを、今、医師長から聞かされたのだ。
「すぐにお知らせしようとしたのですが、あなた方のお気持ちを考えて、ギリギリまでふせておいたのです」
本来、病院の方針としては、死んだも同然なレミーのような患者は、とっくに霊柩車に放り込んで運んでしまうはずなのだ。
だが、ケルナグールやカットナルが医療費を払うとなれば話は別だ。

ギリギリまで特殊診療室を使わせれば、それだけ医療費を高くとれると医師長は計算した。

そもそも、系列の違う大学病院の教授を呼ぶなど、たとえ医師会長の命令だとしても、中央病院の医師長としては我慢できるものではなかった。

〝ならば、こいつらから、取れるだけしぼり取ってやれ〟

だが、最初はそう考えていた医師長も次第に不安になってきていた。

いざ、患者の息が絶えた時に、別の葬儀屋にでも頼まれたら元も子もない。

なにしろ、この患者はギャラクシー栄誉賞を断った変わり者だ。

葬儀をせずに、遺体を宇宙に放り出してくれ——などと言いだされたらことだ。

この病院と葬儀屋とは、リベートでしっかりつながっている。

この巨大都市シティ(メガロポリス)においてでも、特別一級の葬儀などめったにないのだ。

キャンセルされてたまるか……。ならば、レミーの息のある今のうちに話して釘(くぎ)をさしておこう。

こう考えて医師長は、霊柩車のことを告げたのだ。

「残念ながら、その時が来たようです」

「なんちゅうことをしてくれるんじゃ」

ケルナグールが医師長のエリ首をつかんだ。

が、今度は医師長も負けてはいなかった。

「お言葉ですが、当病院は生きている人間のためにあるのです。現在、この街には、毎日、二十万人以上の病人、けが人が生まれています。一時(いっとき)でも、無駄なベッドはあけておけないのです。当病院は、死者には用がありません。そして生死の判断は、担当のこの私がします。それが、この街の

きまりです。そうですね、医師会長殿？」
医師長は不遜な口調でカットナルの顔をのぞき込んだ。
カットナルは何も答えられなかった。
「絶望なのか？」
真吾が今まで何度も繰り返した言葉で訊いた。
「死神がすぐそこにいるように？」
キリーが続けて重ねると、医師長は冷たい数字をだした。
「よくて三十分です」
ブンドルが呟いた。
「だが、少なくとも、今は息がある」
「ええ、もはや面会謝絶も無意味です。お知り合いの方はどうぞ」
医師長は特殊診療室のドアを開けた。
面会謝絶のランプが消え、それは医学が完全に敗北したことを意味していた。
レミーの心脈計の動きは、さらに弱まっていった。

＊

パリの墓地の穴の中に、レミーは横たわっていた。
レミーは自分の体をきつく抱きしめた。

……体がつめたい……、とっても寒いわ……

どこからともなく聞こえる女の子の声が、レミーに誘いかけてくる。

「そう、あなたの眠りはそこまで来ている」

……なんだか嫌だな……。このまま、わたし、いなくなっちゃうなんて……

「どうしようもないのよ。あきらめなさい。あなたは、そんなふうにしか生きられなかったんだから」

レミーは、そうかもしれない、と思った。

誰だか知らないが、今、聞こえる声の言う通りなんだ。

レミーは声を出して頷いた。

「うん、そうだね」

やがて女の子の声が遠ざかっていく。

「アデュー、さよなら、レミー」

アデューは、二度と会えない意味のフランス語のさようならだ。

レミーも答えた。

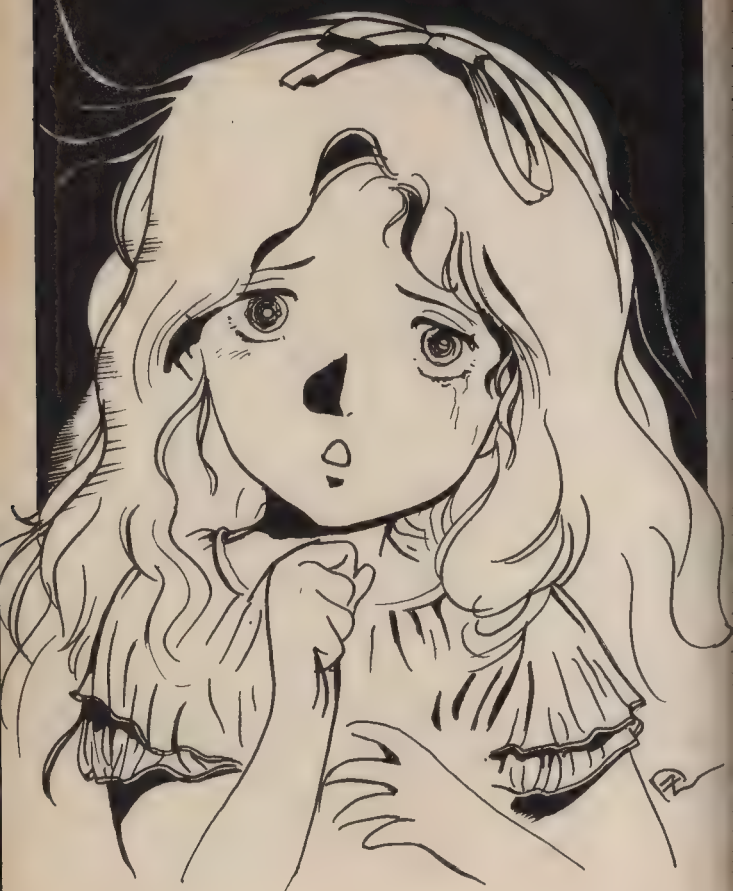
「アデュー、誰かさん」

レミーは目を閉じた。

寒気が、足からぐんぐん胸の方へ上がってくるのが分かった。

その時だった。

レミーは突然、別の誰かの声を聞いた。

「アデューでもないよな、誰かさんよ」

男の子の声だった。
ずいぶん柄の悪い口の男の子だったが。
……柄の悪さはわたしも。人のことはいえないかもね……
と思って、そのことは黙っていることにした。
「ああ、アデューじゃないな」
もう一人の男の子の声がした。
なんだか決めつけるような理屈っぽい声だ。
「えっ、誰？」
レミーは暗闇の中へ訊いた。
別の男の子の声がした。
「誰って、まだ会ったこともないし、これから先、会うかどうかも分からないけど……」
やさしい口調で詩を読んでいるような声だ。
「ともかく仲間さ」
じれったそうに早口の男の子の声がした。
「仲間って、わたしに友達なんかいないわ」
レミーは肩をすくめて言った。
「友達じゃないさ。みんなひとりぼっち、だから仲間さ」
図太い声が、上の方から聞こえた。多分、体の大きな男の子なのだろう。
どうやら男の子達は五人いるようだった。

レミーは五人に訊いた。
「みんな一人なの？」
男の子の一人が答えた。
「俺には何もなかった。生まれた時から親も兄弟も、灯のついた家も何もなかった。脱走しては連れ戻されるブロンクスの養護院が俺んちさ」
もう一人の男の子が口を開いた。
「俺の両親も小さな時に死んだんだ。今、俺、兵隊の学校でスパイの勉強してんだ。身寄りがないからスパイになるには都合いいんだって……。だから友達なんてどこにもいない」
やさしい口調の男の子が続いた。
「僕は、自分のことをあまり人に言いたくないんだ。言っても仕方のないことだからね。でも、一人なことは確かだよ。みんな住む場所は違っても、みんな一人なんだ」
男の子はヨーロッパの貴族の名門の生まれだった。
病弱な母は、男の子を産んですぐに死んだ。
父の後妻に来た女は、すぐに子供を生み、その子を家の後継者にしようとした。
男の子は、幼い頃から家の後継者争いの邪魔者とされ、孤独な日々を送り続けていた。
別の早口の男の子がレミーに言った。
「みんな一人でも、いつか出会えるかも知れないと思ってさ」
その男の子は、アメリカ大統領の父を爆弾テロで殺され、しかもそのテロにまきこまれて自分の片目も失った。そして、愛する母も、アラブの大富豪のもとへ、男の子を捨てて再婚してしまった。

専属の弁護士から養育費だけはたっぷり貰っていたが、母のいない日々は男の子の性格を暗くし、友達のいないひとりぼっちの日々を送っていた。
もう一人の体の大きな男の子は、アフリカの内乱で生まれた戦災孤児だった。
福祉家を気取るアメリカのハリウッドの俳優に、他の孤児三十人とまとめて拾われてアメリカに来た。
だが、あまりに体が大きく、力が強く、粗暴だった男の子は、孤児仲間からも恐れられ、福祉家からも嫌われた。
居所のなくなった男の子は、家出同然に福祉家の元を飛び出し、貧民街をさまよった。そして、街のチンピラの用心棒になった。
男の子の大きさは、大人すら恐れたのだ。
男の子は、粗暴な腕力にまかせて生きるしかなかった。
やがて男の子は、街に張ってあって、破れかけたボクシングのポスターを見て、腕力だけでまともに食べていける仕事のあるのを知った。
男の子はボクサーになる日を夢みた。
だが、今はまだ、周囲の者はこの異様に大きく力の強い男の子を、怪物を見る目でしか見ていなかった。
男の子は、レミーの頭上から図太い声で話かけた。
「みんな、会ったことも、これから会えるかも分かんないけどな。もし会った時にさ……、ごついからって、こわがんなよな」

「ほんとにわたしにも会えるかしら……」
レミーは五人の男の子に訊いた。
「分っかんない。でも今は会ってる」
男の子の一人が答えた。
「うん、誰かさん達、しばらく遊んでくれる？」
レミーはそう言って立ち上がった。
「そのためにいるんだぜ、俺達。なあ」
他の男の子達も頷いた。

＊

路面電車のスピードがぐんぐん上がっていく。
見知らぬ街に響いていた祈り声がぴたりと止み、朝の礼拝が終わった。
街の人々は次々に立ち上がった。
と同時に、人々は大通りを走る路面電車を見つめた。
その群衆の眼に次第に憎悪が燃え上がって来る。
一人が、電車を追って走りだした。
それを合図に、街の全てが電車への敵意をむきだしにして動きだした。
次から次に、群衆は電車を追って走る。

「おいでなすった」
真吾はショットガンに手をやった。
「よくよく駆けっこの好きな奴らだぜ」
キリーが口笛を吹きながら、肩をすくめた。
電車の後ろの扉に何人かの群衆がすがりつく。
ケルナグールが、ハエを落とすように殴り倒していく。
だが、殺到する群衆は無数といっていい。
「強力殺虫剤が必要ぞい」
「まとめてやっちくれ。座席の下に武器がある」
カットナルが運転席で叫んだ。
真吾が座席をはぐと、小型爆弾とバズーカ砲、マシンガンの山があった。
おまけに火炎放射器まである。
「よくもまあ、こんなにたくさん……」
目を丸くするレミーに、ブンドルがこともなげに言った。
「得意だと言ったろう、借用証なしで借りるのは……。特に警察からはね」
ケルナグールが、火炎放射器を持って胸を張った。
「わしらが作ったものもある。これなんざ、プラモデルとはちとわけが違うぞい」
ケルナグールは、ニヤリと笑って後ろから迫る群衆に火炎放射器の炎を浴びせかけた。
横から来る群衆には、真吾の投げる小型爆弾が炸裂する。

キリーとブンドルは、マシンガンのめくら撃ちだ。
どこを撃っても群衆に当たるほど、追手の数は多い。
レミーも痛めた右手をかばって、左手の片手撃ちでマシンガンを連射する。
火炎放射器の炎が建物に燃え移り、乾燥しきった街の大通りは、たちまち炎に包まれた。
だが、街の群衆は誰一人、火を消す者がいない。
ただひたすら、電車の中の六人を追って走る。
倒れても倒れても襲いかかって来る。
彼らはまるで、死んでいることを忘れた死体の群れだ。
電車は群衆をけちらしながら、すさまじいスピードで大通りを突っ切っていく。
正面に神殿の門が見える。
もうすぐだ。
門を守る警官達の攻撃が始まった。
「伏せろ！」
電車の床に身を投げだす六人の頭上で、窓ガラスが粉々になってはじけ飛ぶ。
装甲車の砲弾で、車体の後部が吹っ飛んだ。
六人は床を這って、運転席に集まった。
「このまま突っ込むぞ！」
カットナルが叫んだ。
「なぐりこむ奴は上にいけ！」

ケルナグールは、床のレバーをひねった。
電車の前部に鉄の防護シャッターが降りた。
「いまじゃ、いけ」
「分かった！」
キリー、ブンドル、真吾、そしてレミーは頷きあうと、電車の天井を開け、屋根の上に出た。
屋根の上にあるパラシュートの包みのようなものを、それぞれ、素早く背負った。
真吾とキリーが、屋根の上のパンタグラフを降ろす。
電車は、神殿の門の前の坂道の軌道をころがるように降りていく。
「いったれ！」
カットナルが、床のレバーを叩きつけるように倒す。
電車の車輪がレールからはずれた。
車両は神殿の門を守る警官達をけちらし、門に向かって、まっしぐらに暴走していく。
電車の屋根から、レミーが、キリーが、真吾が、ブンドルが、次々に空高く飛び上がっていく。
電車のパンタグラフをカタパルト代わりにしているのだ。
十二歳のとき、子供向けの超合金ロボットモデルのバネ仕掛けのロケット発射装置を改造し、飛距離を三百メートルにも強化して近所の窓ガラスを割って回り、警察から大目玉を食らった覚えのあるカットナルにとって、パンタグラフのバネをカタパルト用に改造することなど朝飯前のコーンフレークだった。
空中に飛び出した四人の背中の包みの中から、ハンググライダーの羽根のようなものが、はじか

れたように飛び出す。
四人は神殿に向かって、風を読みながら飛んでいく。
一方、暴走する電車は神殿の門に激突、門を突き破って中へ突っ込んで止まった。
電車の屋根は吹き飛び、車輪ははずれ、すでに電車の姿をしていない床から、よろよろと立ち上がったカットナルとケルナグールは、四人のゆくえをさがして上空を見上げた。
空中の真吾が神殿の窓に向かって、小型爆弾を投げつけたところだった。
轟音とともに窓にぽっかりと穴が開いた。
四人は真吾を先頭に窓から神殿の中に消えていく。
ケルナグールが、ほこりで黒くなった顔を汚れたそででこすり、さらにまっ黒にして高笑いした。
「やったようじゃね」
カットナルのカラスがカットナルの代わりに「カア」と答えた。
カットナルがカラスをにらんだ。
「お前、いつもカアだけしかないんか。お前も飛べるんなら手伝いにいけ。さもなくば……」
ケルナグールがニヤリと笑って舌なめずりした。
カラスは、あわを食ってカットナルの肩から飛び立つと、四人の後を追って神殿の窓に姿を消した。
その時、二人の背後で祈りの声が聞こえだした。
振り返ると、破壊された神殿の門の外から、街の群衆が手に手に棍棒やなたを持って入って来た。
ケルナグールとカットナルはニヤリと笑いあった。

「カットナル、カットナルときじゃ」
「ケルナグール、おまえもな」
二人とも、名前以上に暴れるつもりだった。

四人は神殿の中の長い二重の螺旋(らせん)状の道を駆け降りていた。
それは、どこまでもどこまでも果てしなく続いているように思えた。
レミーはいつの間にか、時の感覚のなくなっている自分に気がついた。
……この神殿の窓から飛び込んだのは、いつだったっけ……。ほんの数秒前だった気もするし、もう何時間も前だったような気もする……
レミーは腕時計を見た。
時計は止まっていた。デジタル表示は0を表し、秒を示す点滅は動いていなかった。
真吾達もどうやら、その奇妙な時の動きを感じているようだった。
と、いきなり、足元の道が消えた。
気づくと、そこは大広間だった。
砂漠の神殿には似つかわしくない、ヨーロッパのルネッサンス様式風の大広間で、レミーはすぐにパリのルーブル美術館を思い出していた。
ルーブル美術館を思い出すだけでなく、ルーブル美術館そのもののような気すらする。
……子供の頃、遊び場所のない私は、よくルーブルへ行ったっけ……。だって、あの頃、入場が無料だったルーブルは、ひとりぼっちの私が時間をつぶすにはもってこいの所だった……。私は、

いつも、絵や彫刻を見ながら、その価値なんか分からずに、ぶらぶら閉館時間まで広い美術館の中をさまよってた……

大人になったレミーが美術鑑賞眼を身につけているのは、子供の頃にルーブルで美術品の本物を見続けていたからかもしれなかった。

だが、神殿の大広間に飾られた絵画や彫刻を一目見て、レミーはこの大広間がルーブル美術館となんら関わりないのが分かった。

絵画と彫刻は、全てが抽象的なもの(アブストラクト)だった。しかも、抽象芸術だとしても、この点や線や色の組み合わせで描かれた絵画や奇怪(グロテスク)ともいえる造形の彫刻群は出来のよいものとは思えなかった。

むしろ、レミーの美意識をいらだたせる不快な感じがした。

だが、そのうち、レミーは作品の中のいくつかに見覚えがあるような気がしてきた。

だが、どこで見たのかはどうしても思い出せなかった。

真吾もキリーも、この大広間をどこかで見たような気持ちに襲われていた。

だが二人の見ている広間は、同じ広間に立っていながら、レミーの見ている広間とは違っていた。

そこには絵画や彫刻などなく、中央に大きなムービングモニュメントが置かれてあった。

モニュメントは、全体がゆっくりと動き続け、どうやらそれは何かの流れを表現しているもののようだった。

二人の見る広間は、近代的なフロアで、美術館というより図書館か博物館を思わせた。

しかし二人は、それをどこで見たのか、レミーと同じように思い出せなかった。

……だが、ここでぐずぐずしている時間はない……
レミーと真吾、キリー、そしてブンドルは、すばやく周囲をうかがいながら前進した。
やがて広間のはずれに大きな扉があった。
レミーと三人は顔を見合わせた。
黙ってはいるが、思いは同じだ。
……ここまで来たら、やることは一つ……
真吾は小型爆弾を、テニスボールをもてあそぶように手の平の上ではずませた。
そして、いきなり扉に投げる。
爆発。
扉が音をたてて倒れる。
四人は扉の中に駆け込む。
「ここまで来るとはな」
老婆の声が響いた。
四人の前に、ホテルにいた老婆が獣をしたがえて立っていた。
どこからか、砂の音、水の音、時計の音、電磁音がまざりあって聞こえてくる。全てが時の流れる音だ。
祈りの声がさらにかぶさって聞こえて来た。
「しかし、お前達が何をやっても無駄じゃ。この街と、運命からは逃げられぬ」
「そうかな？」

ブンドルが老婆を見すえた。
「逃げられぬなら、この街を消すだけだ。そして我々は生き残る……」
ブンドルは通信機を取り出し、カットナルを呼んだ。

カットナルとケルナグールは、群衆にじりじりと追いつめられながらも、マシンガンを連射してふんばっていた。
レミー達が感じたほど、四人が窓から進入してから時はたっていなかった。
カットナルは通信機でブンドルに答えた。
「おいよ、ブンドル。あんばい、どうかね」
ブンドルの声が通信機から聞こえる。
「時は来た。やってくれ」
「よっしゃ。ケルナグール、いくぞ！」
「おう」
二人は、発煙筒を群衆の真ん中に投げ込んだ。群衆が煙にまかれて右往左往するすきに、二人は神殿の壁をよじのぼり、二階のテラスに来た。
「いよいよ本当の見せ場じゃ」
カットナルは爆弾の起爆装置を取り出した。
「若い奴らがレミーさんと派手にやっていたこの二日間、街中駆け回って本当にやっとったのは……、電車を作っとっただけじゃない」

ケルナグールが胸を張った。
「そういうこと。お見せしましょうぞ、真打ちを」
カットナルは起爆装置のスイッチを押した。
屋根のとれた電車の台車が大爆発を起こした。
炎が飛び、路面電車のレールの上を走る。
火花が架線の上で飛び散り、次々に街並みが爆発を起こしていく。
ホテルは吹き飛び、大通りが陥没し、街中が火の海だ。
カットナルとケルナグールは街中に爆弾を仕掛けていたのだ。
……うまくいった……
二人は手を叩いて喜んだ。
「たまや〜!」
「かぎや〜!」
二人は、東京の両国の花火大会のような掛け声をあげた。
確かに花火のように美しくも見えた。
飛び火した炎が神殿内部にも広がり、大広間の絵画や彫刻に燃え移った。
老婆は低く笑った。
「この街を消しても何も変わらぬ。この街は、運命への恐怖というおどしにすぎぬのでな。さあ、見るが良い、燃えていくこの広間の絵を、彫刻を……。見覚えがないかな……」
レミーは大広間を振り向いた。

抽象的な模様のような絵画が次々に焼けただれていく。
突然、絵の中に写真のような実景が浮かび出た。
それは、パリの墓地だった。
雨の中を母の葬列が進んでいく。
さらに、パリの街を追われ、逃げる、七歳のレミーの見た暗い路地――。
墓場のしげみ――。
穴に吸い込まれて落ちていくレミーの視界――。明かりがぐんぐん遠ざかっていく。
広間の奇怪な彫刻が炎の中で溶けていく。
彫刻の中からレミーと男達の抱擁が実像となって現れては、燃え、焦げ、ただれていく。
それは、ペンダントの中とレミーの中を駆け抜けていった男達だ。
そればかりか、レミーが望みもしないのに、荒々しく踏み込んできた男達もいる。
レミーは、現れては消えていく自分の姿に、獣に食いちぎられていく自分を見ていた。
全てが苦渋に満ちたレミーの歴史だった。
さらに絵画からは、老いていくレミーの姿が現れては消えた。
世捨て人のように生きる孤独な晩年――。
病にむしばまれていく体――。
赤いエアカー。
車の渋滞――。
ハイウェイの〝爆走〟――。

かすむ目――。
その前を、一瞬飛んでいく白い鳩――。
ハイウェイの高架から落ちるエアカー。
知るはずのない未来の自分がそこにあった。
そして暗闇の中に白々と浮かび上がるパリの街――。
きしむ階段――。
女のうめき声――。
……ママ……、ママ……
幼児の声――。
「なかなかいい娘になりそうじゃねえか」
目の前にのびてくる男の手――。
「さわるんじゃないよ！　この娘は売り物じゃないんだ！」
女の絶叫――。
女の手に握られたナイフの光――。
幼児の火のついたような泣き声――。
それは、記憶に残っていないレミーの時間だ。
それすらが、今、燃え上がりながら、よみがえり、焦げ、ただれ、消えていく。
さまざまな苦悩と苦痛と苦闘を経験するレミーが、一瞬の時になって襲ってくるのだ。
レミーの耳元で老婆の声が響いた。

「今、お前の全てが、炎とともに燃えつきていく。お前の運命は変わらぬ。わしらがいる限り……」

「変えるわ！」

レミーは四十四口径を老婆に向けた。いきなり撃つ。

老婆の体ははじけた。が、声は響き続けた。

「変えられぬよ。どうあがいても、あの時のようにな」

……あの時？……。いつ？　いつの声……

闇の中にしゃがみ込んでいる女の子の姿が浮かんだ。

獣と共にいた女の子だ。

「誰もこない……。誰もいない……。とっても静か……。そか……、わたし死ぬんだ……。体が冷たい……、とっても寒い……。あきらめよう、わたしは、こんなふうにしか生きられなかったんだから……」

レミーは、かぶりを振った。

「あれが私？　うそ……、違うわ……。どこかが違う……」

老婆の声が低く流れる。

「なにが違う……。わたしはもう助からない。わたしはもう死ぬ」

レミーは銃を構える。

指先がしびれ、ぶるぶるふるえている。

「違う、あれは私じゃない」

撃つ!
轟音とともに女の子の体はちりぢりに吹き飛んだ。
女の子の声だけが、耳の中を走り抜ける。
「なぜ、どうして? どうして、私じゃないの?」
獣がうなり声をあげる。
「なぜ、どうして? どうして私じゃないの?」
女の子の声が叫びに変わった。
獣は牙をむき、レミーに飛びかかった。
レミーは、そののど首に四十四口径をぶちこんだ。
獣は血へどを吐きながら、レミーを赤い目でにらみつけた。
神殿の外壁を炎が走った。
と同時に、獣の体がみるみるふくれ上がっていく。
獣が吠える。
すさまじい雷鳴と風が巻き起こり、レミーと真吾、キリー、ブンドルの体は、木の葉のように宙を舞った。
「運命からは逃げられぬ。決してな」
老婆の姿が、女の子と共に現れた。
その時。
「カアッ!」

一声鋭く鳴いて、カットナルのカラスが獣に向かって突っ込んでいった。
獣の目にくちばしをつき立てようと、まっしぐらに降りていく。
だが、獣は一瞬早く前足でカラスをはじき飛ばした。
カラスは、もう一度の攻撃を狙って空に舞い上がった。
「不吉なもののくせに、運命に逆らうとは……」
老婆がうめいた。
女の子がじれたように身をゆすって絶叫した。
「みんな嫌いだ！　みんな死んじゃえ！」
時を告げる鐘が狂ったように鳴り、祈りの声が天を地を圧した。
神殿が、崩れるように獣と一体化して、ふくれ上がった。
砂嵐が吹き荒れる。
レミーの体は砂と風にもてあそばれながら、宙を飛んでいく。
やがて、砂嵐がぴたりと止んだ。
レミーの体は大地にあおむけに叩きつけられた。
背中の激痛にレミーはあえぎ、せきこむ。
と、いきなり、黒い影がレミーに覆いかぶさった。
黒い手が目の前にのびてくる。
「いい娘になったじゃねえか。だがな、運命は変えられぬよ、街のレミーよ」
ホテルのロビーにいた、あの警官だ。

警官の手が、レミーの首をぐいぐいしめる。
レミーは腰の銃に手をやった。
……手が、指が動かない……
レミーは、指に渾身の力を入れた。
銃が動いた。
銃を覆いかぶさっている警官との間にこじ入れる。
引き金を引く。
警官の体は胸をつきやぶられ、後ろにふっとんだ。
レミーはよろけながらも、やっと立ち上がった。
いつの間にか、そこは街の門の外——あの墓場のある原野だった。
……街から出られるのは墓場で眠る時だ……
レミーは、目の前に倒れている警官の言葉を思い出した。
その時、獣の咆哮が空気を揺るがした。
街の門に、巨大な獣がそそり立つように現れた。
獣は赤い血走った目でレミーを見すえた。
足元には、街の群衆が手に手に武器を持ち祈りの声をあげながら、レミーに向かって歩いて来る。
レミーは右手に持った銃を見た。
指が引き金にこびりついて動かない。
さっきまで感じた指のしびれもない。

……指が折れた……。駄目……。もう銃は持てそうにない……
その時だった。
背後の小高い丘の墓石の陰から声がした。
「しっかりしろ、レミー。お前はここで休んでいろ」
真吾がショットガンを片手に現れた。
「そうさ、俺たちがついている」
いつものウインクで、キリーが現れた。
「わしらもな」
カラスを肩にしたカットナルとケルナグールだ。
その後ろにはブンドルがいた。ブンドルは黙って刀を抜いた。
五人は丘を降りてきて、レミーの傍らに立った。
ブンドルはレミーを見つめ、
「レミー。私は、私に来た運命の手紙の日時をあなたに言わなかったが、今こそ言おう。それは、きのうだった」
「えっ？」
レミーは、ブンドルを見つめ返した。
「だが、私は今日も生きている。レミー、あなたも生きられるはずだ」
「ブンドル……」
「分かったね」

ブンドルはやさしく微笑んだ。
レミーの険しかった表情がやわらいだ。
肩をすくめて頷いた。
ブンドルも肩をすくめた。
そして群衆の方に目をやると、顔色一つかえず日本刀の先を下に向けたまま群衆へ向かって歩いていく。
「自分を捨てるなよ……、レミー」
真吾はそう言ってブンドルの後を追った。
「フフフ、また会おうぜ」
キリーが続く。
カットナルがレミーの前に来て頭をかいた。
「なんちゅうか、その……」
ケルナグールが横から割り込んだ。
「レミーさんの別れは、シー・ユー・アゲインがよく似合う」
カットナルがケルナグールのわき腹をひじでつついた。
「このう、この、気取ってからに」
「グハハハハ……」
ケルナグールの高笑いは祈りの声にも負けていない。
「いくぞ」

カットナルは走り出した。
「オーッ！」
二人は、群衆の中へ飛び込んでいった。
〃カア〃
カラスもレミーに向かって一声鳴いて、主人の後を追った。
……みんな……
レミーは、五人の後ろ姿が、まぶしかった。

＊

墓場の穴の中で感じていた五人の男の子達の気配が、次第に遠ざかっていく。
「あ、みんな、どこへ行くの？」
レミーは、五人の男の子達に話しかけた。
でも、もう答えは返ってこなかった。
それぞれ、またひとりぼっちのところに戻っていったのかもしれない……とレミーは思った。
レミーは闇の中で、微笑んだ。
……サンクス、みんな……。また会おうね。今まで会わなくて、これから会うかどうかも分からないけど……
それを思うと、もうレミーは寂しくはなかった。

レミーは胸の中からどんな声が聞こえようと、あきらめないことにした。

第6章 最後の銃弾

特殊診療室のベッドのまわりに、今、元ゴーショーグンの五人の戦士達が集まっていた。
ベッドの上のレミーはぴくりとも動かない。
真吾がベッドにすがるようにして呼びかけた。
「レミー、思い出せ！　俺達が戦った日々を……。けっしてあきらめなかった頃を……」
「ガッツだ、レミー！」
キリーの叫びも空しく、心脈計の動きはますます弱まり、かすかに動いているだけだ。
誰の目にも数分後の結果は明らかだった。
カットナルは、うつむいてかぶりをふるだけだ。
ケルナグールはベッドサイドのイスに坐って、ぼんやりと壁の時計を見つめている。
心脈計を見るよりも、時計の点滅を見て、それをレミーの生命の鼓動だと思いこみたかった。
ブンドルは、レミーに背を向けていた。
だが、思わず診療室の窓の強化ガラスに叩きつけたこぶしは、弱々しくふるえていた。

*

墓場の中で、五人の戦士は街の群衆と戦い続けている。
墓場の丘の上で、手と背中の痛みをいやしているレミーに、群衆を近づけまいと必死なのだ。
真吾のショットガンは火を吐き続け、銃身が赤く焼けている。
キリーも、得意のナイフでは追いつかず、マシンガンを二丁持って乱射している。

ケルナグールとカットナルも手持ちの小型爆弾が残り少なく、今はマシンガンを撃ち続けている。
カラスも、一体、何人の目をついばんだことだろう。
あざやかに舞っていたブンドルの刀のきらめきもにぶくなってきた。
群衆の数はあまりに多すぎるのだ。
「これじゃ、らちがあかねえぜ」
キリーは弾の切れたマシンガンの弾倉を投げ捨てた。
「敵の本体はあそこだ」
ブンドルが獣を指さした。
「よし、いくぞ！」
真吾は獣に向かって走り出した。
四人も群衆をけちらしながら、後に続いた。
獣が吠える。
砂嵐が巻き上がる。
五人は吹き飛ばされ、墓石に叩きつけられた。
それでも五人は立ち上がる。
獣に向かっていく。
吹き飛ばされる。
立ち上がる。
決して負けていない。

三度、獣に突っ込んでいく。
丘の上でそれを見つめるレミーは、もうじっとはしていられなかった。
「私もいかなきゃ……」
レミーは銃を握りしめ、丘を降りていった。
レミーの耳元で女の子の声が聞こえる。
「レミー、いよいよ、その時が来たわ」
「なにをやっても無駄じゃ、あきらめることじゃな」
老婆の声だ。
レミーは、声を振り払うように走りだした。
獣は五人の男達を砂嵐で宙高く放り上げると、レミーに向きを替えた。
レミーを見降ろす獣の目には、無謀に逆らう獲物へのいたぶりすら見える。
舌なめずりする口から、よだれがしたたる。
レミーは獣をにらみすえると、獣の眉間に狙いを定めた。
指にまるで力が入らない。
歯を食いしばる。
撃鉄が、動いていく。
シリンダーがゆっくり回る。
指の骨が音を立てる。
引けた！　引き金が！

撃鉄が落ちた。銃弾が発射された。

獣の眉間で肉のはじける音がした。

命中！

レミーの体は、銃の反動で後ろに飛ばされ、墓石の上に肩から落ちた。

肩と背中の痛みでかすむ目で見上げる獣に、弾丸は命中したはずだ。

だが、何事もなかったように、前足でレミーを打ち払おうとしている。

レミーは、とっさに身をかわす。

レミーの背後の墓石が、獣の足で粉々に吹き飛ばされた。

さらにレミーを踏みつぶそうと迫る獣の足を、転がってかわす。

身を起こして走る。

が、前からは群衆がやって来ている。

レミーは振り返って、獣を狙って銃を構えようとした。

肩に激しい痛みが走る。

……肩もやられた。もう撃てない。撃ったところで何の効きめもない……。もう駄目……

群衆はすぐそこだ。

老婆の声が聞こえる。

「お前は、見ず知らずの男達の牙に身も心もずたずたに恥ずかしめられ、ばらばらになって死ぬのだ」

レミーの脳裏に、死亡予告の写真がよぎった。

レミーは叫ぶ。
「いやだ！　わたしは負けない」
レミーは左手で無理矢理右手を持ちあげ、銃を獣に向けた。

墓場の丘の上から、老婆と女の子はそんなレミーを見降ろしていた。
女の子は老婆に訊いた。
「どうして、ああまでして戦うの？」
「わたしには考えもつかぬことじゃ……。さからわぬのが楽じゃのに……」
「レミーは、あきらめないわ」
二人の後ろで声が聞こえた。
二人は振り返った。
七歳のレミーが立っていた。
「どんなことがあっても……」
七歳のレミーは二人を見つめ、きっぱりと言った。

レミーは、銃を撃つ。
銃弾は獣の眉間に叩き込まれる。
反動で、銃が手から離れ後ろに飛ぶ。
レミーの手は皮がむけ、血管が破れ、血だらけだ。

レミーは、手を押さえてうずくまった。
見上げる獣の眉間は二度も命中したはずなのに傷一つない。
レミーは、後ろに飛んだ銃のありかを追って振り返る。
十字架の墓石の下に転がっている。
「もうアウト、弾もないし……」
どんどん群衆が近づいて来る。
いけにえを前にした群衆の目は、獣そのままに血走っている。
レミーはうつむいて目を閉じた。
だが次の瞬間、目の前で爆発音がした。
目を開けたレミーの前に、数人の群衆が倒れている。
群衆の中で、真吾が、キリーが、カットナルが、ケルナグールが、そしてブンドルが戦っている。
砂嵐で吹き飛ばされた戦士達は、四度(よたび)戻ってきたのだ。
戦士達は、もう互いに口もきかない。表情も変えない。ただ黙々と群衆の中で戦い続けている。
……仲間達が戦っている……
レミーは五人を見つめた。
……誰一人、自分を捨てていない……
レミーは墓石の下の銃に目をやる。
胸のロケットを握りしめる。
いや、そこにはロケットの代わりに弾丸が一発ある。

……あと一回、あと一回だけ……

レミーは力をふりしぼって立ち上がると、転がるように墓石の傍らに行く。

銃を拾う。

もちろん、まともには持てない。

体中が痛み、きしみ、立っていることすらおぼつかないのだ。

レミーは墓石を背に寄りかかると、ぶるぶるとふるえる手でシリンダーを開いた。

まともに持っていないから手さぐりだ。

空の薬莢を落とす。

五人の戦士に妨げられながらも、群衆はじりっじりっとレミーに近づいてくる。

獣もうなり声をあげながら、一歩一歩迫ってくる。

レミーは胸の弾丸を鎖からひきちぎる。

シリンダーに弾丸をこめようとする。

指がふるえて、弾丸の先がシリンダーにつかえて、なかなか入ってくれない。

……六つの穴のどれでもいいから入って……

弾の先のつかえがとれて、弾丸がスッとシリンダーにおさまった。

レミーはシリンダーを閉じた。

だが、六つの穴のどこに弾丸が入っているのかは分からない。

レミーは服の肩の布をひきちぎって、銃と手を固定する。

もう引き金を引く力はないかもしれない。

まして、最初の一発目に弾が発射されなければ、二度目の引き金を引く力も時間もないだろう。
獣はもう、レミーに飛びかかる体勢に入っている。
レミーは銃のシリンダーを太股にこすりつけた。
シリンダーがカラカラと回る。
シリンダーの回転が止まる。
強引に動かぬ手を引き上げ、胸の前に突き出す。
獣が牙をむいてレミーに飛びかかった。
……一回だけ……。弾よ出て！……
引き金を引く。
手を固定した布に血がにじむ。
轟音――。
弾丸が出た。
獣の悲鳴が砂漠の空気を切り裂いた。

*

レミーがパリの墓場の穴に落ちてから、どれほどの時間が経ったのだろうか。
お腹はずいぶん減ったが、膝小僧を抱いてうずくまっていれば、まだ我慢できた。
いきなり頭の上で物音がした。

……あら？……

腐った落ち葉や湿った土が落ちてきた。

頭上がぽっかりと明るくなり、陽の光が差し込んできた。

レミーは立ち上がった。

スコップを持った男達がのぞき込んでいる。

「そこに誰かいるのかい？」

レミーは元気よく答えた。

「ええ、私です。レミーです」

男達は顔を見合わせた。

「こんな所に。信じられねえ」

「よく生きていたもんだ」

墓場の下を通る下水道用に掘られ、ストライキで何年間も工事が中断されていた穴から、レミーは助け出された。

穴に落ちて二日経っていた。

＊

特殊診療室の心脈計が動きを止めた。

五人の戦士達の時間も、一瞬、止まったようだった。

医師長が診療室で起こった事実だけを言った。
「まことに残念ですが……」
「いろいろと世話になった……」
カットナルは、医師長に型通りの挨拶をするよりなかった。
それから五人は黙りこくって、一人、また一人と、のろのろした足取りで診療室を出ていった。
……あ、みんな、どこへ行くの？……
レミーの中で何かが叫んだ。
心臓は止まっていたが、何かが叫び続けていた。
……**あ、みんな、どこへ行くの**？……
……この言葉は、いつかどこかで聞いたことがある……
レミーは思い出そうとした。それが、レミーの引き金になった。
レミーの中で再び何かが叫んだ。
……**サンクス、みんな、また会おうね**……
……みんな？……。みんなって、誰？……
レミーの中に何かが浮かんできた。
頭上が明るくなっていくような気がした。
誰かの声が聞こえた。
「そこに誰かいるのかい？」
レミーの中で何かが答えた。

……**ええ、私です。レミーです**……

……そう、そうだわ、私はレミー、私はレミーなんだ……

レミーの中の何かは、今、暗闇（くらやみ）の中から砂漠にいた。

……**いやだ！　わたしは負けない！**……

……えっ？　それは、私が思ったこと……。私は負けない……。そう……

レミーは繰り返した。

……**どうしてああまでして戦うの？**……

……えっ？……。それも私が思ったこと……。どうして私は、ああまでして戦うの？……

……**わたしには考えもつかぬことじゃ……。逆らわぬのが楽じゃのに**……

……そう、逆らわない方が楽……。もう、この年になったら……。ええ、これも私が思ったこと……

レミーは混乱した。

……一体、どれが私なの？……

レミーの中の何かが、きっぱりと言った。

……**レミーはあきらめないわ、どんなことがあっても**……

だが、レミーの中の何かは迷っていた。

またレミーの中の何かが訊（き）いた。

……**どうして、ああまでして戦うの？**……

何かが叫ぶ。

……いやだ！　わたしは負けない……

……どうして……

……私です、レミーです……

……あ、みんな、どこへ行くの？……

……サンクス、みんな、また会おうね……

……どうして……

……レミーです……

……みんな、また会おうね……

……レミーです……

……また会おうね……

レミーの中でレミーの言葉が駆けた。

……わたしは負けない……

レミーは、引き金を引いた。

轟音が響いた。

獣の悲鳴が聞こえた。

獣の悲鳴は見知らぬ砂漠の街を消した。

＊

襲いかかる群衆も、今は一人もいない。
三つの太陽も今はなく、空は鉛色に曇っている。
砂漠に残されているのは墓地だけだった。
撃ち終えた四十四口径をホルスターにおさめたレミーの前に、五人の戦士達が集まって来た。
レミーは言葉につまって、何を言っていいか分からなくて、仕方なく肩をすくめてつぶやいた。
「サンクス、みんな……」
五人も肩をすくめるだけだった。
何も言葉を必要としなかった。
六人は、目の前に広がる墓場を見つめた。
レミーがポツリと口を開いた。
「ブンドルさん」
「なにかね」
「あれ、うそなんでしょ？」
「ん？」
「あなたの手紙が、きのうだってこと……。わたしをはげますために言ったんじゃ……」
ブンドルは、レミーの言葉をさえぎるように答えた。
「さあね。いずれにしろ、あなたは生きている。ここに墓も用意されているというのに……」
「えっ？」
ブンドルは倒れている墓石を見つめて、言った。

「レミー・島田、ここに眠る……」
それは確かにレミーの墓石だった。
「ほんとだ……」
レミーはニッコリ笑った。
そして、指で銃の真似をした。
「パン！」
倒れている墓石を撃った。

*

その時、特殊診療室のレミーの心脈計がかすかに動きだした。
医療器具の後かたづけをしていた看護婦の足が止まった。
看護婦は心脈計をのぞき込み、ベッドのレミーを見つめた。
もう一度、心脈計を見た。
正常に動いている。
青ざめてベッドを見る。
ベッドの上のレミーが動いた。
看護婦の手に持っていた医療器具が床ではじけた。
看護婦は声にならない悲鳴をあげながら、後ずさってドアまでたどりついた。そしてドアを開く

やいなや鉄砲玉のように飛びだしていった。

闇の中から明かりが見えて広がっていく。
レミーは目をしばたかせた。
白い天井が見える。
レミーは起き上がった。
あたりを見回す。
酸素吸入器や心脈計、レミーにとって見たことのない医療器具が部屋中に置かれている。
レミーは、体中についている生命維持装置や、検査用のチューブや電線をはずすと、ベッドから立ち上がった。
医師長が駆け込んできて呆然と立ちすくんだ。
レミーは振り返って医師長の方に向いた。
レミーの顔を見た医師長は、へなへなとその場にへたり込んだ。腰が抜けたのだ。
肩をすくめたレミーは特殊診療室の外へ出ていった。

ナースステーションでは看護婦が電話をかけている。
「ええ、霊柩車も特別-紋葬儀もキャンセルです……。キャンセルなんて聞いたことない？　こっちだって前代未聞です……。責任とれったって仕方ないじゃありませんか。生きちゃってんだもん……」

そのすこし前――。

歴史博物館の時のモニュメントがいきなり崩れ落ちた。

相変わらず客のいない平日で、けが人は出なかったが、唯一の目撃者の案内嬢は、モニュメントが崩れる瞬間、獣の悲鳴のようなものを聞いたという。

後で分かったことだが、展示場の片隅のショーケースも、その時、粉々に吹き飛んでいた。

だが、そこに何が展示されていたのか、憶えている者も、記録さえも一切なかった。

＊

二人の少女と老婆が、砂漠の墓地に立っていた。

七歳のレミーは、女の子にぽつりと言った。

「あなたは忘れていたのよ」

「えっ？」

「わたし、あの時、あきらめなかったの。生きていればね、今まで会ったことはないけれど、これから会うかどうかも分かんないけど、もしかしたら誰かさんと会えるかもしれないでしょ」

女の子はつぶやいた。

「そう……」

「うん……。でしょ？」

レミーは老婆を見上げた。
老婆はかすかに頷いて、その姿は消えた。
レミーは女の子に微笑んだ。
「ね？」
「そう……」
女の子に、レミーはきっぱりと頷いた。
「うん」
砂漠の墓地は、みるみる消えていった。

＊

「終わっちまったな……」
真吾のつぶやきにキリーが答えるでもなく頷いた。
「ああ、なんだか、みんな終わっちまった……」
五人の元戦士達は足をひきずるようにして、中央病院の前を歩いていた。
他の三人は、脱力感で口を開くのもつらかった。
その時だった。
後ろから軽やかな足音が追ってきた。
「みんな、みんな、待って！」

若い女の声だった。
五人は足を止め、うつろに振り返った。
そこにレミーが立っていた。
それも、仲間だった頃の若く溌剌としたレミーが、見慣れた戦闘服で微笑している。
いつの間にか、振り返ったそこには、中央病院はおろか、巨大都市シィティの姿も消えていた。
レミーは、照れたように肩をすくめた。
「わたしも、一緒に行きたいんだ」
受ける五人も、仲間だった頃のままの戦闘服だ。
ショットガンの先を軽く動かし、挨拶代わりにして微笑んでいるのは真吾だ。
キリーはニヒルに笑い、もちろん、ウインクを忘れない。
頭をかきながら口元をゆるませるカットナルの肩にはカラスがいて、一声鳴いてはばたいた。
ケルナグールはほほを赤らめて、いつもの豪放な高笑いだ。
そして、長い金髪を手の平で払ってからレミーを見つめるブンドルの顔にも、微笑が浮かんでいる。
やがてレミーと五人は、肩を並べ歩き始めた。

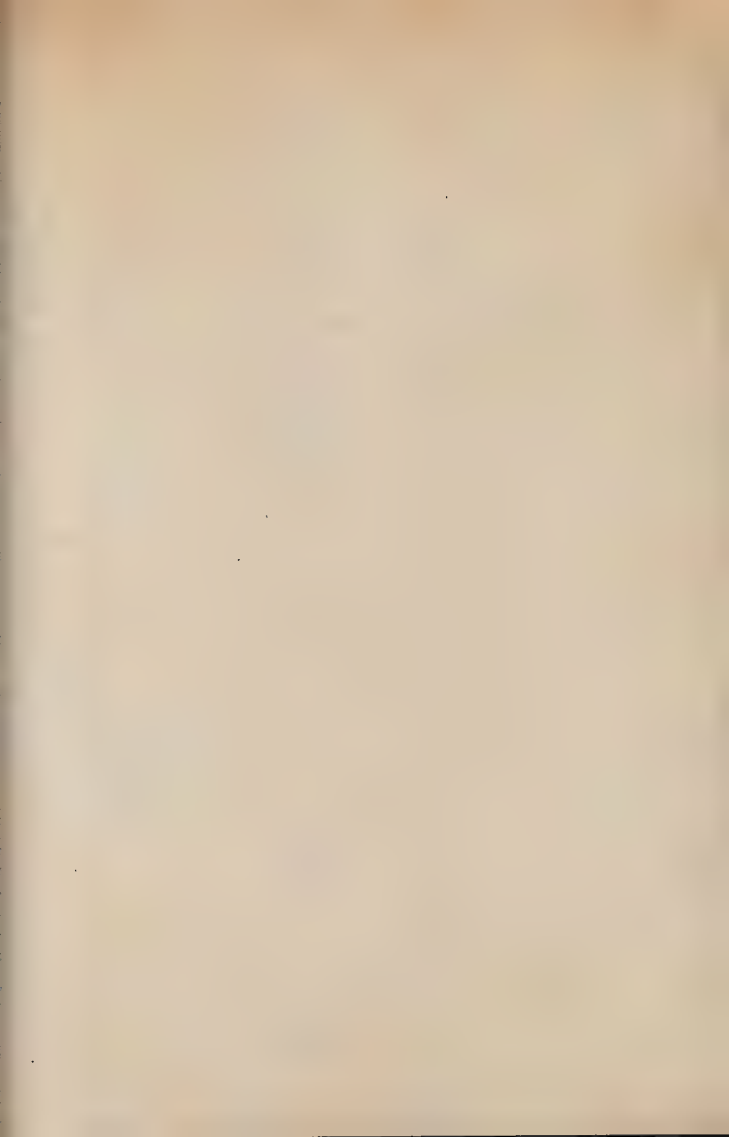
エピローグ

女が一人。
時の砂漠に立っている。
女の年齢がいくつなのか、それはこの時の砂漠の中ではどうでもいいことだ。
女自身も、年齢を知っているかどうかも確かではない。
ただ、女の名はレミー・島田といい、時の砂漠を一人だけで生きてきたことは確かだ。
レミーにとって今、時は止まっている。
だが、やがて、微風が空気をわたり、砂の流れが時を刻み始める。
微風はすぐに嵐に変わり、砂漠は時の砂嵐が吹き荒れる。
何も見えない。
「ここ、どこ?」
レミーは呟く。
だが、レミーはあわてない。
レミーは、一発の銃弾を砂嵐に向けて撃つ。
やがて五発の銃声が聞こえ、五人の男が砂嵐の中から現れるだろう。
「ひどい嵐だ。くっついていないとはぐれるぞ」
一人の男が言うはずだ。
「ここは、どこなの?」
レミーが訊く。
「さあな……」

もう一人の男が言う。
「これから私達、どこへいくの？」
レミーが訊く。
「さあ分からぬ。いつものことだがな」
もう一人の男が語るでもなく、つぶやく。
残る二人は肩をすくめるだけだ。
さらに砂嵐は激しさを増すだろう。
だが、この時の砂漠をさまよう彼らは、進むことを止めない。
六人は、自分のやり方で生き抜くことを、けっして止めない。
それがどんな時の砂漠でも——。

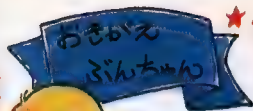
そして、果てしない時のどこかで、彼らの旅は続いている。

AND
SEE YOU AGAIN

戦国魔神ゴーショーグン時の異邦人(エトランゼ)（完）

ゴーショーグンよ永遠に

by なにわ♡あい

「その後の症候群」(『その後の戦国魔神ゴーショーグン』収録)以来、2年間の沈黙を破り、アニパロ界の鬼才・なにわ♡あいが贈る、愛と感動にあふれる究極のパロディマンガ!「ゴーショーグン」パロディは、本当にこれで最後です……。

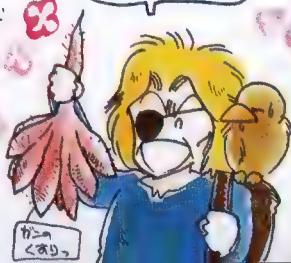
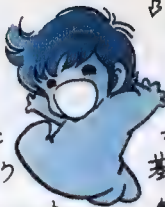
おきかえ ぶんちゃん

違う連中が ベタベタ くっつくでなく
「何かの時には一緒」という 絆意識を
ふりまわすでなく それでも 互いを 認めあって
決して 捨てたりすることはない。…と書くと
なんとも シリアスなのだけど やっぱり 眉間に シワの
よらないところが 何とも いえないのです♡・・

本当はね、できれば みんな そのまま 地球に
いてほしかった。ここで 人間として 幸せに ちょっと
不毛に 生きているのって 悪くないから。だからこそ
あの「一年後」が うれしいなって 思えたのだし。
でも、やっぱり 戦うしかないのなら、そして
それが 紛れもなく 「自由である」自分の
存在の ためならば それも いいかな と
思っても みるのです。

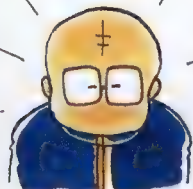
ところで、本当に 地球から いっちゃったのかなァ。… 私 やっぱり ここ 好きなんですよ。
皆様も よろしければ 一度 お帰りになって
みませんか? ちっとも 変わってない
しょうもない 私達 地球人のところへ。
お待ち申しあげて おりますの♡

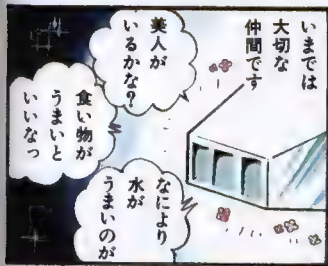
かしこ

といって いいのかな?

なにわ・あい

☆☆ 4年も昔のことになるんですね―… TVシリーズ「戦国魔神ゴーショーグン」が世に出てから。でも、そのあとも確実に生きぬいている連中がいるっていう実感があると そんな『ムカシ』っていう☆気がしません。

ビムラーエネルギーの使用をめぐって敵味方に参戦しあうグッドサンダー基地 vs ドクーガ(悪の組織…)。結局はケン太が宇宙意志の一員となり とんでいったことで「敵」と「味方」という関係じゃなくなっていますけどね。(この続編たる「その後…」もよんでくれると もっとよくわかってもらえるかなっ♡… と CM☆)

機械(メカ)が友達だ、という少年ケン太がやがてビッグソウルのえへと飛翔してゆく… だけど そういうこともだけれど 何よりも自分達が自分達の真実に従って生きている。おかしな状況や軽口の中でも…。 だからこそ「死んでも生きてやる!」って台詞がとっても生きてしまう。生まれも育ちも全然

旅のとちゅう……

うるせーっ
来るな
ばっきゃろおお
ビッグソウルは俺達のめーわくですっ
…せっかくビムラーエネルギーもってきたのに…
うちゅうせん

どーしたブンドル
元気がないな
……バラがない
え?
我が美学を支える みの赤い宿敵 血のごとき風合 手ざわり 色ありの中 流れるごとく 移ろう 生命の
わかったわかった
バラならこの星でみたぞ
うそはみにくい
写真をとった
お前らにしては気がきいている♡
……ずいぶんなセリフじゃの
品種改良するそうだ
なによこれ——っ
がんばってくれたまへ

カットナルはカラスがすきです
仲間がいなくてつまらんじゃろ
かあ
カラスもカットナルがすきです

この星にはお前の仲間がいそうじゃの
へえー

ドウッ
そうだーっ
やれーっ
まけるな
こっちの戦いはどうするんだ!?

勝利!!

ボス!!
よくやった よくやった

みんなついてくるそうじゃ
はーー
よかったねえ

カットナルは?
よばなくていい……

ケルナグールは
地球で美人の おくさんと 別れてきました

さみしく ないかね
いまさら!
ワシも 男じゃっ

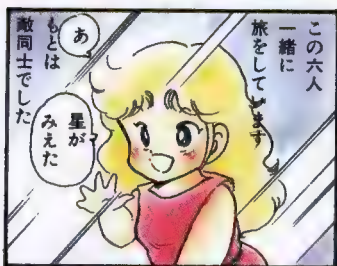
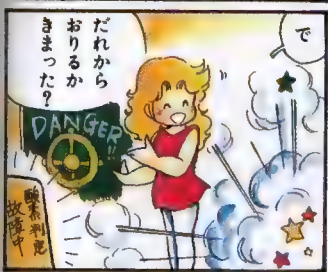
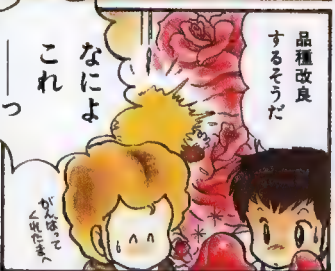
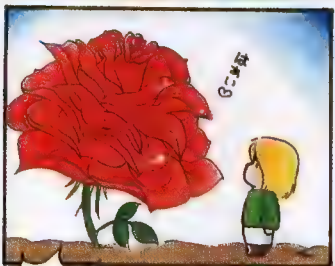
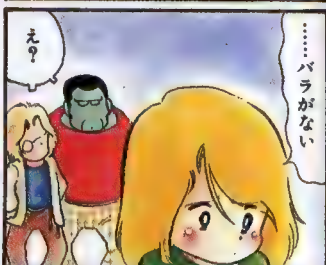
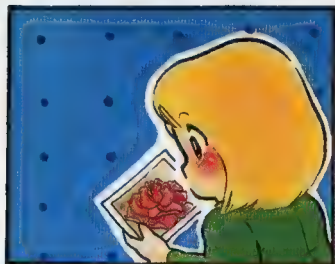
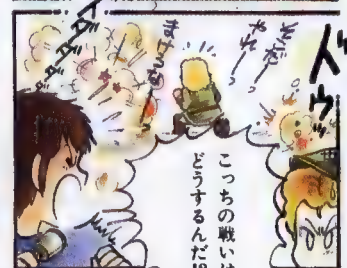
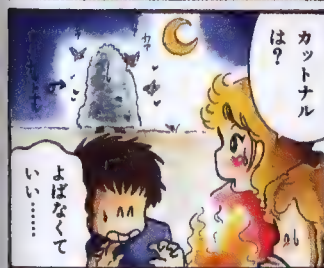
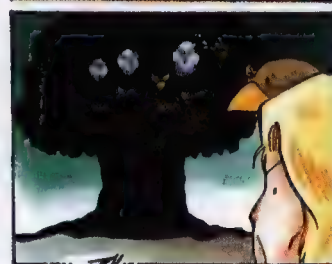
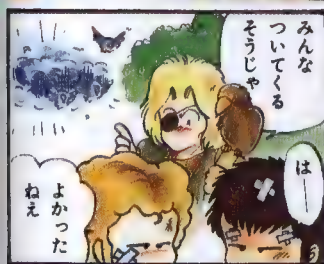
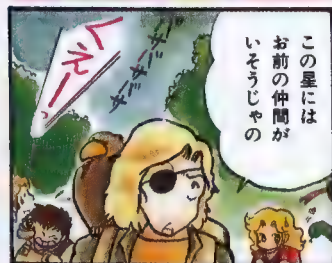
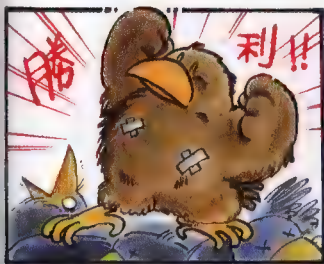
……しかし
ぽっん
みせばが ないの……

安全第一
かげぜん

3対3でした
おーい
ソーセージ やけたぞお

いまでは みんな 一緒です
ん やけたぞい
料理は 芸術だ♡

…… …… ……
…… …… …で?

メシも たけん奴は 人間じゃ ねえっ
えーい うるさい
戦う か!?

SEE YOU AGAIN!

あとがき

「ゴーショーグン」の五冊目が、やっとできあがりました。
とはいえ、今回の「時の異邦人(エトランゼ)」は、今までの小説のPART5、続編という訳ではありません。
この作品は、TV放映以来、実に四年ぶりに映画化(ビデオ)されるのですが、かといって、TV版「ゴーショーグン」の続編でもなく、まして〝四年後のゴーショーグン〟でもありません。
では、なんなのか……。
大袈裟(おおげさ)なことは言いたくありませんけど、〝ゴーショーグン〟という作品のメンタルな世界……ゴーショーグンのテーマのようなものを書いたつもりだったりして……やっぱ大袈裟だな。
ま、テーマなんて、オーバーな言い方をすると、慣れない正座をさせられたようで足がしびれ、おへそがかゆくなり、ずっこけて、目を回しそうなので、気楽に、お楽に、ねそべって、という感じのテーマですけれど……
ある友人に「『ゴーショーグン』って、いったい何なの？」と聞かれたことがあります。
「一体なんなんでしょうね」
作者も首をひねってしまいます。
僕の代りに、色々な人の御意見を聞きますと……
「破壊と殺りくをよしとする心を、子供に植えつける俗悪電動紙芝居」……これ、日本のアニメーションをはじめて見た、ドイツのかたぶつ学校教師の言葉。
ま、これは極端な例としても……

「ロボットのおもちゃを売る為の、30分CMアニメーション――」
……違うと言いきれないところがつらい……
「26回の放映中に三回も放送時間が変わった、悲惨なマイナーアニメ――なにせ、変わった先が、平日の午前中……一体誰が見るんだろう」
……ええい、好きで時間を変えたんじゃないわい。
「BGMの予算が少ないので、やたら既成のクラシック音楽を使った、お手軽アニメ――」
……これは違います。クラッシックは、最初からの狙いで、音響監督の松浦典良氏は、使える音盤をさがすのにずいぶん苦労されました。
「登場人物の台詞がアドリブばかりのひょうきんアニメ――」
……なるほど。
「メカはともだち、そればっか」
……ふむふむ。
「少しまじめで、ほとんど、いいかげんな――」
……かもしれんな。
「これは断じてSFではない……これをSFと言うのはSFへの冒瀆(ぼうとく)である」
……SFだなんて言わないもん。
「パロディでふざけすぎ――」
……好きなんですよ。いいじゃないすか、
「えーっ!?　アニメージュの賞を取った？　うそじゃあ〜」

……僕も、同感です。

「ブンドルサマぁ～！♡♡♡♡……」

ご勝手に――

「レミー命！」

……そうはいかんぞ。僕だって！……

その他、御意見続出、わいわいあがやがや――でも、それも放映が終われば、忘れ去られるのがマイナーアニメの運命みたいなものです。

ところが、「死んでも生きてやる」

最近のロボットアニメのおきて破りをして主要人物が誰も死なないという「ゴーショーグン」のメンバーは、その後も小説の中で、ロボットはおろかＴＶ版の主役だったケン太という少年もいないのに、生き続けてきました。

「ロボット〝ゴーショーグン〟が出ないのになぜゴーショーグンなんだよ」

……なぜなんでしょうねぇ？

作者も首をひねります。

「『ゴーショーグン』って、いちおう少年向きのアクションアニメだろ？　けど小説の第三作『狂気の檻（おり）』なんて、子供に読ませていいのかよ」

……確かに子供には刺激が強すぎるかも……子供向きのテーマじゃなかったかもね……

作者が、ふらふらしているから、編集部だって大変です。

過去四冊の表紙やさし絵を見れば、分かります。

浪花愛さんの可愛い絵から天野喜孝氏のシュールな絵へ、いつの間にか変わり、元は、本橋秀之氏他のスタジオZ5のみなさんが、作ったキャラクターデザインでしたが、上条修氏キャラ、いのまたむつみさんキャラ、更に更にｅｔｃを経て、しかもそれぞれが魅力的なので、どれが本物だったのか、作者にもさっぱり分からなくなっている始末――

登場人物が活躍するストーリーにしろ世界にしろ同様、まるで精神分裂であります。

しかし、どんな顔をしようと、どんな星を訪れようと、やっぱり、ゴーショーグンのメンバーは、ゴーショーグンの六人組なのです。

どうやら彼らは、生きている世界のストーリーや題材がどんなものであろうと、自分は自分であることを、けっして止めない人達のようです。

さて文字の世界の小説の中で、四年間、生きていた六人組が、また、別の世界をさまよえというお呼びがかかりました。

制約の多いテレビの中ではない、映像（ビデオ）の世界で生きろというのです。

テレビのラストシーンの「See you again」が、実現しちゃったんです。

「どんなところに行こうと俺達は俺達さ……。映像だって、小説だって……」

彼らの声が聞こえます。

〝俺達は俺達〟ってどういうこと？

とっ散らかって、本当に精神分裂を起こしかけていた作者も、これを機会に「ゴーショーグン」って何なのか、自分の中で、おさらいすることにしました。

上手（うま）くいったかどうか、自信はまるでありませんが、レミーという一人のヒロインを通して、

〝ゴーショーグン〟マインドを旅してみました。
本当は、真吾を通してでも、キリーを通してでも、それこそ、ブンドルでも、ケルナグールでもカットナルを通してでもよいのですが、レミーを選んだのはそこは、それ早い話が僕の趣味です。
文章による小説、絵による劇画やコミック。そして、映像による映画は、それぞれ別々の表現方法です。
映画化の機会をあたえられた僕たちスタッフは、もっとも映画らしい方法で、〝ゴーショーグン〟マインドを描こうと思いました。
映画らしい方法だからといって、めったやたらとスピーディに動かそうというのではありません。
映画というものは、ある一定の時間の中で、時が絶えず流れて、一つの世界を見せてくれます。
映画の中には時間の流れがあります。小説のように、前に戻って読みかえしたり、読むのを、止めて考える暇はありません。
えっ？　ビデオで、ストップさせれば、時を止められる？……スローもあれば、巻戻しもできる？……そ〜いうこと言われると本当に困っちゃうんですが、やっぱ、そ〜いうのって、本当の映画の見方じゃないと思うんですけどね。
ともかく、一定の限られた時間のわくの中に、様々な時間の流れと映像をモザイクの様に閉じ込めて〝ゴーショーグン〟マインドを描こうと思ったのです。
オットットットまた、オーバーな言いまわしになってきたぞ……。
ま、上手くいったら、オメデトさん。えっ？　ほとんど失敗？……ごめんなさい。そんな気楽な気持ちでやっちゃいました。

映画版の「時の異邦人」は、そんな映画的な方法を湯山邦彦監督がさらに工夫し具体的なイメージにしたものです。

そして、一定の時間の中に、様々な時の流れを散りばめるという方法を文章で、必死こいて、小説化したのが、この小説版「時の異邦人」です。

映像と文章は表現が違いますから、映画と小説も違うところが多々あります。

「時の異邦人」には、映画版と小説版の二つが生まれましたが、双児の兄弟だと考えていただければと思っています。

今回、僕としては、えらくあとがきが長く、映像、映像と書きましたが、みなさんの中の一人でも「時の異邦人」を見て、読んで、「あれはエエゾー」と言って下されればうれしいのですが……

(我ながら下らない駄じゃれ……反省……)

P・S

さて、この本を読んだ方の一人が「なんだか、これで『ゴーショーグン』は終わっちゃったみたいだね」などと言っていましたが……でも〝ドッコイ、死んでも生きてやる〟「ゴーショーグン」の連中です。本来の小説版は続いていますし、また、お会いできるとうれしいのですが……

では、いつも通りに——

SEE YOU AGAIN

首藤剛志

アニメージュ文庫

戦国魔神ゴーショーグン
時の異邦人

N-008

1985年4月30日　初版

編　者　首藤剛志

発行者　尾形英夫

東京都港区新橋四―一〇―一〒一〇五

発行所　株式会社徳間書店

電話〇三(四三三)六二三一(大代)

振替　東京四―四四三九二番

印刷　大日本印刷株式会社

製本

〈編集担当　高橋望〉

ISBN4-19-669540-XC0174(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

首藤剛志作品

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
またまた戦国魔神ゴーショーグン 狂気の檻
4度(たび)戦国魔神ゴーショーグン 覚醒する密林
いつかきっとPEACH BOOK
(「ミンキーモモ」より)
それからのモモ
(絵／わたなべひろし＆けいこ)

カバーイラスト＝天野喜孝
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷(株)

徳間書店
アニメージュ文庫
ISBN4-19-669540-X C0174 ¥380E
定価380円